



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』の研究
Author(s)	石垣, 佳奈子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13281号
Issue Date	2018-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13281
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72203
Type	doctoral thesis
File Information	Kanako_Ishigaki.pdf



博士論文〔課程博士〕

三卷本『枕草子』の研究

石垣 佳奈子

一頁〓四〇字×四〇行〓一六〇〇字（原稿用紙 四枚相当）
全 八八頁（原稿用紙 三五二枚分）

【目次】

序章・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第一章 聞き書きの臨場感―『枕草子』『円融院の御果ての年』	5
はじめに	
一 五味文彦説の検討	
二 一条天皇の服喪	
三 三巻本の本文	
おわりに	
第二章 三巻本『枕草子』『説経の講師は』の〈今〉と〈昔〉	14
はじめに	
一 諸本による「説経の講師は」段の位置づけの違い	
二 頻出する「今／昔」の対比	
三 「はじめつ方ばかり、ありきする人は」の本文と解釈	
四 「小白川八講」へのつながり	
おわりに	
第三章 三巻本『枕草子』『三月ばかり物忌しにとて』の段における「少将」をめぐる	25
―『落窪物語』との関わりから	
はじめに	
一 「少将」についての先行研究	
二 「少将」と『落窪物語』	
三 「少将」と「思君春日遅」、「ながめ」	
四 「雨」「雪」「文」の章段群	
おわりに	
第四章 三巻本『枕草子』『また、業平の中将のもとに』の段をめぐる	38
―章段配列との関わりから	
はじめに	
一 三章段の連続性と断絶性	
二 『枕草子』と『伊勢物語』	
三 章段配列が作り出す「定子崩御後」の時間	
おわりに	

第五章 『枕草子』「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」の段をめぐつて

―『うつほ物語』忠こそとの関わりから・・・・・・・・・・53

はじめに

一 堺本文との差異

二 物語との関わり

三 三巻本における二九五段の位相

おわりに

第六章 三巻本『枕草子』の〈始まり〉と〈終わり〉・・・・・・・・・・74

―三段「正月一日は」・二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」を中心に
はじめに

一 三巻本『枕草子』の〈始まり〉

二 中宮付き女房としての〈作者〉像

三 三段「正月一日は」の本文異同

四 二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」が想起させる〈作者〉像

五 三巻本『枕草子』の〈終わり〉の章段配列

おわりに

序章

『枕草子』の伝本には、現在、雑纂本の三巻本・能因本、類纂本の前田本・堺本の四系統があり、現在、注釈書の底本として使われるのは、ほぼ全てが三巻本である。

ただし、こうして三巻本が使用されるのは、昭和初期以降の傾向である。近世以降、古活字本は能因本から作られた本文が使用され、古注釈においても能因本系統の本文が使われてきた。加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』、北村季吟『枕草子春曙抄』は、いずれも能因本系統の本文を使用している。

このような『枕草子』を読む時に能因本を使用する流れは、現代注の時期になっても続いていく。武藤元信『枕草子通釈』（有朋堂書店、一九二一年）、金子元臣『枕草子評釈』（明治書院、一九二一年）、関根正直『枕草子集註』（六合館、一九三二年）、といった、明治、大正、昭和初期に出版された注釈書は、いずれも能因本系統を底本にしている。

だが、この流れは昭和初期に至って大きな転換点を迎える。一九二五年には校註日本文学大系『清少納言枕草子』において、三巻本の本文が使用された。さらに、池田亀鑑の一連の研究（注1）が出たことを契機として、諸注釈書で使用される『枕草子』の本文は、能因本から三巻本へと大きく舵を切っていく。三巻本の本文は、田中重太郎『日本古典全書 枕冊子』（朝日新聞社、一九四七年）、池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、一九五六年）、池田亀鑑『日本古典文学大系 枕草子』（岩波書店、一九五八年）といった注釈書に相次いで採用された。この時期以降、能因本を底本とした注釈書は、関根正直『枕草子集註』（六合館、一九三二年）、松尾聰・永井和子『日本古典文学全集 枕草子』（小学館、一九七四年）、田中重太郎『枕冊子全注釈』（角川書店、一九七二～一九九五年）のほぼ三本のみであり、『枕草子』の注釈書には三巻本を使うことが圧倒的な主流になっていく。小学館の日本古典文学全集も、松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館、一九九七年）では三巻本を底本として使うようになった。

このように三巻本を用いる注釈書が増えていく中で、とりわけ三巻本の優位性を強く主張したのが、萩谷朴氏である。萩谷氏は、三巻本を底本とした『枕草子解環』（有朋堂書店、一九八一～一九八三年）等の中で、能因本、前田本、堺本と本文を比較しながらの詳細で膨大な注釈を行いながら、三巻本の本文は誤りが少なく優れていることや、章段間に作者の明確な連想が認められることを主張し、それを根拠としながら、三巻本の優位性を繰り返し説いている。

しかし、このように三巻本のみで『枕草子』を読むという行為については、近年、反省や再検討の必要が言われているところでもある。中西健治氏は、次のようにいう（注2）。三巻本のみで枕草子を読むのが現今のほぼ定説になりつつある。これはこれで長い研究史の成果であり、当然評価すべきことである。ただ、一方で近世から昭和の初めまで枕草子研究の中心にあったのは能因本系統の本、とりわけ春曙抄の果たした役割が甚大であったことにも思いを致さねばなるまい。春曙抄本文批判のなから三巻本善本説も提出されたので、能因本自体ではなかった。その意味で今後とも能因本を三巻本に対照させながら読むことも枕草子研究の基本姿勢として捉えていいのではあるまいか。

中西氏が述べているように、三巻本だけを見るのではなく、他系統の本文にも目配りをする必要があるという提言は、今日の他作品の研究状況等に鑑みても、妥当性の高いものとして受け入れられやすいものと言うことができよう。実際に、現在では、程度の差こそあれ、このような見方は『枕草子』研究の中で広く受け入れられていると言ってもよいものだと思う。

坏美奈子氏は、とりわけ、三巻本偏重とも言える傾向に警鐘を鳴らす論者のひとりであり、能因本と三巻本の本文について論じる中でこのように述べている（注3）。

我が国初の随筆作品という位置づけがなされている『枕草子』は、それゆえに、時代性だとか、自明の作品観や作者像だとか、そうした枠組みを超えて、常に新しく読み解いていく姿勢が求められる作品である。何よりも、享受の歴史を激変させ、三巻本系統本のみによって鑑賞し研究するようになった近年の状況については、ただ今、見直しの時期に来ていると痛切に感じる。

坏氏はこのように述べた上で、自身の論考の多くにおいて、能因本と三巻本を対照させながら考察を行っている。

また、雑纂形態をとる三巻本・能因本だけではなく、類纂形態をとっている前田本・堺本も視野に入れて、それらの総体を考察していこうとするのが津島知明氏である。津島氏は、次のように説明している（注4）。

近代読者の成立は、当然のことながら具体的な改作・再編集といった作品享受（再生産）の終焉をも意味していた。しかしそれはまた、読む者をつき動かす『枕草子』の磁場を、いわば凍結して伝える結果ともなったわけである。

津島氏は、このような見地から、変化し書き継がれていく諸本の本文を「動態」として捉え、一連の論考を展開している。

また、雑纂本原態説が定説になって以来、後人が恣意的な書写や編集を行った劣った本文として捉えられがかった類纂本にも、再評価の動きがある。特に、近年、精力的に堺本の研究を推進している山中悠希氏の論考（注5）は、堺本の見方を変えようとするものと言えるであろう。たとえば、山中氏は、堺本『枕草子』における男性に関する随想群には、堺本独自の方向性が見られ、「より通俗性を帯びた「男性のあらまほしさ」を具体的に浮かび上がらせている」ことを指摘している（注6）。堺本における男性関係の記事について「この箇所は周囲の章段も含めて、男性に関する随想群として大きく捉えるべきである」と述べた山中氏の考えは、ひとつひとつの章段について個別に論じられることの多い『枕草子』研究において、章段群という見方を導入する点で、非常に示唆的である。堺本に限らず、もとより『枕草子』の章段区分は絶対的なものではなく、各系統の本文における章段と章段の間には連鎖が見られる箇所も多い。このような見方は、堺本以外の本文についても非常に有効なものだと考えられる。実際に、本稿においても、複数の章段をまとめた群として読むことで浮かび上がってくる方向性を積極的に見ていこうと試みている。

以上で述べたように、能因本もあわせて読むことによって近世以来の読みの集積を活かしていこうとする意見や、単純な本文の優劣論に陥ることなく、類纂本も視野に入れて『枕草子』を読んでいくという立場は、現在の『枕草子』研究を方向づけるものと言いうことができるであろう。このような動きは、二〇一七年四月に刊行されたばかりの、島内裕子『枕草子』（ちくま学芸文庫）が、三巻本ではなく、春曙抄の本文を採用するという試みをして

いることにも端的に表れているともいえる。島内氏は、著書冒頭の「凡例」の中で、春曙抄を底本にした理由を説明している。

『枕草子』の本文は、「延宝二年（一六七四）甲寅七月十七日」の跋文を有する、北村季吟の『枕草子春曙抄』、通称「春曙抄本」を用いる。現代では、「三卷本」で『枕草子』を読むことが主流となっているが、昭和二十年代頃までは、「枕草子を読む」とは、基本的に、北村季吟の『春曙抄』を読むことであつた。日本文化に大きな影響を与えてきた『枕草子』の本文に触れるために、本書の底本を『春曙抄』とするゆえんである。

一方で、三卷本については、近年、書誌学的な見地からの発表が相次いでいる。特に大きな発見と言えるのは、小川剛生氏が発表した、三卷本の伝来過程に関する知見であろう。小川氏は、室町幕府九代將軍の足利義政が実相院の蔵書を借りて書写したことを説明し、「以上の経過を知ると、有名な古典作品の伝来にも大きなヒントが与えられる。たとえば次のような奥書である」と、三卷本『枕草子』の奥書を引用した上で、次のように述べる（注7）。

右は、藤原定家が安貞二年（一二二八）に書写校訂した、いわゆる三卷本枕草子の奥書の一部である。ここに勧修寺教秀が廣橋綱光（兼顕の父）からの「厳命黙するを獲ず」、実相院准后増運の本を書写したとあるが、実際には義政の命であり、その歌書蒐集の一環であつたことが理解できよう。三卷本の流布は実にこの本に端を発する。

また、佐々木孝浩氏は、三卷本の奥書だけではなく、本文や勘物においても定家との関係が想定できることを指摘し、「定家本」と呼ぶべきことを提唱する（注8）。佐々木氏は、定家本として改めて捉え直すことによつて、次のような展望が可能になるといふ。

部外者的な立場から見ると、近時『枕草子』研究はあまり活発でないように見えるが、安貞奥書が定家のものであるということの意味を改めて考えることから始めれば、本文や勘物の再検討は元より、定家が『枕草子』を書写した意味を多角的に検討することや、三代集や源氏・伊勢両物語等を含めた「定家本」という存在の総合的な研究等々、今後に行うべき研究課題が幾つも見えてくる気がするのである。

ここまでは、先行研究をたどりながら、『枕草子』の諸本に対する研究状況を確認してきた。近年、三卷本のみを読むという態度に対して見直しが進んでいること、また、三卷本について書誌学的の見地から新しい発見が発表されているということがわかる。これらの考え方や論考は、いずれも、『枕草子』の諸本について理解する上で、非常に重要なものであることは間違いがないものと考ええる。しかし、同時に不足する点もあるのではないか。以下、その問題点について述べる。

まず、三卷本偏重への反省から、類纂本や能因本への目配りがされ、特に能因本系統の本文を底本として『枕草子』を読むという動きも生じているが、三卷本の性質については、十分な検討はされていないのではないかと一点である。昭和の初期に急速に注釈書の底本として採用され始め、古態を留めた善本と言われつつも、三卷本もまた一定の方向性を持った本なのではないだろうか。古注などの蓄積がないこともあつて、研究史において十分な議論がされたとはまだ言えないのではないかという疑問が残る。

また、書誌的研究が進む現在も、その成果と、三卷本の持つ方向性の解明には、今少し距離があるように思われる。定家の書写行為や、その後の伝来過程などの検討は非常に重

要で有意義なものだと考えるが、三巻本の本文や章段構成とただちに結びつけることは難しく、また、そのような早急な考察をしたとしても、結果は不適切なものとなる可能性が高いであろう。

このような観点から、本稿では、三巻本『枕草子』について、その本文や章段配列に注目して、他の本と異なる部分について検討し、そこから見えてくる三巻本の論理を見出そうと考えている。この点について検討する上で、特に三つの観点から考察を行った。一つ目は、清少納言の出仕前と思われる出来事を描いた章段の検討である。これは第一章、第二章、そして第六章に相当する。二つ目は、物語に関わる記述を含む章段で、第三章、第四章、第五章である。三つ目は、三巻本『枕草子』の巻末部についての考察で、第四章、第五章、第六章がこれにあたる。いずれも、『枕草子』のすべての章段について検討するのが困難なことによる便宜的な分類と選択であるが、これらの観点を用的ことで、本稿では、三巻本『枕草子』の持つ論理の一部なりとも明らかにしていきたいと考えている。

- (1) 池田亀鑑「清少納言枕草子の異本に関する研究」(『国語と国文学』五―一 一九二八年一月) など
- (2) 中西健治「伝能因所持本」(『枕草子大事典』二〇〇一年 勉誠出版)
- (3) 坏美奈子『枕草子』「五、六月の夕がた」(能因本) と、「五月四日の夕つ方」(三巻本) ―二つの本文が描き出す、異なる情景―(『和洋女子大学紀要 人文系編』四八二〇〇八年三月。その他、坏氏の主張は、坏美奈子『新しい枕草子論―主題・手法そして本文』(新典社、二〇〇四年)、同『王朝文学論―古典作品の新しい解釈』(新典社、二〇〇九年) に詳しい。
- (4) 津島知明『枕草子』の“内的連絡”―読者としての和辻哲郎―(『日本文学』四四―九 一九九五年九月)。なお、津島氏の「動態」としての『枕草子』の捉え方については、津島知明『動態としての枕草子』(二〇〇五年 おうふう) に詳しい。
- (5) 山中悠希『堺本枕草子の研究』(二〇一六年 武蔵野書院) など
- (6) 山中悠希「堺本枕草子における随想章段の編纂と表現―男性に関する随想群の類纂方法―」(『国文学研究』一四八 二〇〇六年三月)
- (7) 小川剛生「足利義尚の私家集蒐集とその伝来について」(『和歌文学研究』一〇六 二〇〇三年六月)
- (8) 佐々木孝浩「定家本としての『枕草子』―安貞二年奥書の記主をめぐって」(谷知子・田渕句美子編『平安文学をいかに読み直すか』(二〇一二年 笠間書院))

第一章 聞き書きの臨場感―『枕草子』『円融院の御果ての年』

はじめに

『枕草子』『円融院の御果ての年』の段は、宮中の局で物忌をしていた藤原繁子のもとに、童が立て文を届けてきた話を語る段である。物忌中だった繁子は、「物忌なれば見ず」と、すぐに開けて見ることはしないが、翌朝になって開けてみると、その文は、その体裁も、内容も、次のような奇妙なものであった（注1）。

胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを（あやし）と思ひて開けて行けば、法師のいみじげなる手にて

これをだにかたみと思ふに みやこには葉がへやしつる椎柴の袖
と書いたたり。

繁子は、この文を見て、「誰かしたるにかあらむ」と、その差出人をあの人かこの人かと思ひ巡らす。差出人不明の文は、繁子の「いとあさましうねたかりけるわざかな」という心内表現としても語られているように、不意に送りつけられてきた不躰なものである。

文を開いて不審に思った繁子は、すぐに一条天皇と定子の耳に入れようとするが、折悪しく物忌中ですぐに参上できない。物忌の期間が終わるのを待って、急いで一条天皇と定子に話したところ、実はこの手紙は一条天皇と定子がいたずらで送ったものだとかかるのであった。この章段の最後は、種明かしをする一条天皇に始まり、中宮定子、繁子、文を届けた童、差出人かと繁子に誤解された藤大納言が、それぞれ笑う様子を描く楽しい様子で結ばれている。

この章段は、一条帝のいたずらとそれを白状した際のエピソードを語る単なる笑い話に見えるが、この段の事件年時は清少納言が中宮定子に仕えるようになる前であることが従来指摘されてきた。清少納言自身が直接見聞きしていないにもかかわらず、帝や中宮の様子を、あたかも傍で見たかのように直接語るのは、『枕草子』では日記的章段はもちろん、その他の章段でも見られないことである。

この点について、『全講』は「おそらくは、宮仕前の著名な事件を題材とし、これに劇的な構成を試みたものであらう」と推定した上で、「一応回想に準ずるものと見ておくが、なお出仕年時その他種々の見地から精密に研究する余地があるように考えられる」と述べている。また、『新全集』はこの章段が聞き書きであると指摘して、「伝聞が、作者の見聞であるかの如くで、叙述も時に定まらない」という。

注釈書以外においても、この章段が書かれた意味については、様々な議論がなされてきた。長谷川政春氏は、この章段は「再構成された事実譚」として読むことが最も肝要であると主張している（注2）。この段の和歌の「花の衣」という表現が僧正遍昭との対比を作りだし、そのことでいたずらのモチーフが完璧になることや、蓑を来た童がトリックスターの役割をすることを指摘し、「定子後宮の世界の幸福を裏面から露呈させた話になっている。きわめて構成的な話である」と結論づけている。

しかし、この論では、この「定子後宮の世界の幸福」がいかなるものなのかという点については説明されていない。長谷川氏は、この章段から「中宮を中心とした後宮生活の明

るい世界」を読み取っているが、手紙を受け取った繁子の様子と、いたずらの種明かしを語るこの章段を、他の日記的章段と同じような中宮讃美の傾向を持つものだと最初から決めてかかっているようにも見える。僧正遍昭の話を意識しながらこの章段が再構成されているのは和歌などの表現から確かであるが、この章段が持つ方向性についてはさらに検討の余地がある。

小森潔氏は、この段の直前からの章段配列に着目し、「頭弁の、職にまゐりたまひて」「五月ばかり、月もなういと暗きに」「円融院の御果ての年」という順で並んだ章段の関連性について考察している（注3）。小森氏は「頭弁の、職にまゐりたまひて」「五月ばかり、月もなういと暗きに」の二段は中宮讃美という志向を有しており、作者自身の活躍が職曹司にいる中宮と内裏の帝とを結びつける機能を担っていると分析している。その上で、「円融院の御果ての年」の段では中宮と帝の仲睦まじい姿を描き、その仲睦まじさが作者の存在にかかわらず変わらないことを確認させる意味を持つという見方を示した。中宮と帝の仲睦まじい姿を描くことに、「中宮定子を讃美する」姿勢を見いだす小森氏の論は、この段単独ではなく、前の章段とあわせて読むことで浮かび上がる方向性を指摘するという点で、説得力のあるものである。ただ、この章段の前半は、ほぼ繁子の様子を描くことに費やされている。そのため、ここで描かれる不気味な文が作り出す不安感の内実について、さらに検討することが必要なのではないか。その点について考察することで、この章段が描いているものがさらに明確になると思われる。

中田幸司氏は、和歌の「みな人」という表現が指し示すような〈集団〉について書くという点に、この章段が持つ意味合いを見いだしている（注4）。中田氏は、「おそらく作者には、円融院の崩御以来継続していた悲哀から復活した一条帝の御代の〈集団〉を叙述する目的が根底にあったのだろう」として、「作者は打聞の中心をあくまでも悪戯の中で主上や定子が悲哀を克服した姿勢に見た」という。

しかし、父である円融院崩御の悲しみを、いたずらによる笑いで乗り越えるという姿勢は、一条帝にとって必ずしも理想的なあり方とは言えないのではないだろうか。本来敬う対象であるべき父の死とそれに伴う悲哀を、いたずらに伴う笑いで克服していくというのは、手段として安易に過ぎるようでもある、不謹慎という誹りを免れないのではないかという疑問が残る。そのような過程を『枕草子』に取り立てて書くということは考えづらい。

高有貞氏は、「諒闇明けの朝の晴れがましさ」を読み取り、この章段は、中宮のめでたさと、中宮がいる場所の雰囲気を描いたものだとしている（注5）。高氏は、「つまり、清少納言は、主家の繁栄や中宮定子の讃美すべき姿であれば、経験しなくても再現して書いたのである」としている。しかし、高氏の論もまた、前に挙げた長谷川氏の論と同様に、中宮讃美とはどのようにこの章段で示されているのかという点について、さらに検討する必要があるものと思われる。

このような先行研究を踏まえながら、次節からは、この章段について再考していきたい。

一 五味文彦説の検討

一条天皇の父である円融院は、正暦二年（九九二）二月十二日に崩御しており（『日本紀

略』、この「円融院の御果ての年」は、その翌年の正暦三年（九九二）であると従来解されてきた。また、清少納言の初出仕は、正暦四年（九九三）説が現在ほぼ定説となっている。

しかし、最近、この見方に再考を迫る論が発表された。五味文彦『枕草子』の歴史学 春は曙の謎を解く』（朝日選書、二〇一四年四月）である。五味氏は、この段の年時は正暦二年であり、清少納言の初出仕も正暦二年だとして、「少納言がこの話を記したのは、ちょうど自らが宮仕えした時期にあたっており、円融院の死にともなう喪服を皆が脱ぐことが早くあり、それとともに宮仕えすることになったからであろう」（六九頁）とする。

五味氏は、清少納言の初出仕を正暦二年とする根拠として一七八段「宮にはじめてまゐりたるころ」の官職呼称を挙げているため、まずその点を検討したい。この段には「大納言殿のまゐりたまへるなりけり」という一文がある。この「大納言殿」は藤原伊周だと解されてきたが、五味氏は藤原道長を指すと言う。藤原伊周は正暦三年八月に権大納言、正暦五年八月に内大臣になっている。一方、藤原道長は正暦二年九月に権大納言になっている。

この点について、五味氏は、三九段「鳥は」の「十年ばかりさぶらひて聞きしに」という箇所から、「宮仕え十年からすれば、道長の可能性が最も高くなる」（六四頁）とする。定子は長保二年（一〇〇〇）十二月に死去しており、もし清少納言の初出仕が正暦四年（九九三）だとすると、宮仕え期間は「十年」には足りない。道長は、正暦元年（九九〇）十月から、おそらく長徳元年（九九五）五月に内覧の宣旨を受けるまで中宮大夫を務めており、五味氏は「清少納言は道長の推挙で宮に仕えるようになった」（六五頁）と推測している。

しかし、「大納言」が道長であるとする五味氏の論には、重大な欠陥がある。他の段も視野に入れて検討すると、『枕草子』中における藤原道長を示す官職呼称には、明確な方針が存在することが判明するのだ。藤原道長の呼称が確認できる段は、『枕草子』中に四段ある。

一二五段「関白殿 黒戸より」、一三八段「殿などのおはしまさでのち」、二五九段「大蔵卿ばかり、耳とき人はなし」、二六二段「関白殿、二月二十一日に法興院の」、である。このうち、一三八段と二五九段は、いずれも道長が昇進して「大納言」と呼ばれる可能性がなくなる長徳二年以降の時期の話である。ここで注目すべきは、それ以外の二つの章段だ。

一二五段は、道隆が関白となった正暦四年四月以降、伊周が内大臣となる正暦五年八月以前の話であり、この時期には伊周も道長も権大納言である。だが、この段で伊周が「権大納言」と呼ばれるのに対し、道長は「宮の大夫殿」「大夫殿」としか呼ばれない。

また、二六二段は、正暦五年二月の積善寺供養のことを書いている。この時期も、伊周と道長は共に「大納言」と呼ばれ得る立場にあったが、この段においても、伊周が一貫して「大納言殿」（四箇所）、「大納言二所」（伊周と道頼）と呼ばれる一方で、道長は定子の発話部分で「大夫」と呼ばれているのである。特に、積善寺供養から半年後の正暦五年八月に権大納言に昇進する道頼までもが「大納言」と書かれるのに対し、道長が決して「大納言」とは呼ばれないことには注意が必要であろう。

これらの段では、伊周と道長が二人とも登場するために一時的に呼び分けたのではない。同じ官職についても、伊周が「大納言」と呼ばれるのに対し、正暦年間の道長は『枕草子』中では、あくまでも中宮大夫なのである。仮に清少納言の初出仕が正暦二年ならば、

伊周はその年の九月に権中納言になったばかりだが、そうだとすると、道長の呼称を、伊周が大納言になる前は「大納言」、伊周が大納言になった後は「大夫」と変えることは考えられない。よって、一七八段「宮にはじめてまゐりたるころ」の「大納言殿」は伊周であり、清少納言の初出仕は、伊周が権大納言になった正暦三年八月より後であることは動かない。

次に、「円融院の御果ての年」の段の年時について検討したい。五味氏はこのように言う。

「円融院の御はてのとし」というのは円融院が亡くなった年を意味するものであり、「みな人、御服ぬぎなどして」とあるのは、その年に皆が喪服を脱いだということであつて、これは正暦二年のことと見るべきである。(六八頁)

しかし、「果て」という語が四十九日や一周忌を指す用例が多く存在する一方で、身分の高い人物が亡くなることを「果て」と表現した平安時代の用例は見つからない。「果て」を崩御と解するのは無理であろう。

また、五味氏は『小右記目録』正暦二年閏二月二日に「御除服事」とあることから、この時に「すでに一条天皇が除服しているのである」(六八頁)とするが、この記載をもつて平時の服装に戻ったと理解するのは早計である。

『西宮記』臨時八「太上天皇・皇祖母后崩」に「天皇着レ服事「以レ日易レ月」とあり、臨時三の喪服の項に「帝王雖レ随ニ以レ日易レ月之制」一、一周間依レ不レ臨レ朝、不レ服ニ位袍一服ニ黒橡衣一」とある。実際に、今上帝(三条天皇)の父が崩じた寛弘八年(一〇一一)十月二十四日の冷泉院崩御の際も、三条天皇は同年十一月十六日から椅廬にこもり、十二日目の同月二十七日(二十九日の誤りか)に素服を脱いで「御橡御衣」に着替え、本殿に戻っている(『日本紀略』)。天皇は父母の喪に服すべき一年間を、一月を一日に換算して十三日は素服を着て椅廬にこもり、本殿に戻ってから諒闇の間は黒橡衣を着たことがわかる。

一条天皇の場合は正暦二年二月十九日に素服を着している(『日本紀略』)。それから十三日目にあたるのが『小右記目録』の同年閏二月二日の「御除服事」である。つまり、この記載は、天皇が素服を脱いで黒橡衣を着たことを指す。『日本紀略』正暦三年二月二十四日条に「於ニ朱雀門一大祓。依ニ諒闇了一也」とあるように、諒闇が終わったのは円融院崩御の翌年である。諒闇中の正暦二年九月十六日の行幸では、天皇が「御橡御直衣」を着ていることが確認できる(『院号定部類記』所引『小右記』(注6))。院崩御の年に吉服に戻ったわけでもなく、予定より早く喪に服すのをやめたわけでもない。「皆人御服ぬぎなどして」とある「円融院の御果ての年」の段の年時は、通説の通り、諒闇が終わった正暦三年なのである。

以上より、清少納言の初出仕は、伊周が権大納言になった正暦三年八月以降であり、「円融院の御果ての年」段の年時は正暦三年春頃だとわかる。五味氏の説は適当ではない。『枕草子』の歴史学』には、『枕草子』の書名や初段の解釈、官職呼称について、従来の説とは大きく異なる論が収められているが、本稿で触れた箇所以外にも、その論の根拠が適切ではない、または示されていない点が多い。一条天皇が書写させた『史記』から連想して「四季を話の枕にして書かれたのが『枕草子』であった」(二〇頁)という説(注7)も、史記から四季を連想し得るのか、「話の枕」という語法が当時あるのかという点で疑念を抱かざるを得ない。さらに、官職呼称の検討にも、首肯しがたい点が多々ある。

二 一条天皇の服喪

前節で述べたように、五味説には問題点が複数あると考える。しかし、それでも五味説を取り上げたのは、この段の歌に対する五味氏の次のような見解について検討することから出発し、この段について再考したいと考えたからである。

歌の意味は、椎柴の喪服だけでもせめて院のかたみに思つて脱ぎかねているのに、都ではもう普通の衣に脱ぎ替えてしまったのでしょうか、という早い除服を皮肉つたものである。(六八頁)

『枕草子』のこの段は、『大和物語』一六八段を随所で踏まえている。だが、諒闇が終わつても果てることのない自らの悲しみを歌つた『大和物語』の歌「みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかはきだにせよ」と比べると、『枕草子』の歌は、喪服を脱いだ者に対する違和感の表明に重点があるといえよう。

「椎」は、『枕草子』三八段「花の木ならぬは」に次のようにある。

しひの木、常盤木はいづれもあるを、それしも葉がへせぬためしに言はれたるもをか

し。古瀬雅義氏は、「当該歌は「椎柴の袖」が「喪服」を意味しているにもかかわらず、その発想の源には第三八段の記述通り、「椎」は「常盤木」で「葉がへせぬためしに言はれたる」という共通理解の存在が確認できよう」(注8)と指摘している。変わらないはずのものが変わるといふ発想で詠まれたこの歌は、喪服を脱いだ人々への不満を示す表現となつており、五味氏の「皮肉つたもの」という理解は歌の持つ一面を捉えているとも言える。実際に、この歌を受け取った繁子は、次のような反応を示している。

「いとあさましろねたかりけるわざかな、誰がしたるにかあらむ。仁和寺の僧正のにや」と思へど、〈世にかかる事のたまはじ。藤大納言ぞ、かの院の別当におはせしかばそのしたまへることなめり。これを、上の御前宮などにとく聞しめさばや〉と思ふに、この歌が単に円融院を偲ぶ内容なら、「いとあさましろねたかりけるわざかな」という感想は出てこないであろう。繁子は、歌から非難の意味合いを読み取っているのである。

ただし、本稿ですでに検討したように、五味氏の言う「早い除服」という事実はない。したがって、この歌の持つ非難の要素は違う角度から考える必要がある。繁子は、送り主が誰なのかを詮索しつつ、早急に一条天皇と定子に報告しようとする。歌は「みやこには」と詠むだけで、直接的には特定の人間を指してはいない。また、この歌は繁子宛である。歌による非難も自身に向けられたものと考えらるなら、腹を立てたり不安になつたりしても、繁子は自分の問題として対処したはずである。それにもかかわらず、繁子が一条天皇と定子への報告を急ぐのは、この非難が天皇に関わる可能性を感じているからではないか。

山下洋平氏は十世紀の太上天皇崩御時の臣下服喪では、内裏近臣は天皇が行なう服喪に従服し、院司・院の旧臣は直接、故院の為に服喪を行なつたとしている(注9)。円融院崩御の際も「天皇及侍臣侍女著ニ素服」(『日本紀略』正暦三年二月十九日条)とある。天皇に近侍する者が故院の喪に服すことは、天皇が父のために行なう服喪を共有し、その一部になることであつた。「みやこ」で服喪した人々が、故院の関係者を除けば天皇近侍の者だつたとなると、天皇の近くに仕える繁子に歌を送つて人々の哀悼心の薄さを非難するこ

とは、人々が従う天皇の服喪に疑念を呈し、その不孝をほのめかすことにつながると考えられる。

田中徳定氏は、一条天皇を含む、朱雀天皇から後一条天皇までの八代の天皇の読書始において、円融天皇を除く全てで『御注孝経』か『孝経』が使用されたことを指摘し、「天皇が孝を身に具え実践することは、聖天子の要件であつた」と述べている(10)。孝心が天皇の重要な徳目であり、徳をもって天下を治めるという天皇のあるべき姿を考えると、父への孝を尽くさない天皇の不徳を示唆することは、天皇としての資格さえ疑う行為となり得るのである。

ただし、実際には一条天皇には非難されるような要因はない。服喪に不足がなかったばかりか、章段冒頭に「おほやけよりはじめて院の御事など思ひ出づるに」とあるように哀悼の気持ちが強かったことは明らかである。それにもかかわらず、歌の詠み手は、喪服を脱いだ人々、そしてその中心にいる天皇を非難するのである。

繁子を不安にさせたのは、天皇の不徳の可能性よりも、このようにわれのない非難をぶつけてくる正体不明の存在だったのではないか。一条天皇は当時まだ十三歳で、道隆が関白ではなく摂政でいることからわかるように幼帝であつた。正暦元年七月に前の摂政だった兼家が亡くなり、翌年の正暦二年二月に父の円融院も崩御する。当時、王統は円融系と冷泉系の両統迭立の時期にあり、東宮には年上で冷泉系の居貞親王がいた(11)。対して、一条天皇は政治的な意志決定もできない幼さで相次いで摂政と父を亡くし、その後ろ盾が不安定な状況にある。繁子は「昔の鬼」のしわざではないかとうそぶく定子の前でも、「こは誰がしわざにか」と差出人を詮索するのを止めない。章段前半で語られる繁子の動揺は、この状況に乗じるかのように不遜な歌を送りつけてきた存在への恐れからだと考えられる。

しかし、この章段には、頼りない一条天皇の姿はない。むしろ、この段の後半は、前半の繁子の不安とは対照的に、人々の笑いで満ちている。種明かしをする一条天皇の「うちほゑませたまひて」に始まり、繁子の「笑ひたまふ」、定子の「笑はせたまふ」、再び繁子の「笑ひねたがりゐたまへる」に加え、台盤所まで「笑ひのしりて」、童も「笑みて」と続き、藤大納言が「笑ひ興じたまひけり」と語られる一文を最後にこの段は幕を閉じる。

この章段の先行研究では、小森潔氏がこの段は清少納言の存在の有無にかかわらず一条天皇と定子の結びつきが変わらないことを示したものと結論づけ(12)、津島知明氏は敬語表現や「をかし」の主体に着目しているが(13)、本稿では、そもそもなぜこの章段の描写に臨場感が必要だったのかを考えたい。清少納言出仕前の出来事を、あたかもその場にいたかのように語るのは、やはり他の章段に見られないことだからである。

この段の前半は、物忌中でひとり心細さに耐える繁子の視点に立つことで、不気味な歌がもたらす恐れや不安は、より大きく印象づけられる。対して、後半は天皇から台盤所の童に至るまで、それぞれの笑いをその場に居合わせたかのように描くことで、歌がいたずらだとかわかつた時の安堵と笑いが活写されている。この描写方法と構成は、前半の不安と後半の安堵との対照を際立たせるためのものだったといえよう。つまり、時には繁子の視点に立ちながら、出来事が臨場感をもって直接的に語られるのは、繁子の不安とその解消にこそ、この段の重点があるからだと考えられるのである。一条天皇を取り巻く政治的な不安要素に暗に触れつつも、そのような不安は最初から存在しなかったと笑い飛ばすのが

この章段だったのではないか。この段には、父を失っても揺らぐことのない帝と、その隣に寄り添う定子の姿が描かれる。それは、『枕草子』に描かれるめでたき天皇と、その隣で后として輝く定子の物語の前史であった。そこにこそ、この章段において、清少納言出仕前の出来事をその場にいるかのように語る手法が用いられる意味を見いだせるのである。

三 三巻本の本文

前節までにおいて検討したように、「円融院の御果ての年」の段は、前半の繁子の不安と、後半のいたずらだとわかった際の笑いによって、一条天皇を取り巻く不安要素をなかつたものにする章段だと言える。

しかし、この点に関わって、この章段には、三巻本と能因本の間で、重要だと思われる本文異同がある。該当する箇所は、章段冒頭の部分である。三巻本と能因本の本文を次に挙げる。

【三巻本】

円融院の御果ての年 皆人御服ぬぎなどして、あはれなる事をおほやけよりはじめて院のことなど思ひ出づるに、雨のいたう降る日、藤三位の局に蓑虫のやうなる童の大きな、白き木に立て文をつけて「これ奉らせむ」と言ひければ、…

【能因本】

円融院の御果ての年、皆人御服ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけよりはじめて、院の人も、「花の衣に」など言ひけむ世の御事など、思ひ出づるに、雨いたう降る日、藤三位の局に、蓑虫のやうなる童の、大きな、木の白きに、立て文をつけて、「これ奉らむ」と言ひければ、…

注目したいのは、能因本の傍線部「花の衣に」など言ひけむ世の御事など」である。「花の衣に」とは、『大和物語』百六十八段の僧正遍昭の和歌「みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかはきだにせよ」を示したものである。

すでに先行研究でたびたび指摘されているが、この章段は、随所で『大和物語』百六十八段の遍昭のエピソードを踏まえている。たとえば、前に挙げた章段冒頭部における「蓑虫のやうなる童」もそのひとつである。この部分は、『大和物語』において、「蓑ひとつをうち着て」修行した遍昭の話を踏まえたものである。

このような点を確認すると、この章段の冒頭部分は、三巻本よりも能因本のほうが『大和物語』を明確に踏まえた書き方になっていることがわかる。「花の衣に」という本文で、すぐに遍昭のことを想起させ、「蓑虫のやうなる童」という要素を続けて入れることで、読み手にこれは『大和物語』を踏まえて構成した話だということを明かしているのである。それと比べると、三巻本は『大和物語』を踏まえているということをすぐに明らかにしない。「蓑虫のやうなる童」という要素だけでは、すぐに遍昭を思い浮かべられるとは限らないのである。

そして、この違いは、この章段の前半で語られる繁子の不安の大きさを読み手に伝える際に影響してくるのではないか。能因本では、この章段の冒頭を読む中で『大和物語』が下敷きにされていることが明白になり、送り主のわからない不気味な文も、どこか物語の話のように感じられるようになっていく。それに対して、『大和物語』を踏まえていることを、なかなか明かさない三巻本では、差出人不明の文の得体の知れない雰囲気により強く示され、繁子の抱える不安はより大きなものとして表現されているのである。

「花の衣に」という本文の前後は、三巻本と能因本でそれほど大きく違うわけではない。そのため、本来は能因本の本文だったものが、三巻本では単純に脱落しているだけではないかという考え方もできるが、そのことがもたらす違いを考えた時、三巻本の本文は単に脱落とは言い切れない異同を含むものだと考えることができるのである。

おわりに

「円融院の御果ての年」の章段は、物忌中の繁子のもとに差出人不明の文が届けられることをきっかけに、前半部では繁子の不安を、後半ではいたずらだとわかった際の人々の笑いを、それぞれ対照的な雰囲気で描いている。この対比は、一条天皇が抱える政治的不安を最初からなかったものとして笑い飛ばし、一条天皇とともにある中宮定子の姿を描く上で、非常に有効に機能している。

このような不安と笑いの差は、章段冒頭に『大和物語』にみえる僧正遍昭の和歌「みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかはきだにせよ」を示すことのない三巻本では、より大きなものになる。『大和物語』を踏まえた趣向を明かさないことによって、繁子の不安感により深刻なものとして表現され、その分、章段後半の笑いの意味も強いものになる。三巻本『枕草子』には、一条天皇周辺の不安をより強く否定する姿勢が見られると言える。

(1) 引用本文は、『枕草子』は津島知明・中島和歌子『新編枕草子』(二〇一〇年 おうふう)、『大和物語』は新編日本古典文学全集、『日本紀略』は新訂増補国史大系、『小右記目録』は大日本古記録、『西宮記』は神道大系による。

また、本論中で用いた『枕草子』の注釈書とその略称は、以下の通りである。

- ・池田亀鑑『全講枕草子』至文堂 一九五六年～一九五七年 ……『全講』
- ・石田穰二『新版枕草子』(角川ソフィア文庫) 角川書店 一九七九年～一九八〇年 ……『角川文庫』
- ・萩谷朴『枕草子解環』同朋社出版 一九八一年～一九八三年 ……『解環』
- ・松尾聰・永井和子『枕草子』(新編日本古典文学全集) 小学館 一九九七年 ……『新全集』
- ・上坂信男ほか『枕草子』(講談社学術文庫) 講談社 一九九九年～二〇〇三年 ……『学術』
- ・津島知明・中島和歌子『新編枕草子』おうふう 二〇一〇年 ……『新編』

- (2) 長谷川政春「枕草子鑑賞」『枕草子講座三』一九七五年
- (3) 小森潔「不在からの視点―「円融院の御果ての年」の段を中心に―」『枕草子逸脱のまなざし』一九九八年 笠間書院(初出…一九八五年七月)
- (4) 中田幸司「枕草子「円融院の御はての年」章段攷―藤三位と立文の機能―」『平安文学研究』三五 一九九八年十一月
- (5) 高有貞『枕草子』における聞き書き章段の一考察―「円融院の御果ての年」の章段を中心に―「國學院大學大学院文学研究科論集」三〇 二〇〇三年三月
- (6) 同記事の割注に「今日公卿着靴、侍臣脱橡表衣、着位袍」とあるが、行幸に伴う一時的な対応だったと考えられる。
- (7) 小池清治『枕草子』のライバルは『史記』か? 「外国文学」(宇都宮大学外国文学研究会)五四 二〇〇五年三月も同様の見解を示す。
- (8) 古瀬雅義「円融院の御果ての年」と「椎柴」―『公任集』と『枕草子』から見る流行表現の諸相―「国語国文論集」(安田女子大学)三一 二〇〇一年一月
- (9) 山下洋平「平安時代における臣下服喪儀礼」『九州史学』(九州史学研究会) 一五六 二〇一〇年九月
- (10) 田中徳定『源氏物語』における天皇の孝心―光源氏召還と「太上天皇になずらふ御位」―『孝思想の受容と古代中世文学』二〇〇七年 新典社(初出…二〇〇一年)
- (11) 「これをだに」歌は『仲文集』八三にも存在しており、その左注では「春宮わたりより」仲文に届いた歌とされている。
- (12) 小森潔 注三 前掲論文
- (13) 津島知明「をかし」をめぐる人称の問題―「円融院の御果ての年」の段から『動態としての枕草子』二〇〇五年 おうふう

第二章 三卷本『枕草子』「説経の講師は」の〈今〉と〈昔〉

はじめに

三卷本『枕草子』には、三一段「説経の講師は」、三二段「菩提といふ寺に」、三三段「小白川といふ所は」の順で、説経や法華八講に関わる章段が連続している箇所がある(注1)。仏教関連の章段は作中の他の箇所にも多数見られるものの、これらの三章段は、その内容の上でも連続性が認められ、ひとつの章段群を作っていると考えられる。

本稿では、この章段群の中で、特に「説経の講師は」段に着目する。この段は雑纂形態の三卷本・能因本、類纂形態の前田家本・堺本の四系統の間における本文異同が特に大きく、解釈も定まらない部分が存在している点で、検討が必要だと考えられるからである。また、この段が位置する場所は、前述の四系統の諸本によって大きく異なっている。具体的には、前田家本・堺本では、三卷本「説経の講師は」に相当する内容の前半・後半が別々の段として存在し、それぞれがかなり離れた位置に存在しているという違いである。さらに、同じ雑纂形態の三卷本・能因本の間でも、前後の章段配列に違いがある。そこからそれぞれの本におけるこの章段の位置づけの違いが見えてこよう。

本文異同という点では、この段で説経聴聞について述べる箇所において、三卷本で「はじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき」とある部分が、能因本では「この草子など出で来はじめつ方は、かちありきする人はなかりき」と『枕草子』執筆開始の時点を示すような本文になっていることは注目される点である。また、この箇所を含む複数の箇所において、三卷本のこの段では、清少納言の若い頃と「今」、藏人の「昔」と「今」、説経についての「このごろ」と「そのをり」というように過去と現在の比較が繰り返される。

本稿では、このような『枕草子』四系統の諸本における章段配列の違いと本文異同に着目しながら「説経の講師は」段を読むことによって、三卷本におけるこの段の位置づけを検討し、さらには、後に続く章段との関わりについて考察したい。

一 諸本による「説経の講師は」段の位置づけの違い

まず、「説経の講師は」段について述べる上で、この段の内容の確認も兼ねて、この段を四つの部分に分ける。

A…説経の講師の容貌

…「説経の講師は顔よき」く「なほこの罪の心には、いとさしもあらでと見ゆれ」

B…藏人を退任した者の説経聴聞の様子

…「藏人など」く「めづらしうもあらぬにこそは」

C…遅参・早退する聴聞者の様子

…「さはあらで、講師みてしばしあるほどに」く「目をつけて見送らるこそ、をかしけれ」

D…女性の聴聞

…『そこに説経しつ、八講しけり』く「いかばかりそしり誹謗せまし」

この段は、「説経の講師は、顔よき」と講師の容貌について書き始めたところから、聴聞者の様子に話題が移り、蔵人を退任した者の様子、遅参・早退する者の様子、そして、女性の聴聞について述べている。説経という話題によってこの段が統括されているということがわかる。

このように、説経という話題を中心として、三巻本では上記のような流れで叙述が進んでいくが、「説経の講師は」段は、諸本によって章段が存在している箇所も異なり、その位置づけが大きく異なる。以下に挙げる通り、類纂本である前田家本と堺本では、前述のAに該当する部分が、それぞれ「説経師は」「説経の講師は」の段、BとDに該当する部分が「道心あるはいとよきこと」「だうしもあるは」として別段になっている。両者の位置は、前田家本・堺本ともかなり離れており、前後の章段の配列も違う部分があるが、前者は説経などの仏教関連の章段群の中に位置し、後者は様々な人物についての随想群の中に位置している。

【前田家本】

55 経は
56 だらにはすあくだらに
57 陀羅尼はあかつき
58 説経は
59 法花経は
60 時は
61 修法は
62 法師は
63 説経師は
64 雑色隨身は

【堺本】

46 ど経は
47 陀羅尼は
48 あそびは
49 法花経は
50 時は
51 説経の講師は
52 冬の扇は

265 若き蔵人などの冠えて
266 道心あるはいとよきこと
267 又清げなる人をすてて
268 思はん子を法師に
269 ありがたき心あるものは
270 をのこは又隨身こそあめれ

240 若くてよき男のげす女の名
241 だうしもあるは
242 ひとり従者は主の思ふらん
243 思はん子を法師に
244 物へゆく道に
245 若き蔵人の冠えて

それに対して、雑纂本では、次のように、当該段の直前の配列に違いがある。

【三巻本】

【能因本】

このごろ、そのをりさし出でけむ人、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。

これらの箇所において、「すこし年などのよろしきほど／今」「昔／今」「はじめつ方／このごろ」と、三回に渡って、今と昔が対比されていることがわかる。

『枕草子』において、今と昔が対比される箇所は、本段に限られるわけではない。二一段「清涼殿の丑寅の隅の」の最後の部分では、伺候する人々が「昔は、えせ者なども、みなをかしうこそありけれ。このごろは、かやうなる事は聞ゆる」と話している様子が描かれている。四三段「にげなきもの」に「下衆の、紅の袴着たる。このごろは、そのみぞあめる」とあるのも、直接「昔」に言及していないものの、過去との対比意識が見られよう。また、昔と今の対比が明確な形で現れるのは、話題が藏人に及んだ時が多い。たとえば、八四段「めでたきもの」には、「昔の藏人は、今年の春夏よりこそ泣きたちけれ、今の世には走りくらべをなむする」とあり、二七四段「成信の中将は、入道兵部卿の御子にて」には、「昔の藏人は、夜など人のもとにも、ただ青色を着て、雨に濡れても、しぼりなどしけるとか。今は昼だに着ざめり。ただ緑衫のみうちかづきてこそあめれ。衛府などの着たるはまいていみじうをかしかりしものを」という箇所がある。

これらの対比表現について、田畑千恵子氏は「昔」は村上朝を指すものとして、「撰関体制へのアンチテーゼ」を読み取り、「幻想の「村上朝」・虚妄の世界にむかう目は、同時に、現実への批評意識を内包しているのである」と述べる（注4）。また、中島和歌子氏は、これらの対比表現で現れる「今」は道隆薨後だと捉え、「今昔の対比による風俗批判は、潜在的な「今」の世の中、即ち道長の世の中に対する批判と言えるのではないか」という（注5）。田畑氏のこの結論は特に藏人に関する今昔の対比に注目するところから導かれており、その点は当段のBにみえる対比とも共通するものであるが、当段ではさらにAやDのような今昔の比較も存在している。また、中島氏の論で指摘される道隆薨後という時間については、当段では執筆年時が示されておらず、必ずしも当てはめることができるとは限らない内容になっている。

また、当段で今昔の対比が見られる文脈にも注意が必要であろう。Aは説経の講師の容貌に触れる冒頭部分であるが、すぐに今昔の対比によってその叙述は中止される。そして、ここで今昔を対比したのに続き、その後の一文を挟んで、またすぐにBの藏人に関する今昔の対比が語られ、この「今」を詳しく語る形で、最近の「藏人五位」の説経聴聞の様子が語られていくのである。Cには今昔の対比はないが、Cは、Bで語られる説経慣れした者に対して、それとは対照的なありようについて語った部分であり、Bから連続する内容になっている。そして、Bで語られたような説教の常連となった「藏人五位」を批判するという連続性をもってDは語られ始める。そして、話題は男性から女性へと移り、女性の説経聴聞について今昔を比較する部分で、この章段は終わる。

このように、この章段においては、今昔の比較が、AからBへのつながりを作りながらBCの男性の説経聴聞の話題の契機となり、さらにはDを締めくくるというように、この章段の叙述の流れを作る上で重要な役割を果たしていると言えるのである。「説経の講師は」段は、分量の少ない章段ではないが、その点を加味しても、今昔の対比が繰り返し現れ、この段の叙述の中で一定の役割を果たしていることは着目すべき点だと言えよう。

三 「はじめつ方ばかり、ありきする人は」の本文と解釈

前節では、本段の今昔の対比表現について述べたが、これらの対比表現の中には、本文や解釈に問題があるものが含まれている。これは、Dの以下の部分である。該当箇所を三巻本・能因本によって挙げると、以下のようになる。

〔三〕 さればとて、……ははじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき。
されど、……この草子など出で来つはじめつ方は、かちありきする人はなかりき。

〔三〕 たまさかには、壺装束など……して、なまめき化粧じてこそはあめりしか、それにたまさかには、壺装束などばかりして、なまめき化粧じてこそありしか、……それも

〔三〕 物語などをぞせし。説経などには、ことにおほく・聞えざりき。このごろ、物語で……をぞせし。説経など……は、ことにおほくも聞かざりき。このごろ、

〔三〕 そのをりさし出でけむ人、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。
〔能〕 その書き出でたる人の、命長くて見ましかば、……いかばかりそしり誹謗せまし。

まず、前半の「はじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき」という部分について検討したい。この部分について、三巻本を底本にしている注釈書では、『全講』が「三巻本に「はじめつかたはかりありき云々」とあるが「り」は「ち」の誤写と認めて能因本諸本の本文に従つておく」とし、『角川』『新大』『学術』もこの校訂案に従っている。しかし、「かちありき（徒歩歩き）」という表現を認めるのは難しいと思われる。徒歩の意で「かち」が使われる用例を探すと、以下のような例がある。

・近しと聞けど、もの憂くて、起きもあがられぬを、これかれとふべき人、徒歩からあらまじきもあり。
〔蜻蛉日記〕二八九

・下仕へは徒歩より歩む。
〔うつほ物語〕春日詣①二五

八)

・みな徒歩より出でたまひぬ。
〔うつほ物語〕吹上上①三九八

・「徒歩からまかりて言ひ慰めはべらむ」と申せば、……
〔落窪物語〕六〇

・「徒歩よりおはしたなめり」と思ふに、めでたくあはれなること、二つなくて、……
〔落窪物語〕六四

・ことさらに徒歩よりと定めたり。
〔源氏物語〕玉鬘③一〇四

・これも徒歩よりなめり。
〔源氏物語〕玉鬘③一〇五

これらの例を見てわかるように、「徒歩で」という意味を表す時は、「徒歩から」もしくは「徒歩より」という形を取るのが通例であり、「徒歩ありき」という表現が同時代に存在していなかったであろうことがわかる。そのため、能因本の本文によって校訂するのは適当とは言えない。

一方で、校訂しない立場を取った注釈書でも、「はじめつ方」の解釈は分かれている。『解環』は「私が説経に凝っていた」初め頃」と解すのに対して、『叢書』は説経の「初日」、『新全』は「説教の始めの方ぐらい」とする。また、津島知明氏は「聴聞が流行し始めた当初（これほど社交場化していなかった頃）」としている（注6）。ここで改めて「はじめ

つ方」の前後の内容を確認すると、以下の通りである。

「そこに説経しつ、八講しけり」など、人の言ひ伝ふるに、「その人はありつや」「いかかは」など、定まりて言はれたる。あまりなり。などかは、むげにさしのぞかではあらむ。あやしからむ女だにいまじう聞くめるものを。さればとて、はじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき。たまさかには、壺装束などして、なまめき化粧じてこそはあめりしか、それに物詣などをぞせし。説経などには、ことにおほく聞えざりき。

傍線部の直前で、誰もが八講に熱心に出かける〈今〉の様子が語られていることから、「はじめつ方」は、これほどまでに八講に出かけることが一般化していなかった頃を示すことが確認できる。

ただし、この点を確認してもなお、傍線部を三巻本の本文のまままで読むことは難しいと考えられる。なぜなら、「はじめつ方ばかり」と過去を比較の対象とした上で、「なかりき」と過去を示す助動詞が用いられるという矛盾が存在したままだからである。このままではいつといつを比較しているのか意が通らない。そして、先述のように、能因本の「かちありき」という本文は、それ自体が何らかの誤りを含んでいる可能性が非常に高いことが用例から確認できる。

このように、三巻本の「ばかり」に対応する部分、能因本の「はかち」は、いずれもこのままの本文では読めないものであり、現存の三巻本、能因本の本文は、いずれも書写過程での写し間違いによって生じたものだと考えるしかないものである。そこで、問題になっている箇所「り（字母「利」）」と「ち（字母「知」）」と字形が似る字を挙げると、「く」を挙げることができる。「く」の字母としてよく使われる「久」「具」「九」のいずれにおいても、「り」「ち」と形が近い。現存の三巻本にも能因本にもない本文ではあるが、「こ」は、「はじめつ方は、かく歩きする人はなかりき」という本文が『枕草子』が成立した当時の形であり、現存の三巻本・能因本の本文はそこからの誤写によって生じた本文だと推定する。女性の聴聞について、現在は身分の低い者までが出かけているが、説経聴聞が一般化しはじめた頃は、女性で現在のように頻繁に出歩く人はいなかった、と述べた部分だと解釈するのが適当だと考えられる。

さらに、三巻本ではこの箇所は女性の説経聴聞についての今昔対比表現になっているのに対して、能因本では、「この草子など出で来つはじめつ方は、かくありきする人はなかりき」と、『枕草子』執筆開始時点を指すような本文になっている。これに続く部分においても、三巻本の「そのをりさし出でけむ人」に対応する部分は、能因本では「その書き出でたる人の」という本文になっている。能因本では、「されど」以下は、注記のような体裁で『枕草子』の執筆時点を示した上で（注7）、「その書き出でたる人」と清少納言を指し、後人が書いた部分のようになっていと言えよう。つまり、三巻本は〈作者〉が今と昔を対比しながらこの章段を書いているという姿勢を示している。前節で述べたような、章段で語られる内容の契機になったり、各部分の連繋を作るといふ今昔表現の役割も、この章段の叙述の主体が常に〈作者〉だからこそ維持されていると考えられる。〈作者〉が章段冒頭で今と昔を比較したのをきっかけとして、説経に関する〈今〉や〈昔〉について述べるという発想のもとに章段の叙述は進んでいくのである。それに対して、能因本の本文では、今昔の対比は、章段の最後においては、〈作者〉以外の人物による注記となり、付け加えの

ような形をとる。能因本のこの章段の末尾においては、〈今〉と〈昔〉の対比という点は守られているものの、そもそも叙述の主体が〈作者〉ではないという点においてそれまでの部分との断絶が存在している。〈作者〉による、今昔の対比表現は、能因本よりも三巻本のほうが徹底したあり方になっており、そのことによって、三巻本では今昔の対比表現が章段全体の構成に大きく影響していると言えよう。

四 「小白川八講」へのつながり

益田勝実氏は、「説経の講師は」の段の最後における女性の聴聞に関する叙述を、能因本の本文にしたがって読んだ上で、次のように述べている（注8）。

牛車や壺装束で供をつれて出かけて行くこの女性が家の羈絆を脱して、自己を保持出来る一面をもつ様になつて来た事は、仏教の流行以上の問題で、貴族社会の女性達に個人としてたちふるまへる方向への進歩が見られると考へてよからう。かうした事と、宮仕への生活の中で自分を処理してゆく後宮女性の出現とは、一つにつながったものであると思ふ。

また、佐藤道子氏は、法華八講の成立から隆盛までをたどり、次のように結論づけている（注9）。

奈良時代に、実態としてはすでに存在していた法華八講会が、四日八講もしくは五日十講の構成形式を整え、五巻日の美々しい勤修形式を定着させるに至る過程を、以上のようにたどって、九世紀末にその定着をみた。以後、先亡の供養に、写経供養に、賀の祝に、と、折々ごとの催行は重なり、一〇世紀末から一一世紀初期における盛行の頂点を迎える（後略）

『枕草子』の執筆が行われたと考えられる時期と、八講が盛んに行われた時期とはほぼ重なりと考えられ、実際に行われた八講ではないものの、『源氏物語』中に描かれる以下の八講の描写でも、幅広い層の八講聴聞、そして、女性も聴聞していることが確認できる。

蓮の花の盛りに、御八講せらる。六条院の御ため、紫の上などみな思し分けつつ、御経、仏など供養せさせたまひて、いかめしく尊くなんありける。五巻の日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた、女房につきつつ参りて、もの見る人多かりけり。

五日という朝座にはてて、御堂の飾り取りさけ、御しつらひ改むるに、北の廂も障子ども放ちたりしかば、みな入り立ちてつくるふほど、西の渡殿に姫宮おはしましけり。もの聞き困じて、女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人少ななる夕暮に、：

『源氏物語』蜻蛉⑤二四七

様々な人が聴聞に訪れた明石の中宮の八講において、女房たちも説経を聞いていた様子が描写されている。女性が出歩く形とはやや異なる点もあるが、女性の聴聞が行われていることが伺える例である。

雑纂本『枕草子』では、「説経の講師は」段の後に、「菩提といふ寺に」「小白川といふ所は」段が置かれている。「菩提といふ寺に」は「菩提といふ寺に、結縁の八講せしに詣でた

るに」で始まる章段であり、続く「小白川といふ所は」にも「結縁の八講したまふ」とあるように、これらの章段は「八講」というつながりでここに連続していることがわかる。また、「八講」というつながりだけではなく、第一節の最後でも述べたように、「説経の講師は」の内容は、「小白川といふ所は」と、非常に対応している部分が多い。間に「菩提といふ寺に」段を挟み、この三章段は「八講」というつながりでまとまっていいるものの、最初と最後の段のつながりが非常に強固だということもまた言えるのである。

しかし、この小白川八講の段は、その事件年時の点において、『枕草子』中でも特異な段であった。この小白川八講が行われたのは、諸注が『本朝世紀』寛和二年（九八六）六月二十日条などによって指摘する通り、寛和二年六月十八日から二十一日のことであったと推定され、清少納言が中宮定子のもとに出仕する以前の、花山天皇在位中である。このように、出仕前の出来事が『枕草子』に記されることは、ほとんどない。例外としては、三段「正月一日は」の白馬節会の描写中に見える「いかばかりなる人、九重をならすらむ」という箇所、そして、一三二段「円融院の御果ての年」に描かれる正暦三年（九九二）の出来事が挙げられる（注10）。

このような事件年時の点で特殊な内容を持ち出す上で、「説経の講師は」の段の今昔対比は、重要な役割を担っていると考えることができよう。三巻本において「少し年などのよろしきほど／今」、藏人についての「昔／今」、「はじめつ方／このごろ」という形で繰り返し現れる対比に導かれるかのように、小白川八講の時間はそこに立ち現れてくる。両段に挟まれている「菩提といふ寺に」の段も、時期を限定しない内容になっており、これらの時間構造を邪魔するものではない。八講について、今と昔を比較している流れがあるからこそ、そこに昔の八講の経験談を書いても差し支えないのだと言わんばかりに、出仕前の話が持ち出されてきているのである。この「説経の講師は」の今昔対比表現がなかったなら、小白川八講の話をここで持ち出すことは、読み手により違和感を与える結果を招いていたはずなのだ。三巻本の「説経の講師は」段は、この小白川八講をさりげなく『枕草子』中に位置させるために置かれたものと言うことができよう。

そうまでして、小白川八講の段をここに置く必要性について考えたい。『解環』は、次のようにその執筆意図を推測する。

悲劇の主人公義懐に同情はしながら、首鼠両端を持するが如き卑怯な為光にも糾弾の筆は執れないし、陽動作戦によって義懐方を欺きおおせた道隆に対しては、勿論、敬愛する皇后定子の父関白として、決して非難の口吻は漏らせなかったであろう。

『解環』はその上で清少納言の「醜い政治の裏面史へのささやかな批判」を読み取るのだが、土方洋一氏の次のような指摘（注11）を踏まえて、この点については、もう少し慎重に考えたい。

中関白家の栄華が実現するためには、義懐を外戚とする花山朝はむしろ終焉しなければならぬ王朝だったのだが、その王朝交代劇に伴う義懐の出家に「あはれ」ということばを投げかける（作者（表現主体）の位相は、中関白家を絶対的な賛仰の対象とするこのテキストの枠組みだけから説明することは困難である。テキスト構造の解明に歴史的コンテキストを安易に持ち込むことも、避けられるべきである）。

土方氏は、こう述べた上で、小白川の八講の体験は、「ことばによるコミュニケーションの限界と、それが破綻した時の無残な結果」を示唆しているが、（作者（表現主体）にとつ

てはことばによるコミュニケーションは否定してはならないものであり、そのため、義懷は「めでたき」教養人として造型され哀惜される存在とならなければならなかったと述べる。

たしかに、小白川八講は花山天皇が退位する直前の出来事であり、『解環』が指摘するように、『大鏡』などには、義懷方を欺く兼家方の様子も描かれている。

しかし、『枕草子』の小白川八講の段は、そこに集まった貴族達の詳細な衣装描写を通じてそれが風流な人々の集まりであったこと、そして、その雰囲気の中で女車に消息を遣った一部始終を語る部分でほぼ占められている。

そして、小白川八講の段の描写に沿って、兼家方の道隆と、花山院方の義懷の様子を確認すると、以下のように書かれていた。

「いかにいかに」と、誰も誰も問ひたまふ。ふとも言はず、権中納言ぞのたまひつれば、そこにまゐりけしきばみ申す。三位中将、「とく言へ。あまり有心過ぎて、しそこなふな」とのたまふに、「これもただ同じことになむはべる」と言ふは聞ゆ。

ここでは、女車に消息を言いかける義懷と、そのやり取りに興味を見せる道隆の姿が描かれている。花山天皇と、後の一条天皇のそれぞれ外戚の立場にあり、利害が激しく対立するはずの義懷と道隆だが、女車への興味という他愛もない一件を媒介として、対立するわけでもなければ、親密に言葉を交わすわけでもない両者の態度がここに示されているのである。この章段の最後で「さてその二十日あまりに、中納言、法師になりたまひにしこそあはれなりしか」と語られてはいるものの、この章段においては、花山院方と一条天皇方の外戚の対立は、まるでなかったかのように扱われているのである。

その後、長徳二年（九九六）一月には、伊周・隆家が誤って花山院に矢を射かけるという事件が起き、それによって、中関白家は窮地に立たされる。『枕草子』の小白川八講の段は、そのような事件を目の当たりにした〈作者〉によって書かれている可能性も十分ある。そのような事件が、実際には、一条即位前からの兼家方と花山院方の利害対立から続くものである可能性は存在している。しかしながら、『枕草子』小白川八講の段では、一条天皇即位前からの花山院方との対立はなかったかのように描かれているのだ。この段で描写される義懷の様子が、花山退位に伴う出家直前のものであることを、『枕草子』の叙述が自ら明かしている点にも注意が必要であろう。

あえて一条天皇即位前の出来事を書くこと、そして、そこにあったはずの対立を無かったもののように書くことは、後の伊周・隆家が花山院を射た事件について、それが政治的な対立によるものであったという可能性を消す効果を持っている。矢を射たのはあくまでも誤解によるものであり、以前からの対立や敵意によるものではないことを証明するものとしてこの章段を読むことが可能なのだ。『枕草子』の記述は、政治的な対立を積極的な形で否定するものではないが、宮仕え以前の話をそこに書くということは、『枕草子』中では異例のことであり、そのこと自体をもって、そこに書かれた内容の意味を読む者に探らせることが可能なのである。

そして、このような章段を表立った違和感を与えない形で『枕草子』中に置くために、三巻本では「説経の講師は」段に今昔対比の表現を入れて、小白川八講の段につながる章

段配列を作り出していると言えよう。

おわりに

以上、本稿では、「説経の講師」の段に見られる今昔の対比表現が、四系統ある『枕草子』の諸本の中でも、とりわけ三巻本で徹底されていること、そして、その対比表現が、出仕前の出来事を描く小白川八講の時空を導いていることを指摘してきた。

他の章段ではほとんど見られない出仕前の出来事の描写は、章段配列によって慎重にそこに置かれれば置かれるほど、なぜここに小白川八講のエピソードが配置されているのかを読み手に考えさせる対応だと言えよう。あえて花山天皇退位に関する話題に触れること、そして、政治的な対立に極力触れないように書くことは、そこにある対立をなかつたもののように描く効果を持っており、それは三巻本の表現と章段配列があるからこそ可能になる手法だと言えるのである。

(1) 本論中で用いた『枕草子』の注釈書とその略称は、以下の通りである。

【全講】池田亀鑑『全講枕草子』至文堂、一九五六～一九五七年

【角川】石田穰二『角川文庫 新版枕草子』角川文庫、一九七九～一九八〇年

【解環】萩谷朴『枕草子解環』有朋堂書店、一九八一～一九八三年

【叢書】増田繁夫『和泉古典叢書 枕草子』和泉書院、一九八七年

【新大】渡辺実『新日本古典文学大系』岩波書店、一九九一年

【新全】松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』小学館、一九九七年

【学術】上坂信男ほか『枕草子』講談社学術文庫、一九九九～二〇〇三年

また、各系統の本文と章段の数え方は、以下の注釈書によったが、底本を校訂している箇所があることに留意し、校訂付記や、同系統の他の本文を参照した。

・三巻本―松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(小学館、一九九七年)

・能因本―松尾聰・永井和子『日本古典文学全集 枕草子』(小学館、一九七二年)

・前田家本―田中重太郎・前田家本『枕冊子新註』(古典文庫、一九五一年)

・堺本―清水博司『堺本枕草子評釈』(有朋堂、一九九〇年)

『枕草子』以外の散文作品の引用は、『新編日本古典文学全集』によった。

(2) これらの章段を「車」という空間から分析した論考に、大洋和俊「枕草子の〈表現〉―小白河八講の「牛車」」(『日本文学』四四・九 一九九五年九月)がある。

(3) 増淵勝一「枕草子鑑賞(第三一段〜第三七段)」『枕草子講座』一 一九七五年

(4) 田畑千恵子「枕草子における「昔」「今」の意識―六位蔵人と「青色」をめぐる―」

『国文学研究』七十五 一九八一年十月

(5) 中島和歌子「枕草子における今昔の対比表現に関する一考察」(『国文学研究ノート』

二〇 一九八七年六月)

(6) 津島知明「亀裂に巢食う〈花山院〉―枕草子「小白川」と「菩提寺」の風景」『古代

中世文学論考』二七 二〇一二年十二月

- (7) 増淵勝一氏は「本段は、文末に「されど、この『草子』など出で来つはじめつ方は云々」とあるように、長保二年(一〇〇〇)十二月皇后定子崩後の大改訂による執筆と考えられるが、則光の官歴との関連で考えると、同三年(一〇〇一)には攔筆されていたとも推量される」(注三 前掲論文)と言うが、本段の具体的な執筆時期については、なお慎重に考えたい。

- (8) 益田勝実「源氏物語の荷ひ手」『テーマで読む源氏物語論 三 歴史・文化との交差／語り手・書き手・作者』二〇〇八年 勉誠出版、初出：『日本文学史研究』一一一九五一年四月

- (9) 佐藤道子「法華八講会―成立のことなど―」『文学』五七二 一九八九年二月

- (10) これらの段において出仕前の出来事が語られるという点については、以下の拙稿において、それぞれ考察したことがある。

拙稿「三卷本『枕草子』の〈始まり〉と〈終わり〉―三段「正月一日は」・二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」を中心に」『物語研究』一三 二〇一三年三月)

同「読む 聞き書きの臨場感―『枕草子』『円融院の御果ての年』」『日本文学』六四・三 二〇一五年三月

- (11) 土方洋一『枕草子』の〈書く〉主体―小白河八講の段をめぐる―」『青山語文』三一 二〇〇一年三月)

第三章 三卷本『枕草子』「三月ばかり物忌しにとて」の段における「少将」をめぐる

―『落窪物語』との関わりから

はじめに

三卷本『枕草子』二八二段「三月ばかり物忌しにとて」の前半部と後半部には、それぞれ別の機会に清少納言が物忌のために宮中を離れた時の話が書かれている。前半部は、「三月ばかり」に物忌で「人の家」に行った時の話であり、続く後半部は、以下のような話である（注1）。

そのころ、また同じ物忌しに、さやうの所に出で来るに、二日といふ日の昼つ方、いとつれづれまさりて、ただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、仰せ言のあれば、いとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。

「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かなとなむ。わたくしには、今日しも千歳の心地するに、暁にはとく」とあり。この君のたまひたらむだにをかしかべきに、まして仰せ言のさまは、おろかならぬ心地すれば、

「雲の上も暮らしかねける春の日を所からともながめつるかな

わたくしには、今宵のほども 少将 にやなりはべらむとすらむ」とて、暁にまゐりたれ

ば、「昨日の返し『かねける』、いとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるる、いとわびし。まことにさる事なり。

この章段には、事件年時や、清少納言の歌を定子が咎めた理由など、複数の問題点があるが、そういった問題点のひとつとして「少将」が具体的に何を指しているのか、という点がある。一見唐突に持ち出されてきたかのようなこの「少将」という語を見ると、何か本文に誤りがあるのではないかという疑問も生じるが、この章段が存在する三卷本、能因本、前田本いずれの本文も「少将」となっており、少なくとも異同はない。また、「なりはべらむとすらむ」は、能因本では「なりはべらむずらむ」、前田本では「はつらん」となっているが、この異同を手がかりに「少将」が誰なのかを特定することは難しそうである。

この「少将」は誰のことを指しているのか。本稿においては、「少将」と呼ばれるこの人物について検討し、その背景を探っていきたい。

一 「少将」についての先行研究

当該章段の「少将」については、今までいくつもの説が提出されてきた。特に現代注において最も多く紹介されてきたのは、次の『春曙抄』の説であろう（注2）。

百夜かよへと言ひし女のもとへ九十九夜行きて、今一夜を待ちあへずして失せたりし深草の少将の世語りにて言へる詞にや。清少も早く参りたき心焦られに、今夜一夜を待ちかねて失せやし侍らむとなるべし

しかし、たとえば『新全集』がこの『春曙抄』の説を紹介しつつも「この説話の発生は後世らしくて、にわかには従いかねる」と注するように、多くの注釈書は『春曙抄』の説に納得しているわけではない。その理由として一番大きなものは、『新全集』も指摘しているように、深草の少将のこの説話が『枕草子』が書かれた時期以後に成立したものである可能性が否定できない、という点である。現存する文献のうち、深草の少将の話としてこの説話が確認できる一番古い資料は、謡曲『通小町』である。『通小町』では、深草の少将は、自分に逢いたければ「車の榻に、百夜通へ」と小野小町に言われて、人目を忍んで九十九夜まで通ったものの、最後の一夜を残して亡くなってしまう。同様の話で一番古いものが、『奥義抄』に見えるが、こちらには深草の少将の名前は見え、ず、「をとこ」「女」の話とされている。『通小町』同様、「をとこ」は九十九夜まで通うが、今日で百夜になるというその日、親が急死したために、男は女のもとに行けなくなってしまう、という話である。

このように、百夜通い説話が『枕草子』以前に成立していたことが確認できる資料は、今のところ見つからない。しかし、問題は説話の成立時期だけなのだろうか。深草の少将の説話が、すでに九十九夜も通い、残り一夜を残すばかりという話であるのに対し、清少納言は、たった二日とはいえ、宮中を離れている状態なのである。しかも、清少納言の帰参を待ち望む宰相の君にとっては、今日が「千歳の心地」とも感じられるものなのであった。千年も宮中を離れているかのようにだと言われた清少納言が、すでに九十九夜も通った人物に自らを重ねる内容の返信するのは不自然である。『春曙抄』の説は、たとえ『枕草子』よりも前に百夜通い説話が成立していたとしても成り立たないのではないだろうか。

この「少将」については、近年、新しい説が次々と発表されている。まず、同免木利加氏が、宰相の君の私信の「今日しも千歳の心地」という表現に近い例として『大式高遠集』七番歌の「とくくればうれしかるべきけふしもぞちとせをすぐすこちなりける」を指摘し、この歌を詠んだ時の高遠が少将であった可能性が高いと推定している(注3)。しかし、『枕草子』のこの「少将」が高遠だったと解釈した場合、「千歳の心地」と言ったのはあくまでも宰相の君であるにも関わらず、それに対して清少納言が、自分が「少将(高遠)」になつてしまいうと答えるのは、やり取りとしてかみ合わないのではないかという疑問が生じる。

次に新たな説を発表したのは、中田幸司氏である。中田氏は、『うつほ物語』吹上上巻で「少将」(仲頼)が詠んだ「春風の吹き上げに匂ふ桜花雲の上にも咲かせてしがな」(①四〇一)を指摘し、次のように述べる(注4)。

宇津保物語の「少将」の「春」、「雲の上」にも桜を咲かせたいという願望の和歌が念頭に置かれ、「春」、「雲の上」と詠まれる定子後宮の居心地が自らの参内でよくなることを願う主題の和歌へと発展した関係があるのではないか。ここに影響関係を指摘しておく。

だが、「雲の上」「少将」という語は『枕草子』当該章段と共通するものの、この「春風の」歌は、物に書き付けた和歌が八首連続で記された中の二首目であり、特にこの歌だけが物

語上重要な役割を果たしているわけではない。『枕草子』において、『うつほ物語』の話題が定子周辺で出る時には、仲忠・涼優劣論争に関わるものがほとんどであるにも関わらず、なぜ特に仲頼のこの歌なのか、という点が説明できない。

また、最新の説としては、坪美奈子氏が次のような指摘をしている(注5)。

「なほ世にめでたきもの 臨時の祭のおまへばかりの事」(一四五)の段に、「ゆゆしうせちに物思ひ入れ」た結果、ついに(願ひ叶つて)その所に居つく幽霊となった「少将」(能因本「良少将」。三卷本、前田家本ではそれぞれ「頭中将」、「在五中将」)の噂が見える。従来、思い叶わず絶命する「深草少将」の話柄などが引き合いにされているが、作品の中で解すとすれば、清少納言の私信の言と関わるのは、ここ、一四五段の「少将」であろう。

この「少将」の話は、三卷本では一三六段「なほめでたきこと」の中で、賀茂の臨時の祭りの素晴らしさを述べる部分に出てくる。本文は、次の通りである。

頭中将といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、亡くなりて、上の社の、橋の下にあなるを聞けば、ゆゆしう、ものをさしも思ひ入れじと思へど、なほこのめでたき事をこそ、さらにえ思ひ捨つまじけれ。

坪氏の説には、『枕草子』内の叙述と関わりを持つていう強みがある。しかしながら、まさに宮中を離れている清少納言が物忌みで滞在中の場所に居つくという状態になってしまった場合、宮中に永遠に帰ることができないことになりはしないだろうか。宰相の君の私信は、清少納言の早い帰参を促すものであり、清少納言は、その宰相の君の気持ちに応えるような返信をしなければならないはずだ。あるいは、清少納言が「思ひ入れ」て宮中に、居つくようになる、と読んだとしても、「なほめでたきもの」の段で「ゆゆしう」とまさに言われていたこの気味悪い話を持ち出すのは唐突でもあるし、もし怨霊のような形で宮中に留まるといった話をされているとするならば、宰相の君も困惑するに違いない。本文の異同の問題を別にしても、「なほめでたきもの」の段に出てくるこの人物の話と当該章段の「少将」を結びつけることは難しいだろう。

以上のように、当該章段の「少将」については、様々な説が発表されているものの、深草の少将、大式高遠、『うつほ物語』の仲頼、『枕草子』「なほめでたきもの」の段の「少将」、のいずれを当てはめても、説明が成り立たないのが現状である。一体、この「少将」は誰のことを指しているのか。以下、引き続き検討したい。

二 「少将」と『落窪物語』

『枕草子』中の「少将」の用例には、以下のものがある。

- ① 相尹の馬頭のむすめ少将 (一〇〇「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」)
- ② 春宮の御使に、周頼の少将まゐりたり。(同)

- ③ 出居の少将。 (一一九「暑げなるもの」)
- ④ 四位の少将。 (一一五「君達は」)
- ⑤ 交野の少将。 (一九九「物語は」)
- ⑥ 御綱の助の中少将、いとをかし。 (二〇六「見物は」)
- ⑦ 交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし。
- (二七四「成信の中将は、入道兵部卿官の御子にて」)
- ⑧ 左右の大將、中小將などの、： (二七七「神のいたう鳴るをりに」)

実在の特定の人物を指すものとしては、①の女房「少将」と②「周頼の少将」があるが、いずれも当該章段との関わりを見出すことができない。また、③④⑥⑧は、特定の人を指していない、もしくは特定の人を指しているものの具体的な名前が挙がっていない例である。つまり、定子周辺で「少将」と言えばこの人物を指す、という了解が成立する程に深い関わりを持っている人物は、『枕草子』を読む限り、いないと考えて差し支えなさそうである。もしそのような人物がいたとしたら、「少将」として頻繁に『枕草子』中に現れてもおかしくないが、そのような人物は見当たらない。

一方、『枕草子』中に見える物語上の人物としての「少将」には、まず、⑤⑦の「交野の少将」がいる。しかし、現存する資料における交野の少将のエピソードをそれぞれ確認しても、清少納言の言う「少将」との結びつきは見つからない。ただし、これは『交野の少将』が散逸物語であって、現在、登場人物である交野の少将について確認できる情報が少なすぎるからだと考えることもできよう。また、『交野の少将』に限らず、散逸して現在に伝わらない物語は多数あったはずで、当該章段の「少将」は散逸物語の登場人物を指しているという可能性も、もちろん否定はできない。

けれども、『枕草子』中に見える「少将」のうち、残る一例である⑦「落窪の少将」についてまずは検討しておきたい。『落窪物語』の少将道頼は、巻一で初めて登場して以来、落窪の君を救出して自邸に引き取った後、巻二の途中で中将になるまで、「少将」であった人物である。この道頼を指した『枕草子』の「落窪の少将」という語句は、二七四段「成信の中将は、入道兵部卿官の御子にて」の段の、以下の一節に出てくる。

雨は、心もなきものと思ひしみたればにや、かた時降るもいとにくくぞある。やむことなき事、おもしろかるべき事、尊うめでたかべい事も、雨だに降れば、言ふかひなくくちをしきに、何かその濡れてかこち来たらむが、めでたからむ。交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし。昨夜、一昨日の夜もありしかばこそ、それをもかし

けれ。足洗ひたるぞ、にくき。きたなかりけむ。

ここでは『落窪物語』巻一に見える雨夜訪問譚について触れられている。道頼は、落窪の君との結婚三日目の夜が大雨だったため、一度は落窪の君の所へ今夜は行けないという文を出す。しかし、あこぎと落窪の君からの返信を見て気の毒になり、徒歩で出かけるものの、途中で盗人と疑われ、汚物をつけた状態で落窪の君のもとにたどり着くのである。

このようにして散々な目に遭いながらも、滑稽な程に必死になって、自らを待ち望む相

手の元に駆けつける『落窪物語』の少将道頼、実は彼こそが『枕草子』「三月ばかり物忌しにとて」の段における「少将」の正体なのではないだろうか。清少納言の帰参を待ち望んでいることを伝えてきた宰相の君は「暁にはとく」と言ってきた。「暁」については、『新編』が「寅以降は翌日」と注している。たしかに、清少納言は二日目が終わって日付が変わるまでは物忌みにこもる必要があり、夜のうちに宮中に向かうには差し障りのある状況にある。しかし、そのような状況ではあるものの、「いとつれづれまさりて、ただ今もまゐりぬべき心地する」というのが（少なくとも『枕草子』内においては）清少納言の本音であった。清少納言は、大雨の中、自分を待ってくれている人がいるという思いに動かされて、汚物をつけた滑稽な姿になりながらも落窪の君のところに駆けつけた道頼に自らをなぞらえたのではないだろうか。物忌み中で、本当ならば夜のうちはその場に留まっていなければならないのだけれども、宮中で待っていて下さるというその気持ちを知ったうれしさの余り、差し障りがあることも無視して、暁を待たずに、あの「少将」のような滑稽な姿をさらしながら無我夢中で宮中に駆けつけてしまいそうです、という気持ちを表明したものと考えられるのである。それは、「暮らしわづらふ」と伝えてきた定子、「今日しも千歳の心地する」と言ってきた宰相の君に、感動と感謝を伝え、自分としても一刻も早く宮中に帰りたい気持ちだという同調を伝える返信であった。

宰相の上の私信「今日しも千歳の心地」が、定子の歌「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな」の中の「暮らしわづらふ」「今日」に対応したものであるのと同様に、清少納言の「今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」もまた、「雲の上も暮らしかねける春の日を所からともながめつるかな」の下の句に対応したものである。つまり、清少納言は、今いる場所のせいで一日を暮らしかねているのかと思い、ぼんやりと物思いにふけていたが、定子と宰相の上からの文を見て、実はこの過ごしがたさは自分一人だけが感じていたことではなかったと気づき、そのことに気づいた今、滑稽なまでに必死になつて夜のうちに宮中に戻ってしまいそうだ、と言っているという対応関係である。

清少納言の返信の後半は、「わたくしには」と、私信であることが示されている。しかし、たとえば、八二段「さてその左衛門の陣などに行きて後」において、里にいた清少納言に対し、定子から「とくまゐりね」などある仰せ言が届けられた際、その端に書かれていた女房からの私信に対して、以下のように清少納言が応答したことが見える。

わたくしには、「いかでかはめでたしと思ひはべらざらむ。御前にも、『なかなるをとめ』とは御覧じおはしましけむとなむ思ひたまへし」と聞えさせられたば、：

ここにも「わたくしには」という断りが見られるが、この段では、その後、定子から「いみじく思へる仲忠が面伏せなる事は、いかで啓したるぞ。」と咎められ、清少納言は急いで参上することになる（注6）。ここから、たとえ「わたくしには」とあったとしても、それは女房同士の完全に私的なやり取りではなく、定子の耳に入ることがあらかじめ予想されたものであることがわかる。清少納言の「わたくしには、今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」という返信も、一応は宰相の君への私信という形を取りつつも、実際には「雲の上も暮らしかねける春の日を所からともながめつるかな」という歌を補強し、宮中

へ一刻も早く帰りたい気持ちが一層鮮明に伝わるよう、定子を意識した内容となっていると言えよう。

以上のように、今までその指示内容がよくわからなかった「少将」は、『落窪物語』の道頼であり、定子・宰相の君と清少納言とのやり取りの中でこの『落窪物語』の雨夜訪問譚が有効に使われていることがわかるのである。

三 「少将」と「思君春日遅」、「ながめ」

今までの検討の結果、「少将」が『落窪物語』の道頼を指すことがわかった。しかし、定子の歌や宰相の君からの私信にはこの物語が直接持ち出されてきていたわけではなかったにも関わらず、なぜここで道頼の話が出てくるのか、若干唐突ではないかという疑問もまだ残る。ここからはこの「少将」が持ち出されてきた背景について考えたい。

このような「今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」という清少納言の返信を導き出したものとしては、宰相の君の「今日しも千歳の心地」という表現が挙げられる。これは、すでに検討したように、定子の歌「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな」が春の日の暮れがたさを前提としていることを踏まえて、それを「千歳の心地」と言ったものである。そして、この定子詠歌の下の句については、『新編』の以下のような指摘がある。

日暮れまでの時を過ぐすことに難儀する。二六二段（関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段、『新全集』では二六〇段…引用者注）と同じく「君を思ひて春の日遅し」（文集・十二・長相思）に拠る。「永日」に拠り、なかなか日が暮れないの意も掛ける。

ここで指摘されている『白氏文集』巻十二「長相思」の冒頭は、以下の通りである。

九月西風興 月冷霜華凝
思君秋夜長 一夜魂九升
二月東風来 草拆花心開
思君春日遅 一日腸九迴

（九月 西風興り、月冷ややかに霜華凝る。

君を思ひて秋の夜長し。一夜に魂九たび升る。

二月 東風来り、草拆けて花心開く。

君を思ひて春の日遅し。一日に腸九たび廻る。）

そして、同じく『新編』が指摘するように、二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段では、この『白氏文集』の詩句を踏まえた次のようなやり取りがあった。

さて八、九日のほどにまかつるを、「いますこし近うなりてを」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる昼つ方、「花の心ひらけざるや。いかに」と

のたまはせたれば、「秋はまだしく侍れど、夜に九度のぼる心地なむしはべる」と聞

え

させつ。

「春日遅遅」の情」については、先に坏氏の詳細な論があり（注7）。その中でも紹介されているように、漢籍には、以下のように「春日遅」と同様の表現が複数見られる。

・『詩経』国風・豳風「七月」

春日遅遅 采芣祁祁

女心傷悲 殆及公子同歸

（春日遅遅たり 芣を采ること祁祁たり

女心 傷悲す 殆はくは公子と同一に帰かん）

・『詩経』小雅・鹿鳴之什「出車」

春日遅遅 卉木萋萋

倉庚喈喈 采芣祁祁

（春日遅遅たり 卉木 萋萋たり

倉庚 喈喈たり 芣を采ること祁祁たり）

・『白氏文集』卷四「驪宮高」（『和漢朗詠集』上・夏・蟬）

遅遅兮春日 玉甃暖兮溫泉溢

嫋嫋兮秋風 山蟬鳴兮宮樹紅

（遅遅たる春の日 玉の甃 暖かにして溫泉 溢てり

嫋嫋たる秋の風 山蟬鳴きて 宮樹紅なり）

これらの漢籍の表現は、たとえば『万葉集』卷第十九・四二九二の「うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば」が、左注に『詩経』小雅を踏まえていることを示しているように、和歌にも影響している。

しかし、「三月ばかり物忌しにとて」の段のやり取りで踏まえられているのは、やはり『新編』が指摘するように『白氏文集』卷十二「長相思」であろう。「君を思ひて春の日遅し」という詩句だからこそ、表面上は春の日の長さを持て余しているだけであるかのように見える定子の歌が、清少納言への言葉と成り得るのである。語句の対応という点では「長相思」と直接結びつかないような定子詠歌ではあるが、清少納言が返歌において「春の日」を詠み込んでいるのも、定子の歌にこの漢詩の発想を見取っていることと関係しているのだろう。また、二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」において、同じように定子が清少納言の帰参を促す際にこの漢詩が使われていることも重視したい。

そして、当該章段の定子・宰相の君と清少納言のやり取りが「長相思」を意識しているということからは、他にも重要な点が浮かび上がってくるのではないか。というのも、「長相思」は、女性が恋の思いを詠じるという内容の詩なのである。この漢詩中で女性は「君」と呼ぶ男性と一緒にになりたいと歌う。つまり、「君を思ひて」は女性の恋の思いなのだ。定子からの歌、そして宰相の君からの私信は、「長相思」と直接に語句の対応関係を持つわけ

でもなく、恋情という点を出してきているわけでもない。単に発想の一部を踏まえているというだけなのである。それにも関わらず、清少納言が「今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」と、自分を男性の立場に置いて返信しているのは、「暮らしわづらふ」という定子の言葉、そして「千歳の心地」という宰相の君の私信を、意中の男性に会いたいと願う女性の思いとしてあえて受け取る形で返信しているということなのである。帰参を待ち望んでいると伝えてきた言葉を女性の恋の思いに見立て、それに応える男性に自らをなぞらえているのだ。ただし、単に自分を求められている男性に見立てるだけでは、自分のほうが立場が上になってしまふ。それを避けるために、女性に想われてはいても滑稽な程必死になって女性のところに駆けつける道頼を引き合いに出した、というわけなのである。

さらに、ここで清少納言が道頼を持ち出してきたことは、定子に対する清少納言の返歌とも関わってくる。清少納言の返歌は「雲の上も暮らしかねける春の日を所からともながめつるかな」というものであった。この定子と清少納言の和歌の贈答は、『千載集』雑上九六六・九六七番歌として採られている。

一条院御時、皇后宮に清少納言はじめて侍りける比、三月ばかり二、三日まで
て侍りけるに、かの宮よりつかはされて侍りける 皇后宮定子

いかにしてすぎにしかたをすぐしけんくらしわづらふ昨日けふかな

御返事 清少納言

雲のうへもくらしかねける春の日をとこがらともながめつるかな

『千載集』の注釈書の中には、「雲の上」「春の日」「ながめ（長雨）」は縁語かと指摘するものがある（注8）。また、『新編』は「雲」「日」「ながめ（長雨）」は縁語」と断定する。

ただし、言葉の上でこれらが縁語の関係を形成していたとしても、『枕草子』『千載集』の両方において雨が降っていたとの記述はない。むしろ春の日の長さということを前提としてのやり取りであることを踏まえると、雨が降っていないほうが自然な位である。清少納言が夜までは物忌にこもっていて、暁に参上できたことを考えれば、宮中と滞在先の家はそれ程遠かったとは考えられないため、天気が違うという可能性は低い。また、もし定子と宰相の上が文を書いた時には晴れていたものが、清少納言が返信を書く際には雨が降り出していたという時間差の問題であったとしても、『枕草子』がそのように語っていない以上、それはこの定子方のやり取りにとって重要な情報ではない、という作品上の判断がすでに示されているといえよう。つまり、「ながめ」「長雨」の掛詞は、あくまでも修辞上のものであり、表層的な言葉遊びのようなレベルを越えて、この時の天気にならば当てはめて考えられるものではないのだ。

しかし、それにも関わらず、ここで「ながめ」という語が使われ、それが春の「長雨」との掛詞のように読める可能性があるということは、別の意味で重要である。なぜなら、その直後の「今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」で言及された道頼は、雨の中、落窪の君のもとに行った人物だからである。当該章段のそれまでの記述、そして和歌だけを見た時には意識されることも、またその必要もなかったはずの「ながめ（長雨）」だ

ったが、清少納言はその語をあえて使って、「その「ながめ（長雨）」というわけではないが、あの雨の中を必死に歩いていったあの「少将」のように」と言葉を続けているのである。

以上のように、「思君春日遅」や「ながめ」は、「少将」がここで持ち出されてくる上で、重要な役割を果たしていると言えよう。定子の和歌や宰相の上の私信、また清少納言の返歌は『落窪物語』を踏まえたものではないにも関わらず、清少納言からの私信にいたって突然「少将」の話がされるのは、一見唐突にも見える。しかし、それは決して唐突ではなく、それまでのやり取りを踏まえ、あるいは意図的に利用したものであって、和歌と私信のやり取り全体の中に確実に位置づけることが可能なものである。ここからも、「少将」が『落窪物語』の道頼であるということが説明できよう。

四 「雨」「雪」「文」の章段群

「少将」が『落窪物語』の道頼であるということは、二八二段「三月ばかり物忌しにとて」の段のやり取りにおいて意味を持っているということだけではなく、前後の章段とのつながりという点とも深く関わっているのではないか。

「交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし」という記述があった二七四段「成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて」では、男性の来訪と天気の関係について述べられていた。雨の日の来訪に情趣があるとは思えないこと、それとは対照的に月の明るい晩の来訪は趣深いこと、風の夜の来訪は頼もしいこと、雪の日の来訪は素晴らしく感じられることが語られ、最後は以下のように結ばれている。

かく聞きて、雨にありかぬ人やあらむとすらむ。月のいみじう明かき夜、紙のまたいみじう赤きに、ただ「あらずとも」と書きたるを、廂にさし入りたる月にあてて、人の見しこそをかしかりしか。雨降らむをりは、さはありなむや。

この段で言及された要素のうち、(1)「雨」、(2)「雪」、(3)「文」は、それ以降の章段において、入れかわり立かわり登場してくる。また、(2)「雪」という要素は、さらに広がりを見せ、火桶といった冬の情景にも関わっていく。二七四段からの章段においてこれらの要素がどのように出現するのかということをまとめると、以下ようになる。

- ・二七四段「成信の中将は、入道兵部卿の御子にて」…雨、雪、文
- ・二七五段「常に文おこする人の」

…雨（「雨のいたく降る昼」、「水増す雨の」）

雪（「雪のかきくらし降る」）

冬の情景（「火桶」）

文（雨の夕暮れの文、雪の日の文、火桶の火で読む文）

- ・二七六段「きらきらしきもの」……………該当する要素なし。
- ・二七七段「神のいたう鳴るをりに」……………該当する要素なし。
- ・二七八段「坤元祿の御屏風こそ、をかしうおぼゆれ」…該当する要素なし。

・二八〇段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」

∴雪（「香炉峰の雪」）

冬の情景（「炭櫃」）

・二八一段「陰陽師のもとなる小童べこそ」

←「祓などしに出でたれば」（二八一）、「物忌」で「出で来る」（二八二）
・二八二段「三月ばかり物忌しにとて」

∴雨（「ながめ」、『落窪物語』の雨夜訪問譚）

・二八三段「十二月二十四日、宮の御仏名の」

∴雪（「日ごろ降りつる雪」）

・二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」

∴雨（「雨など降りてえ帰らぬも」）

文（「人の文持て来るも」）

このように、二七四段と二七五段は密接な関わりを持って連続している。その後、二七六・二七七・二七八段を挟むことによって連続性はいったん途絶えたかのように見えるが、二八〇段を見ると、二七五段から二八〇段へは、雪の情景、「火桶」（二七五段）から「炭櫃」（二八〇段）というつながりが確かに存在していることがわかる。そして、このつながりはその後も継続されていく。二八一段には一見これらの要素がないように見えるが、それは章段をどこで区切るかという問題であり、祓や物忌で「退出する」という話ではこの二章段はひとまとまりと見なすことができるため、二八一段に共通する要素がなくても差し支えない。そして、二八二段では『落窪物語』の「少将」が雨の夜に女性を訪問した話、二八三段は一面の雪景色、二八四段には雨によって移動できなくなってしまう人や、文といった要素、というように、さらにつながっていくのである。

この章段の連続性は、三巻本では今までに見てきたような形を取るものの、同じ雑纂本である能因本では微妙に異なる形式を取る。というのも、能因本では、三巻本の「三月ばかり物忌しにとて」と「十二月二十四日、宮の御仏名の」に相当する章段の間に、もう一つ章段が入るのである。それが、「清水に籠りたるころ」の段である。この段は、三巻本の二二五段「清水に籠りたりしに」に相当する段であり、清水寺参籠の折に、定子から帰参の催促が来た内容が書かれている。この段は、物忌と帰参の催促の話が出てくる「三月ばかり物忌しにとて」からの連続性は確認できるが、「雨」「雪」「文」という要素は出てこない。章段区分を考え直して「三月ばかり物忌しにとて」とひとまとまりのものと考えることもできなくはないが、能因本の場合は、むしろ退出と帰参の催促という点に焦点をあてた配列になっていると考えるべきであろう。

三巻本を見ると、二七六・二七七・二七八段という「雨」「雪」「文」によるつながりでは説明できない部分を挟むものの、だからと言って、二七五段以前と二八〇段以後の連続性は否定できない。また、「雨」や「雪」といった要素は、単に存在するだけでなく、多く人や文がやって来たり帰ったりするのを防げるということに関わって持ち出されてきているということも見逃せない。そういった意味で、二七四段「成信の中将は、入道兵部卿の御子にて」における天気と男性来訪との関わりについての記述は、そこから続く二七五段から二八四段にかけての章段のつながりを生み出し、章段配列の論理となるものなのだ。

二八二段「三月ばかり物忌しにとて」の「少将」は、こういった章段群を形成する論理と密接に関わり、機能するものといえよう。そして、二七四段に登場する「落窪の少将」と、二八二段「少将」といった形で、同一人物が、間に六つの章段を隔てて登場する意味もその点にあると考えられる。

おわりに

『枕草子』中において、物語の内容を踏まえた表現がなされる際には、ひとつの傾向があるようだ。それは、特定の物語の登場人物やエピソードが繰り返し用いられることである。特にその傾向が顕著に現れるのは、『うつほ物語』の仲忠・涼優劣論争が持ち出される時であろう。七九段「返る年の二月二十余日」ではまさに定子・女房たちがその優劣を論じている場面が書かれ、八二段「さてその左衛門の陣などに行きて後」では「なかなるをとめ」と物語和歌の一部を利用してやり取りがなされる。さらに二一〇段「賀茂へ詣る道に」では田植歌の話に「仲忠が童生ひ」のことが持ち込まれてくるのだ（注9）。また、『伊勢物語』の場合も、七八段「頭中将のすずるなるそら言を聞きて」に「いをの物語」なりや」とある。これは「いせの物語」の誤写であり、『伊勢物語』第八四段において母から業平へ急ぎの文が届けられる場面を指していると考えられる。そして、この『伊勢物語』第八四段を踏まえた章段が二八九段「また、業平の中将のもとに」なのである（注10）。

特定の物語の、さらに特定の部分を複数回用いるやり方は、ある意味では単調であるようにも見える。また、清少納言の物語享受の水準の低さを批判する向きもある（注11）。しかし、物語を下敷きにしたやり取りは、相手との共通理解が素早く成り立つからこそ可能なのである。これは、『枕草子』作者としての清少納言と、おそらく執筆当時に第一に想定された読者としての定子とその関係者の間にも言える。そこでは、物語を多面的に捉えているかどうかということはたいして重要ではなく、物語の特定の部分を使うからこそ意図が伝わるのだ。

さらに、物語の特定の部分を踏まえた描写が複数見られるということは、後世の読者にとつては、『枕草子』がたしかにひとりの作者によつて書かれたものであると納得させるといふ効果をも發揮していよう。『枕草子』は、たとえば三巻本であれば、約三百章段にも分割されるような多種多様な内容を含んでいる。そこには、物語と違って話の筋というものもなければ、勅撰和歌集のような部立があるわけでもない。たとえ『枕草子』が清少納言ひとりによつて書かれた本文そのままだという保証がどこにもなくても、読者にとっては、一見ばらばらに存在しているかのような章段をひとつにつなぎ止める上で、物語に対して一定の態度を示す作者像というものが大事な役割を果たすのである。

そういった意味で言えば、『枕草子』の〈作者〉清少納言は、結果的に、特定の物語の一部分について思い入れを持ち、その話題を周囲と共有するひとりの女房、という像をむしろ積極的に引き受けていると言えよう。見方によつては物語に対する幅広い理解や享受のあり方といったものを欠いているように見えて、その一方では、〈作者〉としての位置を獲得しているわけである。

そして、三巻本の章段配列は、そのように特定の物語の一部分、すなわち今回の例では『落窪物語』の雨夜訪問譚について、男性来訪と天気との関係について語る〈作者〉が、やはりその雨夜訪問の場面を定子方とのやり取りに利用しているという点を意識し、それをうまく利用したものであると言える。「成信の中将は、入道兵部卿の御子にて」の段を先頭として「雨」「雪」「文」という要素でつながる章段群の前半と後半にそれぞれ『落窪物語』の雨夜訪問譚に関する話題を配置することによって、この二章段がこの章段群の枠組みのように機能するようになっていくのだ。

このように、三巻本『枕草子』二八二段「三月ばかり物忌しにとて」における「少将」は、『落窪物語』の道頼を指しており、それは章段内に描かれた定子や宰相の君とのやり取りだけではなく、前後の章段によって構成される章段群とも密接な関わりを有していたのである。

- (1) 三巻本『枕草子』の本文、章段番号は、新編日本古典文学全集『枕草子』（松尾聰・永井和子校注 小学館 一九九七年）によった。新編日本古典文学全集の底本は、三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本であるが、三巻本系統第一類本は「あぢきなきもの」（七五段）までの本文を欠いているため、その部分については、第二類本の相愛大学・相愛女子短期大学図書館蔵の弥富破摩雄氏・田中重太郎氏旧蔵本をもつて補われている。また、能因本『枕草子』を引用する場合は、日本古典文学全集『枕草子』（松尾聰・永井和子校注 小学館 一九七四年）によった。日本古典文学全集の底本は、学習院大学蔵三条西家旧蔵本である。また、前田家本の引用は、『前田家本枕冊子新註』（田中重太郎 古典文庫 一九七一年）によった。なお、『枕草子』以外の散文作品を引用する場合は新編日本古典文学全集に、和歌を引用する場合には新編国歌大観 CD-ROM に、それぞれよった。

- (2) 本論中で用いた『枕草子』の注釈書とその略称は、以下の通りである。

・『枕草子春曙抄（枉園抄）』（枕草子古注釈大成）誠進社 一九七八年…『春曙抄』
・松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）小学館 一九九七年

…『新全集』

・津島知明・中島和歌子『新編 枕草子』おうふう 二〇一〇年 …『新編』

- (3) 平成十八年度 中文学会春季大会における口頭発表『枕草子』「三月ばかり物忌しにとて」段における物語的背景（二〇〇六年五月）

- (4) 「枕草子」三月ばかり物忌しにとて「章段攷—和歌史と作歌—」（「論叢」（玉川大学）四十七号 二〇〇七年三月）

- (5) 「春日遅遅—『枕草子』「三月ばかり、物忌しにとて」の段の贈答歌—」（「和洋女子大学紀要」五〇 二〇一〇年三月）注部分

- (6) なお、八二段「さてその左衛門の陣などに行きて後」においては、中宮から咎めの言葉があり、それによって清少納言が参上するまでのやり取りが以下のように書かれている。

立ちかへり、「いみじく思へるなる仲忠が面伏せなる事は、いかで啓したるぞ。
ただ今宵のうちに、よろづの事を捨ててまゐれ。さらずはいみじうにくませた

まはむ」となむ、仰せ言あれば、「よろしからむにてだにゆゆし。まいて『いみじう』とある文字には、命も身もさながら捨ててなむ」とてまゐりにき。

この段では「ただ今宵のうちに」と言つた定子の言葉を受けて清少納言が参上するという話になっているが、「三月ばかり物忌しにとて」では、定子の指示ではなく、清少納言自ら「命も身もさながら捨ててなむ」という態度を示していると言えよう。

(7) 注5 前掲論文

(8) 片野達郎・松野陽一『千載和歌集』(新日本古典文学大系) 一九九三年 岩波書店

(9) 『枕草子』中の『うつほ物語』に関連箇所のうち、仲忠・涼優劣論争以外の登場人物が持ち出されてくる箇所には、その箇所に特有の論理があった。詳しくは、拙稿『枕草子』「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」の段をめぐって―『うつほ物語』忠こそとの関わりから―(古代中世文学論考刊行会『古代中世文学論考』第二十三集 新典社 二〇〇九年十月) 参照。

(10) 『枕草子』七八段・二八九段と『伊勢物語』の関係については、拙稿「三卷本『枕草子』第二八九段「また、業平の中将のもとに」の段をめぐって―章段配列との関わりから―」参照。

(11) 高橋和夫「枕草子の物語批評」『国文学解釈と鑑賞』二二・一 一九五六年一月、など。

第四章 三卷本『枕草子』「また、業平の中将のもとに」の段をめぐって

― 章段配列との関わりから

はじめに

三卷本『枕草子』の巻末部には、次のような連続した三つの章段が存在する（注1）。

【第二八七段】

右衛門尉なりける者の、えせなる男親を持たりて、人の見るに面伏せなりと、苦しう思ひけるが、伊予国よりのぼるとて、波に落し入れけるを、「人の心ばかりあさましかりける事なし」とあさましがるほどに、七月十五日、盆奉るといそぐを見たまひて、道命阿闍梨、

わたつ海に親おし入れてこのぬしの盆する見るぞあはれなりける
とよみたまひけむこそ、をかしけれ。

【第二八八段】

小原の殿の御母上とこそは、普門といふ寺にて八講しける、聞きて、またの日、小野殿に人々いとおほくあつまりて、遊びし、文作りてけるに、

薪こることは昨日に尽きにしをいざ斧の柄はここに朽さむ

とよみたまひたりけむこそいとめでたけれ。ここもとは打聞になりぬるなめり。

【第二八九段】

また、業平の中将のもとに母の皇女の、「いよいよ見まく」とのたまへる、いみじうあはれにをかし。ひきあけて見たりけむこそ、思ひやらるれ。

第二八八段の「打聞」は、第二五八段「うれしきもの」の「もののをり、もしは、人々言ひかはしたる歌の聞えて、打聞」などに書き入れらるる。「などの記述から、人から聞いた興味深い歌を書き留めたものとわかる。また、この三章段に続く第二九〇段には、「をかしと思ふ歌を草子などに書いておきたるに」とあり、第二九〇段も「打聞」関連の記述という点によって前段に続けられたように見える。そして、この三章段は、最初の段の「男親」、次の段では「御母上」、さらに次の段では「母の皇女」と続き、親という一貫したテーマのもとに配列された打聞章段群として構成されていると理解することができそうである。

しかし、そのような理解のみで本当によいのか。この三章段の性質を考える上では、なおいくつかの問題が存在すると思われるのだ。第一に、もし『枕草子』に歌についての覚え書きを書くことが当然であるなら、なぜ「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書きが必要だったのか。作者以外の詠歌を語ることを中心とする章段には、清少納言の出仕前と見られる時期に宮中で詠まれた歌について語る第一七五段「村上の先帝の御時に」や、出仕後に詠まれた定子の歌について書く第二二三段「三条の宮におはしますころ」、第二二四段「御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに」、第二二五段「清水に籠りたりしに」等

があるが、いずれも宮中で詠まれた歌、それも特に定子本人や周辺の歌が書き留められている(注2)。これらに対し、先の三章段の歌は定子付き女房としての作者とはまったく関わらないかのような歌である。そして、宮中や定子と関係しない打聞を書いた箇所は他にほぼ見えない。つまり、『枕草子』にこのような「打聞」を書くことは異例なのだ。そもそも「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書き自体が、『枕草子』の一部として本来は書くべきではなかったことを思わず書いてしまったという違和感を表明するものだったと考えられるのである。

第二の問題としては、「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書きの位置の不自然さがある。打聞集成としての三章段という構成意識があるのならば、この断りは、二章段目の第二八八段ではなく、第二八九段の末尾にあってほしいようにも思われる。また、もし、書いていて知らず知らずのうちにその内容が打聞になってしまったことに気づいた作者がこの断りを入れたのなら、その後は軌道修正を図りそうなものであるのに、第二八九段に至っても歌についてのメモのような叙述が続くことも落ち着かないように感じる。これは、たまたま筆が止まらなくなって、叙述の順番が少しおかしくなってしまっただけなのだろうか。

このように、この三章段は、一見「親」というテーマのもとに構成された打聞章段群のように見えて、実はそれだけでは説明できない様々な問題点を抱えている。本稿では、この三章段、中でも、特にその位置づけに問題があると考えられる第二八九段「また、業平の中将のもとに」の段について考察していきたい。

一 三章段の連続性と断絶性

すでに述べてきたように、第二八七段から第二八九段までの三章段の位置づけには様々な問題があると思われるのだが、さらに第二八八段の冒頭「小原の殿の御母上」という箇所には本文上の問題もある。ここは、『新全集』(注3)の底本である三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本では、「をはらのとのゝ御はゝうへ」と表記されている。一方、能因本(学習院大学蔵三条西家旧蔵本)では「また小野殿の母上」、前田家本では「またふの殿ゝはゝうへ」となっている。(堺本にはこの章段は存在しない。)

この章段の和歌は、『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷・一三三九にも見えるが、そこでは作者は「春宮大夫道綱母」と記載され、『拾遺抄』巻第十・雑下・五七二では、この歌の作者名は「右近大将道綱母」となっている。さらに、同じ歌が『道綱母集』三六番歌、『蜻蛉日記』巻末歌集にも載ることから、この和歌を詠んだのは藤原道綱母だと考えてほぼ間違いない。道綱は寛弘四年(一〇〇七)正月二十八日に東宮傳になっており、『公卿補任』、『角川文庫』は「傳の殿」とあるのが正しい。三巻本の誤写と思われる。」と注し、『学術文庫』も「傳の殿(道綱)の御母上」と解しておきたい」という。また、『新全集』も「傳の殿」という呼称を考慮して「ふ」「小」は誤りやすい」と指摘する。さらに、道綱を「小原の殿」と呼ぶ例は他に見えない上、「小原」と道綱の関わりも、この本文以外からはまったく確認することができない。やはりここは、元は「ふの殿」という本文だったと考えてよいであろう(注4)。

そして、三巻本の本文が本来「ふの殿の御母上」だったことから導き出される重要な点

は、この章段において、道綱母がその没後、道綱が東宮傳となった寛弘四年正月以後の呼称によって登場していることである。これは、『枕草子』の成立とも関わる問題となる点だ。なぜなら、『枕草子』の成立は数次に分けられるという考え方が現在の通説となっているものの、清少納言が仕えた中宮定子は長徳二年（一〇〇〇）十二月に亡くなっており、日記的章段に描かれる出来事の時期などから、この時期には大部分が出来上がっていたと考えられるからだ（注5）。道綱が「ふの殿」と呼ばれるようになる寛弘四年には、清少納言はすでに宮仕えを退いてから七年近く経っていたと考えられ、そのような時期のものと推定できる呼称を含む「打聞」が『枕草子』中に存在することは見逃せない。

さらに、第二八七段もまた、定子の崩御から少なくとも一年近く経った時期のものだとわかる。この章段には「道命阿闍梨」という呼称が見えるが、道命が阿闍梨になったのは、長保三年（一〇〇一）十一月であることが太政官符によって判明するからだ（注6）。つまり、この二つの章段は、「定子崩御後」という視界をそこに開くものである。たとえこれらの章段の呼称に部分的な手直しが入っているとしても、これらの呼称自体が執筆時期を表す指標であるかのように機能するため、過程の如何に関わらず、この部分が定子崩御後に書かれたかのような印象は変わらない。

その他にも、この二つの章段には複数のつながりがある。まず、第二八七段に登場する道命阿闍梨は道綱の息子であり、道綱母は道命の祖母にあたるという関係性である。また、第二八七段では孟蘭盆に関わる歌が詠まれたのに続き、第二八八段では法華八講（ただし、『拾遺和歌集』の詞書などによると、ここで行われたのは経供養であつたらしい）に関わる歌が詠まれる点にも連続性が認められる。そして、歌の性質においても、この二章段の歌は、共に笑いの要素を含む。第二八七段の歌は、自分で海に突き落とした男親を供養する者への揶揄の歌であり、第二八八段の歌は、法華八講が終わったからゆっくり管弦の遊びや作文をしようと、のびのびとその解放感を歌い上げる一種のユーモアや余裕を感じさせる歌である。さらに、道綱母の生没年は承平六年（九三六）頃―長徳元年（九九五）、道命の生没年は天延二年（九七四）―寛仁四年（一〇二〇）であり、第二八七段と第二八八段の内容は、いずれも『枕草子』成立からそう遠くない時期の話と推定できる。

それに対して、第二八九段の登場人物は道命阿闍梨や道綱母の親戚ではなく、その話の内容においても、孟蘭盆や法華八講との連続性を持たない。そして、この段で語られる歌は切実なものだ。この歌に対しては、「いみじうあはれにをかし」という評が付され、そこには業平とその母の気持ちに寄り添うような態度が見られる。先程まで笑みをたたえて歌を語っていた作者が突然真顔に戻ったかのような落差がここには存在しているのだ。さらに、第二八九段の業平の母、伊都内親王が亡くなったのは貞観三年（八六一）で、『枕草子』成立より百年以上も前である。この第二八九段の話は『伊勢物語』第八四段にも見えるが、たとえば『枕草子』とほぼ同じ時期に成立した『源氏物語』の絵合巻では、「近き世」の物語である『正三位』に対し、『伊勢物語』は「ふりにし跡」と忘れ去ってはいけなく擁護され、少し前の時代の物語と認識されている様子が見える（注7）。第二八九段は、この点でも、同時代的な話である第二八七段や第二八八段との間に差を抱えている。

つまり、第二八七段・第二八八段と第二八九段との間の連続性は弱いものでしかなく、むしろ断絶の方が大きいのだ（注8）。そして、能因本ではこの辺りの章段配列は三巻本と変わらないが、前田家本には注目すべき現象が見られる。前田家本では、三巻本の第二八

七段と第二八八段に相当する章段は連続して存在するものの、第二八九段に相当する叙述はどこにもないのである。前田家本は、能因本と堺本との合成本と言われている。前田家本合成前の能因本に第二八九段に相当する叙述があったのかは定かではないが、現在の能因本にある叙述が前田家本にないということは、この業平の母の歌についての歌語りが、前の段に続くべきものではないと判断されて削除された可能性を示すものである。

以上のように、第二八七段・第二八八段と、第二八九段とは、一連の打聞章段と見なすには、いくつもの問題を抱えている。第二八七段・第二八八段は、含まれる呼称によって定子崩御後に書かれたような様相を呈するのに対し、第二八九段は、(一)歌の詠者の間に存在する血縁関係、(二)仏教行事に関する和歌、(三)笑いの要素を含む歌、(四)描かれた出来事の時期、といった前の二章段が共通して持つ要素をどれ一つとして持ち合わせていない。そして、前田家本が最後の一章段を削除してしまった可能性までもがあることを併せ考えると、第二八九段の位置がいかに落ち着かないものかということがよくわかるはずだ。つまり、前の二章段は、「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書きをもつて、叙述に一つの区切りをつけているのであり、第二八九段は「また」という接続詞によって、そこに思い出したかのように添えられているに過ぎない。あたかも、第二八九段はもともとこの場所にあったのではなくて、他の段に含まれていたものの断片が何らかの事情によってこの場所に紛れこんでしまったかのようなのだ。

このように考えてみると、では、なぜ第二八九段はこの場所に存在しているのか、という疑問が起こる。ここからは、この第二八九段と『伊勢物語』、そして『枕草子』の他の章段とがそれぞれどのように関わるのかということについて考えたい。

二 『枕草子』と『伊勢物語』

はじめに、第二八九段と『伊勢物語』の関わりについて検討したい。第二八九段の話は『伊勢物語』以外に、『古今和歌集』や『業平集』にも見える。まず、『古今和歌集』・『伊勢物語』の本文と、『枕草子』第二八九段の本文を挙げる。

【『古今和歌集』巻第十七・雑歌上・九〇〇・九〇一番歌】

業平朝臣のははのみこ長岡にすみ侍りける時に、なりひら宮つかへすとて時時
もえまかりとぶらはず侍りければ、しはすばかりにははのみこのもとよりとみ
の事とてふみをもてまうできたり、あけて見ればことばはなくてありけるうた

老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな
返し

世中にさらぬ別のなくもがな千世もとなげく人のこのため

【『伊勢物語』第八四段】

むかし、男ありけり。身はいやしなながら、母なむ宮なりける。その母、長岡といふ所に
すみたまひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうで
ず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうしたまひけり。さるに、十二月ばかり
に、とみのこととて御文あり。おどろきて見れば歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな
かの子、いたううち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため

『枕草子』第二八九段

また、業平の中将のもとに母の皇女の、「いよいよ見まく」とのたまへる、いみじうあ

はれにをかし。ひきあけて見たりけむこそ、思ひやらるれ。

『枕草子』中の『伊勢物語』と関わる可能性のある記述は、第六〇段「河は」の中の「天の川原、「七夕つめに宿からむ」と、業平がよみたるもをかし。」という一節と、この第二八九段の二箇所だが、これらは、『伊勢物語』よりも『古今和歌集』に近い形だという西耕生氏の指摘がある(注9)。西氏は、高階師尚が斎宮と業平との不義の子だとする伝承から、高階氏を外戚とする中宮定子に配慮して、『枕草子』が『伊勢物語』を忌避していると見ている。この伝承に基づくと見られる記事が、『権記』寛弘八年(一〇一一)五月廿七日条にある。敦康親王への讓位を検討する一条天皇に対し、藤原行成が「故皇后宮外戚高氏之先、依斎宮事為其後胤之者、皆以不知也、今為皇子非無所怖、能可被祈謝太神宮也」(増補史料大成)と答える部分である。しかし、その後、この部分の本文には問題があることが土方洋一氏によつて指摘され、『権記』にはもともとこの記述はなく、院政期に流布し始めた伝承が書き込まれたものと分析されている(注10)。土方氏の指摘のように、この伝承が院政期以後のものだとすると、『枕草子』は少なくとも執筆時においては『伊勢物語』を忌避する必要があるはずである。

さらに、第七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」内の記述も問題となる。この章段内の「いをの物語」という本文が「いせの物語」の誤写である可能性を持つからだ。もし『枕草子』中に『伊勢物語』の書名が出てくるならば、『枕草子』の『伊勢物語』忌避の姿勢を認めることはできないだろう。この問題の箇所は、清少納言のことをひどく憎んでいるらしい藤原齊信からの文を主殿司が届けて来る場面にある。主殿司は「御返事とく」と言うが、清少納言は主殿司をいったん帰し、受取った文もすぐに見ない。すると、主殿司が再度来て、齊信の言葉を次のように伝える。

『いさらば、そのありつる御文を給はりて来』となむ仰せらるる。とくとくと言ふが、
「いをの物語」なりやとて、見れば、青き薄様に、清げに書きたまへり。心ときめき
しつるさまにもあらざりけり。

この部分は、三卷本第一類本(陽明文庫蔵本など)では「とくく」といふかいをの物かたりなりや、能因本(学習院大学蔵三条西家旧蔵本)でも「いをの物語」とあるのに対し、三卷本第一類本の一部や第二類本の大半では「いせの物かたり」となっている。清水浜臣説では「えせのものがたりといふ事也。頭中将より、けさう心にてえせ事をいひおこせるにはあらぬかと清少の思ふなり。」とするが(注11)、他に用例がなく、解しづらい。「魚の物語」(『角川文庫』)、「かいをの物語」(『解環』)という説もあるが、意味が通らない。

一方、これを『伊勢物語』を指すものと見る説もある。『春曙抄』は、「伊勢物語に、長岡の母より業平へ、とみの事とて御文ありといへり。頓は急々の事なればなり。」と説明する。やはりこの箇所はもともと「いせの物語なりや」という本文で、この『春曙抄』の説のように、『伊勢物語』第八四段を指したものと見るべきであろう（注12）。「を（遠）」と「せ（世）」は字形が似ていて誤写の可能性が高い上、用件はわからないもののとにかく急ぎの手紙だと語られる第七八段は、『伊勢物語』第八四段の話の重要な部分と対応すると考えられるからである。ここで、『業平集』（尊経閣文庫蔵本）五八番歌の詞書を見ておきたい。

ははみこながをかといふ所にすみ給ひける時、宮づかへいそがしうて、しばしばもえまからざりける、しはすのつごもりばかりに、とみのこととて侍るふみに

このように、非常に短い形を取る『業平集』の詞書にも、「とみのこと」という表現は同様に存在する。つまり、この要素は省くことができないものであり、母からの文は「とみのこと」だからこそ効果的なのだ。あえて年の暮れが迫った時期に、歳を重ね死別する前に息子に会いたいと訴えるこの歌は、時機を逃さず折に合った歌を用意したかのような理知的な側面と、かつ残された時間が少ないことに對する切実な焦燥とを絶妙に併せ持ち、『枕草子』第二八九段の「いみじうあはれにをかし」という評がまさにびたりとくる。そして、「とみのこと」と聞いた息子が真つ先に抱くのは、母の死の知らせではないかという危惧であり、文を見て、「とみのこと」は死の知らせではなく、母の会いたいという切迫した気持ちだとわかるところに、劇的な効果もたらされるのである。

『枕草子』第七八段もまた、最初に主殿司が文を持って来た時、清少納言は「あやし。いつのまに何事のあるぞ」と不審がる。受け取る側は、『伊勢物語』同様、急ぎの文が来るという予測は持っていない。しかし、主殿司は、一度目は「御返事とく」と、そして、二度目に来た時も「とくとく」と、繰り返し至急の用件だと伝える。そして、やっと文を見た清少納言は、「心ときめきしつるさまにもあらざりけり。」と思う。「心ときめきす」は、不安ではらはらする時にも、期待感でどきどきする時にも使われるが、ここは、文の内容への不安を表しているときではないか。自分を憎む相手からの文には、どんなひどい言葉が書き連ねられているかわからない。だからこそ、清少納言は開封を先延ばしにした。そして、はらはらしながらやっと文を開けると、予測とは異なり攻撃的な手紙ではなかったことを「心ときめきしつるさまにもあらざりけり」と表現していると解釈できるのだ。

このように考えると、第七八段と『伊勢物語』第八四段とは、（一）予測していない時に急ぎの手紙が届く、（二）手紙の内容はわからないものの、手紙を運んできた者から、とにかく急ぎの手紙だという情報だけはもたらされる、（三）今までの状況からきつと良くない手紙であろうと不安を抱き、緊張しながら文を開く、という話の流れがびたりと一致するのである。だから、三卷本第一類の「いの物語」は、もともと「伊勢の物語」という本文であり、第八四段を意識した表現と考えてよいものである。

この「伊勢の物語なりや」という表現は、定子周辺で『伊勢物語』第八四段がすでに話題にのぼっていたという前提を示すものだ。この表現は、それを受け止めて理解してくれ

る読者層が確実に存在したことの証であり、そのような層を想定して書かれたものと考えられる。一方、『枕草子』第二八九段では、業平とその母のエピソードと歌が語られ、賞賛されている。この記述を見ると、第二八九段の執筆時期は、第七八段が書かれる前、もしくは同時期と推定することができないだろうか。もちろん、確実なことがわからない以上、それはあくまでも推測に留まる。しかし、すでに定子周辺で話題にのぼり、共有されている『伊勢物語』第八四段の話を改めて書き留めて賞賛するという行為は考えにくい。『枕草子』第二八九段は、こうして清少納言が業平の母の歌を話題に出し始めたからこそ、定子や周辺の女房もこのやり取りへの興味を共有するきっかけができたのではないかという想像をも誘うほどに、第七八段との関係性を示す記述であるのだ。

今まで検討してきたような第七八段と第二八九段との関係性を考える限り、「ふの殿の御母上」という呼称を含み、『枕草子』の中でも最も遅い時期に執筆・加筆されたと推定できる第二八九段は、第二八九段よりかなり後に執筆された可能性が高い。よって、第二八九段は、第二八九段を書いてすぐに自然に浮かんてくる連想にしたがって書かれたとは言いがたい。ここにも、第二八九段と第二八九段の間に存在する断絶が認められるのである。

三 章段配列が作り出す「定子崩御後」の時間

『枕草子』第二八七段・第二八九段についての注釈書などの解説には、ひとつの傾向が存在する。たとえば、湯本祐之氏は、第二八七段について次のように解説する（注13）。

道命阿闍梨は藤原道綱の長子であるから、作者とは無縁の人ではない。作者の姉が藤原理能に嫁しており、この理能の姉（妹？）が道命の父道綱の母（『蜻蛉日記』の作者）である。

道命阿闍梨や道綱母が清少納言の縁戚にあたるという指摘は、『角川文庫』（第二八七段補注）、『解環』（第二八八段語釈）にもある。一方で、『新大系』は、道命阿闍梨について「藤原道綱の息。従って定子の従兄。」と説明する。たしかにこういった説明も可能であったはずだ。けれども、定子の縁者という説明は他にはほとんどない。むしろ、稲賀敬二氏は、次のように、清少納言の縁者という点をさらに明確に意識した説明をしている（注14）。

道綱の母は前段（「右衛門の尉なりける者の」大系³⁰⁷段）に出て来た道命の祖母。清少納言の姉が嫁した理能は、道綱の母の兄である。このあたりの打聞き、噂話が、どんな人々を中心にして語られ、広まり、清少納言の耳に入ったかという経路も想像できるわけである。

道命や道綱母が清少納言の縁戚だという説明も、定子の縁者だという説明も、どちらも間違いではない。それにも関わらず、清少納言の縁戚を意識した説明が多いという傾向には、呼称から推定される執筆年代の遅さや、清少納言が宮仕えを退いた後の執筆だという推定が、意識的にせよ、無意識にせよ反映されているようにも見える。さらに言うならば、ここに限って宮中とは無縁に見える歌語りが存在することを、宮仕えを退いた作者という点と併せ、何とかして説明しようとする意識が働いているのではないだろうか。そこで持ち出されてくるのが、その歌の詠者は清少納言の縁者であった、という本文からは直接的に読み取られることのない関係性なのである。つまり、この宮中や定子とは無関係に見える打聞章段は、作者の（私）の面を用いて（補助線）を引かないと位相を説明しづらい、

不安定な位置にあると言えるのではないか。もちろん、そのような〈補助線〉を用いた理解が正しいという保証はない。これらの歌がどのような経路を通じて作者の耳に入り、書き留められたかは、不明と言う他ないからである。それでもなお、宮仕えを退いた作者が自らの縁者の歌を書き留めたという像がそこに結ばれることには、三巻本の配列も大きく影響しているのではないか。以下、その可能性について検討したい。

まず、第二八六段「うちとくまじきもの」の段に注目したい。この章段の最後は、海女の浮上の様子について「舟の端をおさへて放ちたる息などこそ、まことにただ見る人だに、しほたるるに、落し入れて、ただよひありくをのこは、目もあやにあさましかし。」と結ばれる。この「落し入れて」は、第二八七段の「伊予国よりのぼるとて、波に落し入れける」と、語句の上でも、海にまつわる話という点でも対応し、作者によるものか否かはわからないが、意図的な章段配列の意識が見られるということは確かであろう。

しかし、他にも、見逃せない点が第二八六段にはある。以下のような描写だ。

船の路。(中略)若き女などの相、袴など着たる、侍の者の若やかなるなど、櫓といふもの押して、歌をいみじうたひたるは、いとをかしう、やむごとなき人などにも見せたてまつらまほしう思ひ行くに、…

この「やむごとなき人」の指示対象については確実なことはわからない。だが、この一節は、この船旅の印象を大きく左右するのではないか。「やむごとなき人」という表現からは、宮仕えによつて初めて知ることとなった、定子を中心とした高貴な人々が想像される。たとえ作者としては具体的な指示対象を想定していなかったとしても、中宮定子付き女房が書いた『枕草子』という前提を知る読者にとっては、定子を想起してしまうことは止められるものではない。そして、作者が、海路を使つて遠くへ行くことがあったとしたら、やはりそれは宮仕えを退き地方に下る時の情景を想像させるのではないか。それは読者の想像に過ぎないのだが、そのような想像のもとに読んだ場合、「見せたてまつらまほしう」という思いは、高貴な人は遠出が難しいという事情とは別に、もしかするとその人はすでにこの世にいないのかもしれないという、書かれていない背景を思い起こさせる力をも持つこととなるのだ。つまり、「うちとくまじきもの」の段もまた、定子崩御後という時間を想起させる要因を持った章段なのである。

この「うちとくまじきもの」の段に続く第二八七段・第二八八段が、定子の亡くなった後の時期に用いられた呼称を含むことや、定子や宮中とは無縁に見える歌について語っていることは、第二八六段から第二八八段までは、清少納言が定子崩御後に宮中から去り、都から離れて、身内の歌を書き留めながら残りの人生を過ごす、といったひとつの〈物語〉を作り出すように機能していると考えられる。それは、執筆時の作者の意図として限定できるものではなく、作者もしくは後世の人の手による編纂意図として章段配列にそのような操作が加えられたものだと考えるのである。つまり、章段配列として定子崩御後の時空を作り出すという意図がここに存在すると私は思うのだ。

このように考える時、第二八九段の位置付けが大きな問題になる。定子崩御後を想起させるような章段配列の中にあえてこの章段が置かれているとすれば、その位置をどのように理解することができるのか。私は、定子崩御後の時空を作り出すこの章段群に配置され

た時、この第二八九段は単なる歌語りといった位置付けを越えて、定子の死をも意識させる機能を持つようになると考える（注15）。無論、業平の母と、定子との間には、様々な点において差異が存在する。特に大きな差異と思われるのは、業平の母が死を予感するのは老いゆえであるのに対し、定子が亡くなったのは、『権記』によれば二十四歳、『日本紀略』『栄花物語』によれば二十五歳と、老齡というにはあまりにも若すぎる年齢だという点である。

しかし、死の予感という点については、『栄花物語』において、死を予感する定子が繰り返し描かれることは見逃せない。例えば、初めて敦康親王が一条帝に対面する時、定子は「このたびは参るにつつましうおぼえはべれど、今一度見たてまつり、また今宮の御有様うしろめたくて、かく思ひたちはべりつるなり」「身をばともかくも思ひたまへず。ただ幼き御有様のうしろめたさに」（かかやく藤壺①三二一）と、自分の亡き後の敦康親王の行く末を案じる。そして、その直後に第三子の妊娠がわかった時も、自分の厄年を理由に、本来喜ぶべき妊娠を不安なことに捉え、「それをうれしと思ふべきにもはべらず。今年は人の慎むべき年にもあり、宿曜などにも心細くのみ言ひてはべれば、なほいとこそあらむにつけても心細かるべけれ」（かかやく藤壺①三二二）と不安をもらすのである。このような定子の意識は、かかやく藤壺巻において、「かつはわれいつまでとのみ、まづ知るものと思さるるもいみじうぞ。」（①三二四）、「御おととの四の御方をぞ、今宮の御後見よく仕まつらせたまふべきやうに、うち泣きてぞのたまはせける。」（①三一七）、「月日過ぎ行くまゝに、皇后宮はいとどものをのみ思し嘆くべし。」（①三二八）と繰り返し語られる。さらに、とりべ野巻でも、「かくて八月ばかりになれば、皇后宮にはいとも心細く思されて、明暮は御涙にひちて、あはれにて過ぐさせたまふ。」（①三二二）、「今はただ念仏を隙なく聞かばやと思しながら」（①三二三）と、出産による死を予期し、敦康親王の後見を同母妹に託してその将来を心配し続ける定子が描かれるのである。そして、定子は、その予感が当たったかのように、出産によって、長保二年（一〇〇〇）十二月十六日、命を落とす。

『栄花物語』の記述は、実際に定子が死を予感していたという証明にはならない。けれども、重要なのは、そのような定子像が描かれていることそのものである。死を予感する定子像は、『栄花物語』が書かれた当時、広く共有されていたイメージなのかもしれない。定子の辞世歌は、『栄花物語』に「御帳の紐に結びつけさせたまへりける」（とりべ野①三二八）という状態で、三首残されていたと書かれている。この歌は『後拾遺和歌集』哀傷の巻頭歌でもあり、その詞書でも、『栄花物語』同様に辞世歌が御帳の紐につけられていたと語られる。このように定子が事前に辞世の歌を残していたと語る『後拾遺和歌集』もまた、死を予感していた定子像を表わすものである。また、このような定子像は『後拾遺和歌集』や『栄花物語』を通じてさらに広められていった可能性もある。

『栄花物語』では、死を予感し、敦康親王のことを思い続ける定子が何度も描かれる。定子は、業平の母のように子供になかなか会えない状況にいるわけではない。しかし、死の予感を抱き、子供のことを考える母という像において、二者は重なるのではないか。厳密な対応関係がそこにあるかということよりも、定子崩御後の時間を作り出す章段群の中に位置する『枕草子』第二八九段を読んだ時に、読者が子供を残して亡くなった定子のイメージをそこに重ねる可能性があるということが重要だと思ふのである。

さらに、第二八九段と第七八段との関連性もまた、第二八九段が定子を想起させる要因

となる。「伊勢の物語なりや」という第七八段の表現は、『伊勢物語』第八四段が定子周辺で共有され、やり取りに活かされていたことの証であった。つまり、『伊勢物語』第八四段のエピソードと歌そのものが生前の定子を取り巻く世界の〈記憶〉と密接に関わるものである。そして、定子崩御後の時間を作り出す章段群の中に第二八九段の叙述が置かれた時、第二八九段は今は亡き定子を追慕するものへと変貌する。『伊勢物語』の業平の母の話とその歌の見事さを賞賛し、さらに定子や他の女房とその賞賛を共有していた過去を振り返りながらも、定子亡き今になって改めてこの話と歌と向かい合うと、それはもはや単なる賞賛の対象に留まるものではなく、我が子をこの世に残して死んでいく母の無念さを体現するという点において、まさに定子そのものだったと改めて気づく作者の姿がそこに浮かび上がるのだ。そして、第二八九段は、子を残して亡くなった定子の心を思いやり、この業平の母の話と歌を改めて噛みしめ、書き留める作者の姿を描き出すものとして機能するようになる。たとえ、本稿で推測したように、実際には第二八九段が第七八段と同じ頃、つまり定子の生前に書かれたものであったとしても、この定子崩御後の時間を作り出す章段群に置かれた時、読者にとって第二八九段は定子を追悼する作者を描き出す叙述となるのである。

このように考えると、三卷本『枕草子』の第二八六段から第二八九段にかけての章段配列は、まず第二八六段「うちとくまじきもの」の段で、作者が宮仕え後に都を離れて地方に下ったことをイメージさせ、第二八七段・第二八八段においては、宮中を退いた作者が縁者の歌を書き留めながら残りの人生を過ごしている姿を想起させるものである。そして、第二八九段の歌語りによって、子供を残して亡くなった定子のことを回想しながら作者が『枕草子』の最後の部分を書いているという像を作り上げるものではないか。それは、作者自身の執筆時の意図によるものというよりは、三卷本の意図によって読者の想像を誘うように仕向ける配列によるものである(注16)。章段ひとつひとつを読んだ時には、定子崩御後という時空は必ずしも明確になるわけではない。ここは、三卷本の章段配列によって、そのように「読ませる」ように仕組まれているのではないか。このような三卷本の方向性は、直接的に定子の死を描くことのない『枕草子』において、作者の執筆時の意図を越え、定子の死とその後を、読者の期待に応えて、そこに現出させるかのようでもある(注17)。そして、このような章段配列においては、第二八九段「また、業平の中将のもとに」の段は、今は亡き定子を回想する作者という像を想起させるものとして、有効に機能していることを認めたいと思うのである。

おわりに

現在の『枕草子』の研究においては、底本に三卷本が使われることが主流になっている。そこには、三卷本、能因本、前田家本、堺本の四系統の本文の中では、三卷本がもっとも古態に近いのではないかという説が定説になりつつあるという事情が大きく影響している。しかし、今回、本稿において三卷本のごく一部の章段配列を検討しただけでも、その配列は、古態に近いといった素朴な原初形態を持つものではなくて、執筆時の意図やその当時あり得た範囲の解釈までも越えて、あるひとつの像を結ぶように読者を誘導するかのような、一定の方向性を持ったテキストであることが見えてきた。今後さらに検討が必要だ

とは思うものの、三巻本には、三巻本独自の論理があるのではないだろうか。

また、本稿で主に扱った第二八七段から第二八九段は、三巻本『枕草子』の中でも、最後の部分に存在する章段である。たとえば『新全集』の章段の分け方に従うと、『枕草子』の最後の章段は、第二九八段「まことにや、やがてはくだると言ひたる人に」である。三〇〇段近くの章段を有する三巻本において、今回主に検討してきた第二八九段は、最後の方に位置し、すでに作品の「終わり」が視野に入りつつある場所に置かれているのである。このこともまた、本稿で述べてきた「定子崩御後」というイメージと深く結びついていると考える。三巻本の最初の章段は、言うまでもなく「春は曙」の段だが、四季の最初である春を先頭として叙述が開始される一方で、最後の章段には、「まことにや、やがてはくだる」と清少納言の downward についての話題が置かれているのである。そこには、「始まり」と「終わり」という意識が見られよう。

第二八九段以後の章段を見ると、数段隔てた後には、第二九四段「僧都の御乳母のままなど」において作者自詠の歌が語られ、その次の段の第二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」では、作者が創作した物語の人物設定が語られる。さらに、第二九六段「ある女房の、遠江の子なる人を語らひてあるが」から第二九八段「まことにや、やがてはくだると言ひたる人に」では三章段連続で作者の自詠歌が語られて、そこで三巻本『枕草子』は終わるのである。つまり、第二八九段の後には、数段隔てて、清少納言の自作の和歌や物語が語られる章段群が存在しており、その章段群は、宮中や定子と密接な関わりを持たない（注18）。定子を中心とする世界から離れていく作者は、すでに、『枕草子』において本来語るべき対象であった定子周辺の「をかし」「めでたし」と繰り返し賞賛してきた世界から離れた場所に来てしまっているのである。もちろんそのような作者は、実際の清少納言そのものではなく、読者の想像する像にすぎない。しかし、読者の想像の中では、それまでは、定子や宮中について語るべきことがあるからこそ『枕草子』を綴ってきた作者は、ここでこの草子に書くべきことを失ってしまい、ひとまず思い浮かぶままに自分の縁者が詠んだ歌を書き留めてはみたものの、書いてすぐに、それは本来『枕草子』に書くはずだった定子周辺の世界にまつわるものではなかったことに気付く。このような、本来書くはずではなかったものを『枕草子』に書いてしまったという作者の意識が、第二八八段に「ここもとは打聞になりぬるなめり。」という断り書きを書かせたように見える。この断り書きは、女房という立場を離れて、書くことを失ってしまった作者の像を示すかのようなものだ。

ただし、このように『枕草子』の終わりを、宮仕えを退いた作者という像によって理解することは、三巻本の章段配列がそのように構成されているからこそ可能なのである。三巻本で『枕草子』を読む時、私達はそこにある章段が時系列に添って順番に並んでいることを期待することはできない。しかし、期待することができないとわかつてはいても、心の奥では、物語のように、「始まり」から「終わり」に向かって並ぶ叙述を期待してしまっているのではないか。そのような読者の心理を巧みに利用して、『枕草子』の終わりを演出する。三巻本はそのような章段配列を持ったテキストではないかと思うのである。

(1) 三卷本『枕草子』の本文、章段番号は、新編日本古典文学全集『枕草子』(松尾聡・永井和子校注 小学館 一九九七年)によった。新編日本古典文学全集の底本は、三卷本系統第一類本の陽明文庫蔵本であるが、三卷本系統第一類本は「あぢきなきもの」(七五段)までの本文を欠いているため、その部分については、第二類本の相愛大学・相愛女子短期大学図書館蔵の弥富破摩雄氏・田中重太郎氏旧蔵本をもって補われている。また、能因本『枕草子』を引用する場合は、日本古典文学全集『枕草子』(松尾聡・永井和子校注 小学館 一九七四年)によった。日本古典文学全集の底本は、学習院大学蔵三条西家旧蔵本である。また、前田家本の引用は、『前田家本枕冊子新註』(田中重太郎 古典文庫 一九七一年)によった。なお、『枕草子』以外の散文作品を引用する場合は新編日本古典文学全集に、和歌を引用する場合には新編国歌大観 CD-ROM に、それぞれよった。

(2) 『枕草子』と打聞の関係については、「枕草子」という作品自体が、大局的に中宮定子に関する打聞集を目指していたと述べてもいいのだろう。」とする赤間恵都子氏の説もある。(『枕草子の打聞撰取―定子と清女の語る打聞』「金沢大学国語国文」二二一九九八年二月)

(3) 本論中で用いた『枕草子』の注釈書とその略称は、以下の通りである。

・『枕草子春曙抄』(『枕草子古注釈大成』 誠進社 一九七八年…『春曙抄』
・塩田良平『三卷本枕草子評釈』上・下 学生社 一九五四年～一九五五年

…『塩田評釈』

・萩谷朴『枕草子』上・下 (新潮古典集成) 新潮社 一九七七年

…『集成』

・石田穰二『新版 枕草子』上・下 (角川ソフィア文庫) 角川書店 一九七九年～

一九八〇年

…『角川文庫』

・萩谷朴『枕草子解環』一～五 同朋社出版 一九八一年～一九八三年

…『解環』

・渡辺実『枕草子』(新日本古典文学大系) 岩波書店 一九九一年

…『新大系』

・松尾聡・永井和子『枕草子』(新編日本古典文学全集) 小学館 一九九七年

…『新全集』

・上坂信男・神作光一・湯本なぎさ・鈴木美弥『枕草子』上・中・下 (講談社学術文庫) 講談社 一九九九年～二〇〇三年

…『学術文庫』

(4) 『解環』は、道綱が長徳二年(九九六)十二月二十九日以後、長保三年(二〇〇一)七月十三日以前まで右大将だったことを挙げて、次のように述べる。

或いは、原形は「右大将との」であって、漢字「右」から「を」へ、「大」から「は」(字母者)へ、「将」から「らの」二字へ転化したか、「右たい将」を原形として、漢字「右」と「た」(字母多)「二字が仮名」を(字母遠)一字に、「い」が「は」(字母八)に、「将」が「らの」二字に、それぞれ字形相似によって転化したか、などの場合を考えることが出来よう。

しかし、「将」が「らの」二字へ転化する可能性や、「右」「た」(字母多)が「を」(字母遠)に転化する可能性はそれ程高いものとは言えないのではないかという疑問も残る。

私は、三卷本の「をはらのとのゝ御はゝうへ」は、もとは「ふの殿の御母上」と

いう本文だったのが、「ふ」と「小」の字形相似と後文の「小野殿」に引かれたことにより、(一)「ふの殿」↓「小の殿」という誤写が起こり、さらに、(二)二文字目の「の」(字母能または農)が「は」(字母波または者)と混同され、「の」から「殿」へと続く連綿の縦線が「ら」(字母良)に見間違えられて、「小の殿」↓「小はら殿」↓「小はらの殿」と変化したものと考ええる。能因本や前田家本の「又」がもともとあったかは判断が難しいものの、元は「ふの殿の御母上」であったと考えるならば、少なくとも、能因本の「小野殿の母上」は、(一)の誤写の結果によるものと推定でき、前田家本の「ふの殿」は「うへ」は、「御」の有無を除いて本来の本文と一致することになる。

(5) 中島和歌子氏は、『枕草子』の成立を次のように説明する。

第一次成立時期は、跋文の「左中将、まだ伊勢の守と聞こえし時」と、一三七段「殿などのおはしまさで後」、二五九段「御前にて人々とも」から、長徳二年(九五五)秋の長期里居中と考えられている。経房が「左中将」と呼ばれる最終日の長保三年(一〇〇一)八月二十五日までには、第二次本(跋文付き)が成立した。しかし、一〇二段の「左兵衛督」は三卷本勘物以来実成と考えられており、任官した寛弘六年(一〇〇九)三月四日までは加筆していたことが確かだとされている。(枕草子二十五年―「この草子」をどこに置くか―「国語と国文学」八二・五 二〇〇五年五月)

なお、第二次本成立以後の加筆の跡と見られる呼称には、第二八七段、第二八八段の他、第八三段「式部丞忠隆」(寛弘元年以後)、第一〇〇段「内蔵頭」(寛弘二年以後)、そして、中島氏の指摘する一〇二段「左兵衛督」、がある。

(6) 『大日本史料』第二編之四 長保三年十一月一日 太政官符(平松文書)
(7) 該当箇所本文は、以下の通りである。

次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらす。これも右はおもしろくにぎははしく、内裏わたりよりうちはじめ近き世のありさまを描きたるは、をかしく見どころまさる。
平内侍、

「伊勢の海のかき心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき」

世の常のあだごとのひきつくりひ飾れるにおされて、業平が名をや朽すべき」と争ひかねたり。

『源氏物語』絵合②三八一

(8) 『集成』は、第二八九段について「前段の小野殿と小野宮惟喬親王との連想で、惟喬親王と縁の深い業平母子の歌語りの打聞を紹介。」と説明するが、『伊勢物語』第八四段は小野や惟喬親王と直接の関わりを持たないことから、この考えには従うことができない。

(9) 「中宮定子と伊勢物語―枕草子の輪郭―」(片桐洋一編『王朝文学の本質と変容 散文編』二〇〇一年 和泉書院)

(10) 「秘事伝承とその成長―『伊勢物語』の周辺―」(『日本文学』五六・五 二〇〇七年五月)

(11) 前田夏蔭書入『春曙抄』において「濱臣云」としてその説が書き入れられている。本文は、『国語国文学研究史大成六』(一九六〇年 三省堂)所収の翻刻によった。

(12)「いをの物語」を『伊勢物語』を指すものと見る説としては、第八四段に限定せず、「伊勢は全篇業平の情事が主題だから、すなおに懸想文の意と解してはいかがであらう。」とする『塩田評釈』もあるが、この解釈は本文から離れすぎるように思われる。

(13)「枕草子鑑賞Ⅱ(第二八五段〜第三〇〇段)」(『枕草子講座三』 一九七五年 有精堂)

(14)「五二 小原の殿の御母上とこそは」(稲賀敬二・上野理・杉谷寿郎『枕草子入門』 一九八〇年 有斐閣)

(15)津島知明・中島和歌子編『新編枕草子』(二〇一〇年 おうふう)は、第二八九段の業平の母について「師走」に敦康らと死別した「母」の「宮」に擬えるか。」とする。

(16)三巻本の第二八六段「うちとくまじきもの」から第二八九段「また、業平の中將のもとに」までの配列は能因本も同じだが、その後の章段は能因本の方が多く、最後の章段も違うことから、同様に論じることができない。

(17)定子崩御後を描かない『枕草子』の空白を埋めるかのように、中世以降、たとえば『松嶋日記』のように、定子亡き後都を離れ地方に赴く清少納言像が描かれるようになる。特に、宮仕えを退いた清少納言について「乳母子のゆかりありて、阿波の国に行きて、あやしき萱屋に住みける。」と語る『枕草子』能因本の奥書や、同様に「乳母の子なりける者に具して、遙かなる田舎にまかりて住みにけるに」と書く『無名草子』には、定子崩御後に地方に下る清少納言像が見られる。そこには、『枕草子』に描かれていない「その後」を知りたいと思い、想像する者の期待が反映されているとも言えよう。本稿において指摘してきた、定子崩御後の時空を作り出す章段配列は、直接の影響関係はなかったとしても、方向性としてはこれらの記述と同じものを持つと思われる。

(18)第二九〇段以降の章段配列を見ると、第二九〇段「をかしと思ふ歌を」は「下衆」について言及し、そこから「よろしき男」をほめる「下衆女」を描写する第二九一段「よろしき男を、下衆女などのほめて」が続く。その次の第二九二段「左右の左衛門尉を判官といふ名つけて」は諸本間の異同が大きく位置づけが難しいが、さらに続く第二九三段「大納言殿まゐりたまひて」は、伊周を賞賛する清少納言に対して、伊周が「かやうの事めでたまふ」と笑う話で締めくくられており、目の女にほめられる男という点で第二九一段からのつながりが認められる。また、この第二九三段で定子の兄弟の話が出たのをきっかけとして、「僧都」(隆円)の乳母や「御匣殿」が登場する第二九四段「僧都の御乳母のままなど」が続く。

これらの章段を見ると、二八七段からの打聞章段群の後に置かれているにも関わらず、第二九三段・第二九四段に定子が登場する。ただし、章段配列上、このふたつの章段は、あくまでも定子の兄弟が登場する点において相互につながり、並べて置かれているのだ。そして、これらの章段における定子は、第二九三段では、その前半で、わずかに「宮の御前」にも笑ひきこえさせたまふ」「上も宮も

興ぜ

させたまふ」と語られるのみで言葉を発せず、後半では直接登場することさえな

い。第二九四段でも、最後の一文以外には定子は登場せず、最後のみ「など、かく物ぐるほしからむ」と笑う様子が描かれるが、その言葉は章段全体の流れを変えたり、それまでの話の位相を変化させるものではなく、単に添えられたものの如くである。この点は、定子の言葉によって話の流れが大きく左右され、意味づけが変わってゆくことの多い他の日記的章段と比べて大きな違いと言えるだろう。

第二九四段で作者自詠歌が語られたのを始めとして、第二九五段以降では作者創作の物語や和歌が語られ、次々に定子と直接結びつかない叙述が並ぶが、第二九五段以下に見られる定子との距離の遠さという特徴は、第二九三段・第二九四段にすでにその兆しが見られるのである。この第二九三段・第二九四段において定子の存在が大きな役割を持たないという点は、それぞれの執筆段階（それは定子生前だった可能性も十分ある）においては、伊周賛美という主題や火事に遭った男の話を重点的に書くために必然的に起こった現象に過ぎないのだろう。けれども、編纂意識の面から見ると、第二八七段から続く定子崩御後を意識させるような打聞章段群から、清少納言の地方下向をほめかすかのような巻末までは、様々なつながりによりつつも、大きな流れとしては、定子という中心を失った世界を作り出すように構成されたものと理解できると思われる。そして、このような章段配列を作り出す編纂意識のもとでは、定子が登場する第二九三段・第二九四段さえもが、定子崩御後に遺された者たちにまつわるエピソードを回想的に書いたものとしてここに置かれていると見ることができるのではないかと考える。

第五章 『枕草子』「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」の段をめぐる

―『うつほ物語』忠こそとの関わりから―

はじめに

三巻本『枕草子』二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」は、母を亡くした男の人物設定を描くところから始まり、その人物設定を書き終わったところで終わる章段である。まず、その全文を挙げる（注1）。

男は、女親亡くなりて男親の一人ある、いみじう思へど、心わづらはしき北の方出で来て後は、内にも入れ立てず、装束などは、乳母、また故上の御人どもなどしてせさす。

西東の対のほどに、まらうどみなどをかしう、屏風、障子の絵も見所ありて住まひたり。殿上のまじらひのほど、くちをしからず人々も思ひ、上も御けしきよくて、常に召して、御遊びなどのかたきにおぼしめしたるに、なほ常に物嘆かしく、世の中心に合はぬ心地して、好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき。

上達部の、またなきさまにもてかしづかれたるいもうと一人あるばかりにぞ、思ふ事うち語らひ、なぐさめ所なりける。

物語の一部のようにも見えて、一見『枕草子』の他の章段とは違った印象を与えるような章段である。類聚的章段のように「くは」という形で始まる書き出しを持ちながらも、特定の人物を指すかのような内容を持つており、この「男」が実在した人物なのかどうかよくわからない。また、「なぐさめ所なりける」という最後の部分は、唐突に終わったかのように見える。従来の注釈書などにおいても、この章段は、その性質のよくわからない段とされてきた。例えば、この章段について、『全講枕草子』（注2）は、次のように述べている。

この部分は、様式からいうと随筆の部に属するものと思われるが、それにしては生活批判の精神が稀薄なように思われる。むしろ架構的な意識が見られ、かつ最後の一節のごときは、他の主題によつて書かれたものの混入ではないかと思われるが、諸本に異同がないようであるから、仮にここに置いて解釈しておく。

『枕草子』は一般的には随筆であると考えられることが多い。しかしながら、読む者に、「随筆の部」に納まりきらない印象を抱かせるこの章段は、そのような理解を揺るがし、『枕草子』とはどんな作品なのか、という問いを投げかける存在でもある。また、この章段は、諸本の本文の間で異同の多い章段でもある。

本稿においては、まず、三巻本に含まれるこの章段の本文と、それに対応する堺本文の差異について考察する。この二つの本文は様々な点で大きな違いを持っている上、この章段の前後の章段配列も異なるため、その違いによつて、この章段の位置付けも変わってくると考えられるからである。さらに、三巻本文に描かれる「男」の人物像がどこから来たものなのかを探っていく。これらの検討を通じて、この章段の特質や、三巻本『枕草

子』中におけるこの章段の位置づけについて考えていきたい。

一 堺本文との差異

三巻本では二九五段にあたるこの章段に相当する部分は、能因本、前田家本、堺本系統の本文にも見える。能因本では異同はあるものの、内容は三巻本とほぼ同じである。それに対して、堺本では二七二段・二七三段・二七四段の三章段にわたる長文となっており（注3）、三巻本文と対応する部分とそうではない部分とが混在する。内容的に対応する部分においても、三巻本と堺本ではその叙述の順序が変わる。また、前田家本は、三巻本・能因本に見える本文と、堺本の三章段分の本文の両方を有している。前田家本については、「伝能因本と堺本とを底本として集成して作られた後人による改修本である」という楠道隆氏の説（注4）が、現在ほぼ定説となっているが、当該章段についても、能因本と堺本の本文が両方入った形になっていて、少なくともこの部分を見る限りでは、楠氏の説を裏付けるような形になっている。

そこで、まず、三巻本の記述を、①から⑤までの五つの部分に分け、これらの記述が堺本文とどのように対応しているのかを見ていきたい。堺本文中において傍線を付し、①から⑤の番号を振った箇所が、三巻本と対応していると考えられる箇所である。さらに、三巻本と堺本の両方で同一もしくは類似の語句が用いられ、語句のレベルで対応していると思われる箇所に、波線を付した。

【三巻本】

- ①男は、女親亡くなりて男親の一人ある、いみじう思へど、心わづらはしき北の方出で来て後は、内にも入れ立てず、装束などは、乳母、また故上の御人どもなどしてせさす。
- ②西東の対のほどに、まらうどあなどをかしう、屏風、障子の絵も見所ありて住まひたり。
- ③殿上のまじらひのほど、くちをしからず人々も思ひ、上も御けしきよくて、常に召して、御遊びなどのかたきにおぼしめしたるに、
- ④なほ常に物嘆かしく、世の中心に合はぬ心地して、好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき。
- ⑤上達部の、またなきさまにもてかしづかれたるいもうと一人あるばかりにぞ、思ふ事うち語らひ、なぐさめ所なりける。

【堺本】

（二七二段）

おとこは、かたちこまかにおかしからねど、まみころはづかしげに、あいきやうなからで、おほきさなどよきほどにて、おほかたのありさまもてなしなどだに、みぐるしからねば、いとよし。

きむだちはさらにもいはず。それよりくだりたる人にて、じちのころはいとよ

くて、いたく心あがりし、ざえいとよくありて、よきうたよみなどして、まことしう心にくき、③よおぼえありて、せけんのついせうなどはなけれど、また、けにくくすさまじうはあらず、あそびのみちなども、いみじうやうずといはるばかりこそならめ、もののねうちききしり、ふえすこし、びはなども心にいれたらんよし。すずろならんものなげきし、うへはかなくあぢきなきものにはしりながら、また、みえきこえて、たちまちにそむき、みいたづらになすべくなどはあらず。

(二七三段)

みかど・みこたちの御身をうらやましきものにおもひて、人となるなりは、などかさばかりのきはにむまれざりけんと、みをくちをしうおもふ。人のものいふも、ことばなどわるきは、いとうきことにし、はかなきこともおかしきふしあらんをば、みみとどめてふとききとどめて、人にもかたりなどしつべく、あはれなることをば、げにとききしり、おもひとりとて、こゑいとよくて、うたうたひ、経などもまめやかにうちいだしなど、したりがほにもあらず。

また、うちかたらひなどしたる人のもとにきたる、「よめ」などいふには、あまりじやうずめき、やさだちてよまずなどもなし。①おやはかなしうすれど、やむごとなきままははのものわづらはしきにて、いれなどもせねば、④心地いとすさまじく、つねにむかしこひしくてすこし、しづまりたるものから、また、うちほこりにうちさうぞきたるかた、むげになくもなし。⑤いもうとのおもだたしきひとりぞあるを、ものいひあはせ人にして、おぼつかかなからぬほどにいきつつ、心におもふことをうちかたらひ、さるべき人のふみをも、おかしとみるをばかならず見せなどして、かたみにいみじくおもひかはしたり。

(二七四段)

②をやのいゑの、にしならずは、ひんがしのたいの、みなみおもてなどを、つきづきしうしつらひて、さぶらひ・まらうどあ、うときむつまじきなど、はかなきことなれど、心ばへありてゆへなからずみなして、をかしきともだちつねにこさせ、よるもとまりたるには、もろともふして、よろづものがたり、あそびのかたぎまのことどもなどいひあはせ、また、まめやかにゆくさきのことまでちぎるもあり。

けさうのこととても、いふなく人をきりきりともいはず、「ただいまはしも、いかにもののあはれしりぬべきほどかな」とみゆるをば、たちかへりつつあまたびもいふ。おもひがけぬよる、かどうちたたき、さらぬをりもさまにしたがひて、人の心とまりぬべきさまにしなし、みよりこよなくまきて、あるまじくやむこととおもふとも、人しれぬなげきぐさにはしながら、かたはらいたくすきずきしことは、けしきにもいさず、さるべきことのをりふしに、かたらふ人のいひつけなどする、ひわりご・あふぎ・ひをけなども、めなれぬさまにことひとびとよりはしいで、そのひはそれこそとりわかれ、花もみちのところにいざなはれたるに、うたもべちにすぐれねど、「もてはなれだいにおはす」と、わらはるまじう、いねぶたくせずなどだにあらば、あへなむかし。

このように、三巻本では①から⑤の順で現れる記述が、堺本では、③↓①↓④↓⑤↓②という順番になっている。また、内容として三巻本・堺本で対応する部分についても、実際には語句などはほとんど一致せず、内容が少しずつ変っていたり、違う言葉で書かれていたりすることがわかる。

この三巻本と堺本の本文の関係については、林和比古氏が次のように述べ、堺本の本文の方が先に書かれたものだとしている(注5)。

もし同一作者が前後して書いたとすれば、前稿を冗漫乱雑に書いたため、後稿ではこれを精選簡潔にしたとも、或いは前稿を簡略短文にしたため、後稿では敷衍長文にしたとも考へられる。私は前説、即ち冗漫より精選への過程の方がより自然であらうと考へる。何故ならば長文の方が(主観的な言ひ方だが)文格が劣り、清少の他の文章のやうな峻鋭な処が無いからである。もつとも簡略で欠陥のある文章であつたため、後人が増補したとも考へられるが、増補文には新しい添加の項目も加はり、殊にその内容が特殊微細の記事が多く、後人としては到底これだけの増補をなす可能性も必要性も考へられない。そこで同一作者清少が前稿(冗長なもの)を後稿で斧正したとするのが、長文と短文の関係であると考へたい。

しかし、この説には、反対意見も提出されている。安藤靖治氏は、三巻本などに見える短文と、堺本などに存在している長文との関係について、「短文・長文双方の資料ともなった女房日記」の存在を想定している(注6)。また、山中悠希氏は「林氏の付言する堺本草稿説には同意し難い。」と反論し、「堺本では男に関する章段群の一部に加えられることで、これらの文脈が理想の男性像を描き出すものとして有効に機能しているのではないだろうか。」と述べて、堺本独自の編纂方針に注目している(注7)。

随想という点で言えば、三巻本よりも堺本の方が落ち着きのよい構成になっているということは言えそうである。堺本の二七二段・二七三段・二七四段の前後の章段には、男性のあり方についての良し悪しを述べた記述が存在しており、山中氏の指摘するような、「男に関する章段群」が形成されているということは、認めて然るべきだと思われる。

さらに、堺本の二七二段の書き出しに注目してみると、男性の好ましいあり方について述べるという堺本の姿勢は、より明確に示されていることがわかるのではないか。「おほかたのありさまもてなしなどに、みぐるしからねば、いとよし。」というように、最後に書き手の価値判断を示すような書き方がされていたり、「きむだちはさらにいはず。それよりくだりたる人にて、」といったように複数の条件を挙げていることによって、一般論としての書き方がよりはっきりしていると言えよう。二七二段の後半から二七三段・二七四段にかけて、次第に、ある特定の人物のことを語っているかのような書き方になっていくが、二七二段の冒頭に示されたような一般論としての構えがあることによって、たとえば二七四段冒頭の「をやのいゑの、にしなければ、ひんがしのたいの」といったような部分も、一般論だからこそ、正反対の方角を挙げて選択的に並列させることも自然なのだと、読み手に思わせることができるのだろう。この堺本二七四段冒頭の「にしなければ、ひんがしのたいの」という表現と似た部分は「西東の対のほどに」という形で三巻本にもある。しかし、三巻本では、堺本二七二段冒頭の文章がないため、一般論なのか特定の人物について述べているのかがわからず、この「西東の対のほどに」という部分を見た時には、これは一般論として書かれた文章なのかもしれない、と読む者に思わせるものの、特

定の人物を語るかのような限定された章段全体の記述内容から、最後まで読んでも、これは一般論なのだという確信を、読む側が得ることは難しい章段になってしまっている。

このように、三巻本よりも堺本の方が随想として受け取りやすい構成・表現になっていることを認めるならば、林氏のように堺本を草稿だと考えることは難しいのではないか。

三巻本の本文は、「男は」という書き出しこそ一般論のように見えるものの、その後に続く文章を読むと特定の人物の描写とも思われる内容である。その一方で、「西東の対」といったような表現もあるため、読みながらこれは特定の人物の描写なのではないかと思いついた読み手は、ここでもう一度一般論かと思わされるなど、短い文章であるにも関わらず迷い続けながら読み進め、最後に「なぐさめ所なりける」と章段が終わることに唐突な印象を受けて、わけがわからないままにこの章段を読み終えることになるのだ。

堺本の二七二段・二七三段・二七四段が随想として前後の文脈と調和し、より落ち着きのよい性質を持っているにも関わらず、わざわざそれを崩してまで短文化して三巻本・能因本の本文が作られたとはやはり考えにくい。むしろ、三巻本の本文の不可解さがあつたからこそ、それに増補したり、叙述の順序を入れ換えたりして編集し、その結果として、堺本のような形になったと考えるのが適当なのではないだろうか。

ただし、そう考えると余計に、三巻本の二九五段のような章段がなぜ『枕草子』中にあるのか、この章段をどのように考えたらいのか、という疑問が強くなる。次節においては、三巻本のこの章段の表現の土台となっているものについて考えたい。

二 物語との関わり

三巻本『枕草子』二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」は、その性質について、従来様々に論じられてきた章段である。

例えば、林和比古氏は、この章段を「理想的な男の条件を列挙した議論文―判断文」と考えている(注8)。これに対して、萩谷朴氏は、「男性一般に就いての類想でもなければ、随想でもない。」と言い、「抽象・架空の人物を虚構しながら、清少納言の目は、その虚像の奥に、ひたすら敦康親王の姿を凝視していたものと考えられる。」と指摘しており(注9)、安藤靖治氏も「本段の主人公、「男は」として登場する人物について、一条天皇の第一皇子、敦康親王に比定する読みもあながち無理とは言えないようである。母皇后定子の崩御後における子敦康親王の御動静、その私生活にまで立ち入った貴重な数少ない一節ということができようか。」と萩谷説に賛意を表している(注10)。一方ではこうした見解に対する反対意見もあり、山中悠希氏は、「敦康親王を重ねて読む行為には首肯できない。」と述べ(注11)、津島知明氏は、「もし敦康を念頭に読むなら、それは諷したというより、物語ることが断念されているというべきではないか。」と言う(注12)。また、三田村雅子氏は「物語の主人公の状況設定のダイジェストであって、この段そのものの性格も草稿的なものではないかと思われ、虚構性とは直接的には関わらないと考える。」と言う(注13)。

私は、この章段に登場する「男」は敦康親王を「諷喻」しているのだとする萩谷説には、いくつか重大な欠陥があるのではないかと思う。まず、「心わづらはしき北の方」という表現であるが、萩谷氏は以下のように説明している(注14)。

この北の方が、一条天皇に対する中宮彰子を寓したものだとしたら、影子自身は、「物づつみせさせ給へる御心」と紫式部も証言しているように、極めて控え目で、むしろのんびりした人柄であつたらしいから、このコロワヅラハシを、新夫人自身の気むずかしさを指すとするのは当たらず、むしろ、中宮彰子の後見人としての左大臣道長の権勢に対して、一条天皇が間接に気を遣わねばならなかったという意味で、(B)系統の解(引用者注:『全講枕草子』の「厄介な妻」などの解釈)が適當するといわねばならないかも知れない。

一往、この本文の文面をそのままに受け取り、父親が遠慮せねばならぬ理由を明示し得るものとして、(C)解(『角川文庫』の「気性のむつかしい北の方」という解釈)に従つたまでである。

このように、萩谷氏は「北の方」を彰子を寓した存在なのではないかという可能性を示しているが、萩谷氏自身もその矛盾を指摘しているように、「心わづらはしき北の方」という表現に忠実に解釈しようとする時には、説明のつかない部分があることはやはり否定できないことであろう。さらに、彰子の人柄についての紫式部の「証言」はもとより額面通りに受け取つてよいものとは考えられないものの(女房日記としての性格も持つ『紫式部日記』において、紫式部が彰子の性格を難のないものとして描くのは当然とも言える)、その点を差し引いても、清少納言が彰子を寓して「心わづらはしき北の方」と書いたと考えるのは、難しいと思われるのである。なぜなら、清少納言が書いた『枕草子』に出てくる「心わづらはしき北の方」が彰子を寓したものだという話が、道長や彰子本人に伝わったならば、定子方や清少納言本人に対する風当たりは相当に強いものとなるであろうことが予想されるからである。読む者に、「北の方」は彰子を寓した人物だとわかる可能性があるのに「心わづらはしき」という彰子への悪口とも取れるような表現を『枕草子』に盛り込むことは、非常に危険な行爲であると言わざるを得ないし、そのような攻撃的なことを行うとは考えにくいのではないか。

また、「男」が敦康親王を諷喻したものであるとしたら、「男」について「好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき」と表現していることも、問題になってくる点ではないか。「好き好きし」という語は、男女関係の方面のことを意味する場合と、風流の方面のことを意味する場合との両方があるが(注15)、「御遊びなどのかたきにおぼしめしたるに」という、逆接で下に続く文脈を考えると、「好き好きしき心」とは、「御遊び」の方面といった風流事以外のこと、すなわち男女関係に対しての態度を言っていると考えることができよう。そして、その下に続く「かたはなるまで」という表現自体からは決してプラスの評価といった意味合いを読み取ることとはできないと思うのだ。「かたはなるまで」という表現は、『枕草子』中には他に見えないが、『源氏物語』中では、例えば、以下のように使われている。

・かく かたはなるまで、うち忍び立ち寄らむ物の隈もしるきほのめきの隠れあるまじき

にうるさがりて、…

(『源氏物語』匂兵部卿⑤二七頁)

・母北の方にだに、さやかにをはさをささし向かひたてまつりたまはず、かたはなるまでもてなしたまふものから、…

(『源氏物語』紅梅⑤四三頁)

・この君しもぞ、宮に劣りきこえたまはず、さまことにかしづきたてられて、かたはな

るまで心おごりもし、世を思ひ澄まして、：

『源氏物語』宿木⑤四四二頁

・ なつかしうなよやかに、かたはなるまで、なよなよとたわみたるさまのしたまへりしにこそ、：

『源氏物語』東屋⑥七三頁

・ …とうち払ひたまへる追風、いとかたはなるまで東国の里人も驚きぬべし。

『源氏物語』東屋⑥九一頁

・ かたはなるまで遊び戯れつつ暮らしたまふ。
(頁)

『源氏物語』浮舟⑥一五五

これらの用例を見ると、「かたはなるまで」という表現は、程度が過ぎていて不都合が生じる位になっている様、見苦しきを感じる位になっている様、を形容するものだと言えよう。このことから、「好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき」という表現は、「男」に対する厳しい批判の言葉となっていることが確認できるのである。

このような批判の言葉を確認すると、「男」が敦康親王を諷していると考えられることは、とても難しいことだとわかるのではないだろうか。中宮定子付きの女房である清少納言が、主人の息子と「男」を重ねた上で、このようなマイナス評価を「男」に与えることは、敦康親王への侮辱につながる可能性がある。書き手としての清少納言がどのような意識で書いていたかということは想像するしかないが、もし清少納言周辺の女房がこの章段を読んだ、この「男」と敦康親王とを重ねるようなことがあったならば、敦康親王に対するイメージが損なわれる結果になるということは予測できる範囲のことだ。萩谷氏は、「好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき」という、当然の帰結とも言うべき一般論に託しながら、その心の奥には、敦康親王と具平親王女とのプラトニックな愛情の微笑ましさを思い浮かべている」と説明するが(注16)、そのような複雑な清少納言の意識をこの章段から読み取することは難しい。

以上のような理由により、この章段に登場する「男」と敦康親王とを関連付けるのは適切な処置ではないと考えられる。では、この「男」の人物像のよって立つところをどのように考えたらいのだろうか。今一度、この章段の表現に立ち戻って見てみたい。この章段に登場する「男」は、以下のように紹介されていた。

殿上のまじらひのほど、くちをしからず人々も思ひ、上も御けしきよくて、常に召して、御遊びなどのかたきにおぼしめしたるに、なほ常に物嘆かしく、世の中心に合はぬ心地して、好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき。

男は、周囲の人々にも認められ、帝にも気に入られていたことがわかる。しかし、父に「心わづらはしき北の方」がいる中ででの生活のせい「好き好きしき心」が異常なほどにあつたことが語られるのだ。

男は、西か東の対に立派な屏風、障子の絵も備えて、母屋に入ることができなくても、それなりに満足のいく暮らしをしているようにも見える。しかし、「心わづらはしき北の方出で来て後は、内にも入れ立てず、装束などは、乳母、また故上の御人どもなどしてせさす。」という境遇には、やはり継子いじめ譚的な要素を見出すことができよう。『枕草子』と近い時代に成立した、継子が登場する物語には『落窪物語』があるし、『枕草子』一九九段「物語は」の段には「物語は 住吉。」と、最初に継子いじめの物語が挙げられている。しかし、継子が息子である物語の登場人物ということになると、やはり真つ先に想起されるのは『うつほ物語』の忠こそであろう。忠こそは、『うつほ物語』の中で次のように語ら

れる人物である。

・忠こそ十歳になる年、殿上せさせたまひつ。帝、思すこと限りなし。

『うつほ物語』忠こそ①二六頁

・忠こそ十三、四になりぬ。かたち清らに、心のなまめきたること限りなし。よきほどなる童にて、遊びいとかしこく、こともなき色好みにて生い出でて、女御たちをも見ならして、帝限りなくときめかしたまふ。

『うつほ物語』忠こそ①二七頁

・上、「心憂しと思ふべきことやものせられし。ここにはたさ思ひぬべきこともものせぬを、いかに思ひてにかあらむ。交じらひのついでにも、こともなき人なれば、思ひうんずべきこともあらじ。ただにてはよに隠れじ。親ばかりの責めのたまはむにこそうずることもあらめ」。

『うつほ物語』忠こそ①二四三頁

これらの記述から忠こそがどんな人物であったかをまとめてみると、(一)天皇に気に入られており、(二)音楽の道に優れていて、(三)色好みであり、(四)人との交際にも問題のない人物、であったことがわかる。これらの要素は、実は、『うつほ物語』に登場する他の人物にも共通することの多いものである。たとえば、仲忠は以下のような人物として語られている。

・十六といふ年、二月にかうぶりせさせたまひて、名をば仲忠といふ。上達部の御子なれば、やがてかうぶり賜ひて、殿上せさせ、上も東宮も、召しまつはしうつくしみたまふ。

『うつほ物語』俊蔭①一〇五頁

・この仲忠、帝も春宮も片時まかでさせず、召し使はせたまふ。琴はさる世の一なれば、たふたふにせねど、こと遊びは、仲頼、行政が手を伝へしものの音なれど、この師の手にも似ず、ものよりことに抜け出でて、いづこよりたが手を伝へけるぞとのみ聞こえたり。かたちよりはじめ、交じらひたるさまなど、もどかしきところなく、かどどしく、目も及ばずすぐれ出でたれば、上達部、親王たちよりはじめたてまつり、

ほめ愛でたまふ。

『うつほ物語』俊蔭①一〇七頁

(一) 天皇に気に入られており (上も東宮も、召しまつはしうつくしみたまふ) 「帝も春宮も片時まかでさせず」、(二) 音楽の道に優れていて (「琴はさる世の一なれば」、(四) 人との交際にも問題のない人物 (「交じらひたるさまなど、もどかしきところなく」、「ほめ愛でたまふ」という特徴があり、(三) 色好みであるという要素以外、忠こその場合と共通するのである。さらに、『うつほ物語』の人物の紹介には、次のような例もある。

・(正頼) むかし、藤原の君と聞ゆる一世の源氏おはしましけり。童より名高くて、顔かたち、心魂、身の才、人にすぐれ、学問に心入れて、遊びの道にも入り立ちたまへり。

『うつほ物語』藤原の君①二一九頁

・(兼雅) かくて、また、右大将藤原兼雅と申す、年三十ばかりにて、世の中心にくく覚えたまへる、限りなき色好みにて、広き家に多き屋ども建てて、よき人々の娘、方々に住ませて、住みたまふありけり。

『うつほ物語』藤原の君①二三八頁

・(平正明) かくて、東宮の御いとこの、平中納言と聞こえて、いとかしこき遊び人、色好みにて、ありとしある女をば、皇女たちをも、御息所をも、のたまひ触れぬなく、

名高き色好みにもおしたまひけり。

『うつほ物語』藤原の君①一四〇頁

・(仲頼) かくて、左近少将源仲頼、左大臣祐成のおとどの二郎なり。この少将、三十、世の中にめでたき者にいはれけり。穴あるものは吹き、緒あるものは弾き、よろづの舞数を尽くして、すべて千種のわざ世の常に似ず、かたちもいとこともなし。世の中の色好みになむありける。よろづの琴、笛、この人の手かけぬはいとわろし。帝、東宮にも、いとになく思す御笛の師なれば、常にさぶらふ。いとかしこく時めきて、ただ今の殿上人の中に、仲頼、行政、仲忠、仲澄にまさる人はなし。

『うつほ物語』嵯峨の院①三五四頁

・(涼) かく仕まつりありく源氏の宮のおはしますほどに、この世には生まれ生ひ立つ人もあらず、顔かたちよりはじめてまつりて、様、心、才にいたるまでかたきなし。書を読み、遊びをしたまへど、習はず師に多くしましたまふ。

『うつほ物語』吹上上①三八〇頁

忠こそのような(一) 天皇に氣に入られており、(二) 音楽の道に優れていて、(三) 色好みであり、(四) 人との交際にも問題のない人物、という四つの要素のうち、すべてが同一人物に備わっているとは語られないものの、これらの要素は、繰り返し様々な人物に現れるのである。『うつほ物語』内において、優れた性質を備えた貴公子を描く時、これらの要素が定型として用いられていたということが言えないだろうか。

そして、『枕草子』二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」で登場する男は、実は、この四つの要素を全て満たしているのである。男の紹介部分を再度引用してみると、以下のように書いてあった。

殿上のまじらひのほど、くちをしからず人々も思ひ、上も御けしきよくて、常に召して、御遊びなどのかたきにおぼしめしたるに、なほ常に物嘆かしく、世の中心に合はぬ心地して、好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき。

このように、(一) 天皇に氣に入られており(「上も御けしきよくて、常に召して」)、(二) 天皇のお相手を務める位に音楽の道に優れていて(「御遊びなどのかたきにおぼしめしたるに」)、(三) 色好みであり(「好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき」)、(四) 人との交際にも問題のない人物(「くちをしからず人々も思ひ」)、という人物像が描かれるのである。「好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき」という描写からは、忠こそのような「色好み」像とは別の部分も見えてくるが、ここで「好き好きしき心」が語られていることに今は注目したい。

さらに、『枕草子』二九五段で語られる「男」と、『うつほ物語』の忠こその間には、もう一つ共通点がある。二九五段の最後に、「男」は次のような行動を取っていたことが示されていた。

上達部の、またなきさまにもてかしづかれたるいもうと一人あるばかりにぞ、思ふ事うち語らひ、なぐさめ所なりける。

この箇所は、従来解釈上問題になっていた箇所でもある。まず、「またなきさまにもてかしづかれたる」という本文であるが、ここはもともと三巻本では、「またなきさまにてもかしづかれたる」となっている箇所であり、『新全集』も校訂を加えてはいない。しかし、その

ままの「またなきさまにても」という本文で読もうとしても、ここでなぜ「も」が必要になるのか、説明がつかないと思うのだ。よって、ここは「もてかしづかれたる」という本文の「もて」の部分が転倒して「ても」となったのだと考えるべきだと判断し、本稿で本文を挙げる際には「またなきさまにてもてかしづかれたる」と校訂した。なお、この箇所は、能因本では「上達部の、またなきに、もてかしづかれたるいもうと一人あるばかりにぞ」という本文になっている。

またこの箇所は、「かしづかれたる」を受身と解する説と、尊敬と見る説とがある（注17）。この点については、「れ」を尊敬の助動詞「る」だと解することのできる可能性は低いと思われる。なぜなら、三巻本『枕草子』の中で上達部の動作に敬語が付く場合は、「給ふ」が用いられるのが常であり、尊敬の助動詞「る」が使われている例は確認できないからである（注18）。このような理由により、「かしづかれたる」は、受身に解釈することとしたい。そして、受身で解するならば、「上達部の」は「いもうと」を修飾していると考えるべきだと考えられるので、「いもうと」は上達部の妹ということになるう。「いもうと」が「上達部」の妻であると解する意見（『角川文庫』『新全集』『学術文庫』もあるが、「上達部の」―「いもうと」という語のつながりを考慮すると、その解釈に賛成することはできない。ここは、上達部によって、上達部の妹が大切に世話をされていると解釈したい（注19）。

そのように解釈すると、この部分もまた『うつほ物語』の忠こそその行動と一致しているのだと気付くのである。忠こそについては、次のような記述がある。

忠こそ、故おとどの御姪に、あこ君とてかしづきたまひしに忍びて通ふ。

（『うつほ物語』忠こそ①二二八頁）

「上達部」と「故おとど」、「いもうと」と「御姪」という違いこそあるものの、大切に世話をされている女性と交際しているという「男」と忠こそとの共通点が、「かしづく」という語を通じて、ここでも浮き上がってくるのだ。

以上のように、『うつほ物語』の忠こそと、『枕草子』二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」に出てくる男は、瓜二つの人物として造型されていることがわかるのである。（一）天皇に気に入られている、（二）天皇のお相手を務める位に音楽の道に優れている、（三）色好みである、（四）人との交際にも問題のない人物である、という一つ一つの要素自体は、他の人物には決して見られないような特異で個性的な要素とは言いが切れない。しかし、『枕草子』二九五段で描かれる「男」と忠こそとの間では、あまりに多くの要素が一致しており、この一致は決して見逃せることではない。さらに、この四つの要素の他にも、大切に育てられている女性に通うという要素を持つ点、そして、何よりも継子であるという点を考慮すると、両者が無関係に存在しているとはできないのである。

この章段に出てくる「男」は、『うつほ物語』忠こそその造型を忠実になぞるようにして描写されていく。「心わづらはしき北の方出で来て後は、内にも入れ立てず、装束などは、乳母、また故上の御人どもなどしてせさす。西東の対のほどに、まらうどゐなどをかしう、屏風、障子の絵も見所ありて住まひたり。」という部分だけは、忠こそその話にはなかった部分だが、継子として生活している男の境遇を具体的に想像し、細部を描いた部分と考えることができるため、大きな齟齬は生まれない。むしろ、「故上の御人ども」などの存在が描かれる点からは、『うつほ物語』の忠こそその話の中にある次のような描写が思い出されると

ころである。

父おとども、女子ものしたまはねば、「忠こそ母君に仕まつりし限りは、ほかにやらじ」と、「わが世の限りは、眼閉じたまひしところにさぶらはせむ」。

『うつほ物語』忠こそ①二六頁

このように、忠こその実母が亡くなってからも、そこに仕えていた女房たちを手放すことなく、近くに仕えさせていることが描かれているのである。

このように見えてくると、忠こそその造型と「男」の描写はあまりにも一致しすぎているようにも見え、忠こそその物語に影響されすぎた新しみのない物語になってしまふことを恐れて、清少納言が書き出しで筆を止めたという風にも見ることもできるかもしれない。しかし、そのように考えるより、この章段が断片で終わっていることを、もつと積極的に捉えていくことはできないだろうか。以下、その可能性について考えたい。

酷似していると思われた忠こそと「男」との描写には、小さなようできて実は大きな違いがあった。まず、忠こそについての描写を見ると、忠こそが『うつほ物語』の中で繰り返し「こともなき」人であると表現されていることに気づく。

・よきほどなる童にて、遊びいとかしこく、こともなき色好みにて生ひ出でて、女御たちをも見ならして、帝限りなくときめかしたまふ。(『うつほ物語』忠こそ①二七頁)

・「…なほ見たまふるには、こともなき人とこそ見たまへつれ。…」

『うつほ物語』忠こそ①二三〇頁

・「…交じらひのついでにも、こともなき人なれば、思ひうんずべきこともあらじ。…」

『うつほ物語』忠こそ①二四三頁

しかし、忠こそには、自分の実の母親が亡くなっていることを悩んで問題のある行動を引き起こすような可能性がまったくなかったわけではない。忠こそは母親を亡くした悩みを抱えつつも、それに耐えていただけなのである。春日詣の巻では、出家した忠こそが過去を振り返って、このように語る場面がある。

「年五つにて、女親の手まかり離れて、世の中に侍りしに、心憂くおぼえはべりしかど、まいて一人はべる子なり、親の御上を知らではべらむやはとて、なほ交じらひはべりしに、…」

『うつほ物語』春日詣①二七三頁

このように、忠こそが母親を亡くした憂鬱を抱えつつ、それでも「こともなき」人として宮仕えを続けていたのは、ひとえに父親を大切にしようとする思いがあったからであり、孝の子として自分を律しながら生きている姿をそこに見ることができるのである。この忠こそ心理は、次のような箇所にも読み取ることができる。

・「…内裏にも、おはしまさばこそ頼もしくて、宮仕へも仕うまつりよけれ。参りたまはねば知らぬ心地して、心細うはべるは。…」

『うつほ物語』忠こそ①二三五頁

・忠こそ、さらにおとどに見えたてまつらじ。山林に入りなむ。親の片時見えたまはぬは、心細く悲しくこそ覚ゆるに、許されぬ御気色を見つつは、何を頼みてか宮仕へもせむ、と思ひつつ、入り籠りておはす。

『うつほ物語』忠こそ①二二六頁

このような箇所からは、父親を慕って宮仕えに励む忠こそその姿勢を窺うことができるのである。ただし、そのような忠こそに、非難されるべき可能性が生じるような点がなかったわけではない。忠こそは、今上帝の梅壺の更衣と交際していた。

・「…梅壺の御息所、え隠したまはざめり。これを見たまふればこそいとおそろしけれ。

この御息所は、ただ今時の人なり。気色を御覧じて、なほさぶらはせたまふになむおそろしき」。

『うつほ物語』忠こそ①二三二頁

・忠こそ、世の中思ひ離るるにも、二つなむありける。一つには、かの梅壺の君に、ものをだに聞こえずなりなむことと思ひ、今一つには、年ごろ弾き遊びつるみやこ風を、

また弾かずなりなむことと思ふ。

『うつほ物語』忠こそ①二三九頁

前者は、忠こそその継母の甥である佑宗の発言である。「心よろしからず、博打不合の者にて、身の装束などはみなうち入れて、せむ方なく籠りゐたる」(『うつほ物語』忠こそ①二二八頁)と語られるこの男の発言は、忠こそに対するいわれのない非難のようにも見えるのであるが、後者の部分を読んだ時には、読者は、忠こそは実際に、あこ君に通う一方で今上帝の更衣と交際していたことを知ることになる。ただし、『うつほ物語』の中で忠こそが男女関係のことで責められることはない。唯一、批判めいたことを言うのは、「心よろしからず」と語られる佑宗だけなのであり、忠こそが出家したことを、帝を始めとする誰もが残念がる。つまり、心の中に母親を亡くした憂鬱を抱えてはいても、忠こそはあくまでも孝の子なのであり、父親を慕い、難点のない人物として宮仕えに励む人物なのである。たとえ、梅壺の女御との交際といったような点があったとしても、物語中の記述は、忠こそを決して非難しようとはしないのだ。ここでは、母親のいない忠こそその憂鬱は、ストーリーの流れにはほとんど影響していかない。まるで、忠こそその憂鬱は、もともと存在しなかったかのように、物語は進行していく。忠こそは、あくまでも継母の奸計によって父親との仲を裂かれ、出家に追い込まれる被害者なのであり、忠こそその性質自体が自らに災いをもたらす可能性は示唆されてはいないのだ。

このような、継子としての境遇にも耐えて親を思うという、いじらしい程の人物として造型された忠こそその性質と比べる時、『枕草子』二九五段の「男」は、なんとも危なっかしい人物に見えてくるのである。もう一度振り返って見てみると、「男」は次のような人物として描かれていた。

殿上のまじらひのほど、くちをしからず人々も思ひ、上も御けしきよくて、常に召して、御遊びなどのかたきにおぼしめしたるに、なほ常に物嘆かしく、世の中心に合わぬ心地して、好き好きしき心ぞ、かたはなるまであべき。

先に、「かたはなるまで」という表現は、程度が過ぎていて不都合が生じる位になっている様、見苦しさを感じる位になっている様、を形容するものだということを確認した。この表現は、単に、異常な程までに、という程度の甚だしさを示すだけではなく、このまま行けば困った事態が生じたり、誰かに見咎められたりする可能性があることを示していると言えよう。

「かたはなるまで」と表現される、「男」の「好き好きしき心」は、孝の子としての忠こそその物語の中ではついにクローズアップされることのなかった継子の憂鬱と、それを紛らわすための異常なまでの男女関係への熱中という面を表している。つまり、『枕草子』二九五段は、孝の子の物語としての忠こそ物語の裏面をあぶり出す、もう一つの物語になり得ていると言えよう。『うつほ物語』の中では、「こともなき」人物としてのみ描かれる忠こそであったが、別の視点から見た時に新たな物語が生まれる可能性があったのではなかったか。今上帝に女御たちの身近に接することを許され、そのことから、後宮の中で最も寵愛されている梅壺の更衣と忠こそが親しく交際していたことまで『うつほ物語』は描いて

いるにも関わらず、その後も「こともなき」という忠こそその評価は揺らぐことがない。しかし、「こともなき」と形容される孝の子としての忠こそその物語が封印してしまった継子の持つ陰の側面こそ、そこに焦点を合わせることによって新たな物語が生まれる可能性のある部分でもあった。そして、その可能性に光を当て、「かたはなるまで」の「好き好きしき心」を持った「男」を作り出したのが、『枕草子』二九五段だったと考えるのである。

『枕草子』二九五段は従来、『新全集』が「長い話の冒頭のような形であるが、断片のみで終わってしまったものか。」と評しているように、物語としては人物設定だけで終わってしまった整わない段であると考えられる傾向にあったが、この物語の断片が断片である理由も、実はこの『うつほ物語』忠こそその造型との類似と差異が作り出す、もう一つの物語を想像させる効果に求められるのではないだろうか。先行する似たような物語が他にないのに、突然このような冒頭部（らしきもの）を提示されても、その後どのような物語が展開するのかわからず、人物設定だけを書いて終るこの章段の中途半端さだけが印象に残るようになってしまいうだろう。そうではなくて、この章段は、忠こそその物語を想起させつつも、もし忠こそ物語を別の視点から眺めたらどんな物語が生まれるか、と読者に問いかけ、その想像を誘うように設計された章段なのだ。

後述するように、涼・仲忠の優劣論で話が盛り上がるくらいに『うつほ物語』の世界が浸透していた定子周辺の環境があったからこそ、このような章段が成り立ち得るのではないだろうか。途中で書き止めたように見えても、下敷きになっている忠こそその物語を想起させ、この「男」の物語の行方を思い描かせるようになってるのがこの章段だと思うのである。そうであるからこそ、『枕草子』二九五段は、物語の「断片」として存在することが可能だったのだ。忠こそその物語をよく知る読者には、この「男」の紹介だけで事足りるのである。その後のストーリーは、忠こそその物語を思い浮かべながら、読者が各自で想像できようになっていて、最後まで物語を書く必要はなかったのだ。『うつほ物語』忠こそその物語が内包しつつも最後まで実現させることはなかった可能性、つまり、継子の男性が男女関係に熱中するあまり自らの身に災いが降りかかるまでに至る、といったような可能性を、もう一つの物語として実現させようという企みがここにはあるのではないだろうか。つまり、この章段は物語冒頭部のような内容であるが、それは書きかけのものが無理やりに中断してしまっている形ではなく、忠こそその物語を想起させることによって、その先のストーリーをも想像させるような仕掛けがされている章段なのである。よって、物語の「断片」であることは、ここでは一つの趣向として成立していると私は考える。

三 三巻本における二九五段の位相

前節では、二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」と『うつほ物語』の関わりについて述べたが、まだ解決できていない問題が残っている。すなわち、『うつほ物語』を踏まえた章段を書くなら、なぜ仲忠・涼優劣論に関わる記述にできなかったのかという点である。

周知の通り、『枕草子』に見える『うつほ物語』関連の記述は、ほぼ全てが仲忠・涼優劣論に関わるものばかりである。たとえば、以下のような部分だ。

・暮れぬれば、まゐりぬ。御前に人々いとおほく、上人など候ひて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ定め言ひそしる。涼、仲忠などが事、御前にもおとりまさりたるほどなど仰せられける。「まづこれはいかに。とくことわれ。仲忠が童生ひのあやしきをせちに仰せらるるぞ」など言へば、「何か。琴なども天人のおるばかり弾き出で、いとわるき人なり。帝の御むすめやは得たる」と言へば、：

(七九段「返る年の二月二十余日」)

・わたくしには、「いかでかはめでたしと思ひはべらざらむ。御前にも、『なかなるをとめ』とは御覧じおはしましけむとなむ思ひたまへし」と聞えさせたれば、立ちかへり、「いみじく思へるなる仲忠が面伏せなる事は、いかで啓したるぞ。ただ今宵のうちに、よろづの事を捨ててまゐれ。さらずはいみじうにくませたまはむ」となむ、：

(八二段「さてその左衛門の陣などに行きて後」)

・仲忠が童生ひ言ひおとす人と、「郭公、鶯におとる」と言ふ人こそ、いとつらうにくけれ。
(一一〇段「賀茂へ詣る道に」)

このように、仲忠と涼とを比べ、清少納言が仲忠を支持していた記述が複数箇所に見られるのである。

その一方で、次のような段もある。

・物語は 住吉。宇津保。殿うつり。国譲はにくし。… (一九九段「物語は」)

片桐洋一氏は、忠こそその巻について「いわば中世の発心遁世譚にも通ずる一つの短篇であつたのだ。」と、もともとこの巻が一つの短編物語として存在していたと指摘している(注20)。ただし、この一九九段「物語は」のような記述を見ると、清少納言が『うつほ物語』を読むようになる頃には、『うつほ物語』は改編されて長編化し、現在見られるような形に近くなっていたのではないかと推測され、そこに含まれていた忠こそその巻を目にする機会があつて、そこから影響を受けていた可能性は十分考えられる。

しかし、だからと言って、忠こそその巻を目にする可能性があつたということと、そこから影響を受けることは、やはり次元を異にする問題と違うしかない。ここで、前節で指摘したような、二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」に登場する「男」と、『うつほ物語』に出てくる忠こそその類似は、単なる偶然だったという可能性も出てきてしまうのではないかと思われるが、そう結論付けてしまう前に、今一度慎重に考えてみたい。

まず、この二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」の前後に続いている章段の並びに注目してみることにする。参考までに、三巻本だけではなく、能因本の章段の順序も一緒に挙げることにしよう。

【三巻本】	【能因本】
二九四段「僧都の御乳母のままなど」	二九三段「僧都の君の御乳母、御匣殿とこそは」
二九五段 当該章段	二九四段 当該章段
二九六段「ある女房の、遠江の子なる人を語らひてあるが」	二九五段「定て僧都に桂なし」
二九七段「便なき所にて、人に物を言ひける」	二九六段「まことや、かうやへくだると言ひける人に」
	二九七段「ある女房の、遠江の守の子

二九八段「まことにや、やがてはくだると
言ひたる人に」

なる人を語らひてあるが」
二九八段「便なき所にて、人に物を
言ひけるに」

このように見てみると、能因本の二九五段「定て僧都に桂なし」を除いては、順序こそ違
うものの、三巻本・能因本の両方で、ほぼ同じ章段が前後に並んでいることがわかる。ま
た、これらの章段の内容に目を向けると、二九四段は、御匣殿の局にやってきた男が火事
にあったことを語る場面から始まり、そこで清少納言はこの男をからかって「みまくさを
もやすばかりの春のひによどのさへなど残らざるらむ」という和歌を詠む。そして、周囲
の女房たちも笑い騒ぎ、その話を中宮に申し上げる、という内容の章段である。これは、
定子が登場する日記的章段に分類されるべき内容の章段だが、その中に清少納言の和歌を
含んでいることが章段配列上注目される。なぜなら、当該章段の後に連なる章段（三巻本・
能因本ともに二九六段以降）にもまた、清少納言の詠んだ歌が一章段に一首ずつ紹介され
ているのだ。これらの章段はそれほど長いものではないので、次に三巻本によって、二九
六段・二九七段・二九八段の全文を挙げる。

【二九六段】

ある女房の、遠江の子なる人を語らひてあるが、同じ宮人をなむしのびて語らふと
聞きてうらみければ、「『親などもかけてちかはせたまへ。いみじきそら言なり。夢に
だに見ず』となむ言ふは、いか言ふべき」と言ひしに、

ちかへ君とほたあふみのかみかけてむげに浜名の橋見ざりきや

【二九七段】

便なき所にて、人に物を言ひける、胸のいみじう走りけるを、「など、かくある」と
言ひける人に、

逢坂は胸のみつねに走り井の見つくる人やあらむと思へば

【二九八段】

「まことにや、やがてはくだる」と言ひたる人に、

思ひだにかからぬ山のさせもぐさ誰かいぶきのさとはつげしぞ

このように、当該章段の前後の章段の内容を見ると、そこには清少納言の自作の和歌が語
られる章段群ができていくことがわかるだろう。

このような章段群の中に、三巻本二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」が
あることは何を意味するのであろうか。まず考えられるのは、この章段は、堺本のような
随想群の中に配置されたものではなく、「清少納言の自作の作品」を集めた章段群の中に
位置しているということである。その「作品」とは、「和歌」でも「物語」でもよいのだと
思われる。その点から言っても、この章段が「一般論を述べた随想」であるという理解は
退けられるべきだと考える（もちろん、端々に「一般論」的な書き方が見えるのは否定し
がたいことではあるが）。少なくとも、雑纂本系統の本では、そのような位置づけはされて
いないのだ。

しかし、ここでさらに注目すべきだと思うことは、前後の章段に見える清少納言の
自作和歌の性質である。三巻本の二九四段は定子が登場するなど、清少納言の女房生活と
深く関わる内容ではあるが、しかし、この章段の歌は定子とのやり取りに使われたような

ものではなく、さらにこの章段内で定子が登場するのも、章段最後の部分に限られる。また、二九五段の後に続く清少納言自作和歌に関わる歌語りとでも呼ぶべき三章段は、いずれも定子のいる宮中を直接描くわけではない。無論、まったく「女房」としての立場を離れた書きぶりとは言えないものの、ここに、「定子付き女房としての清少納言」としての位置から、少し距離を置くような叙述態度を読み取ることができないだろうか。

ここで、『枕草子』内において仲忠・涼優劣論争に関わる記述の見える段をもう一度見てみたい。すると、七九段「返る年の二月二十余日」や八二段「さてその左衛門の陣などに行きて後」では、定子や周辺の女房たちとのやり取りに、仲忠・涼優劣論争の文脈がうまく取り込まれて、そのやり取りに活用されていることがわかるだろう。言うなれば、ここでは仲忠・涼の優劣に関わる話題は、ひとつのコミュニケーションツールとして利用されているのである。仲忠・涼の優劣に触れた章段のうち、残るひとつである二一〇段「賀茂へ詣る道に」もまた、「仲忠が童生ひ」という、七九段「返る年の二月二十余日」と緊密な対応を見せる語が使われており、このことに注目するならば、この『枕草子』においても意識されるべき読者としての存在であった中宮定子に向かつての、ひとつの投げかけとして読めるのである。何よりも、この二一〇段「賀茂へ詣る道に」の内容は、仲忠のこととは一見まったく関係ない話題を扱ったものであり、最後にむしろ唐突な印象を与える位に仲忠の話題が登場してくることに、読者としての定子を意識した、清少納言の茶目っ気のある書きぶりが窺えるのである。

このような観点から、もう一度、これらの仲忠・涼優劣論争にもとづいた三つの章段と、二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」を比較した時、両者の間にある性質の差異は、思ったよりも大きいことがわかるのではないだろうか。仲忠・涼優劣論争をひとつのコミュニケーションの道具として使い、定子を多分に意識した前者と、定子付き女房としての書き手としての位置から少し離れて自作の歌や物語を語るかのような章段群に位置する後者、という違いである。

たしかに、『枕草子』を読む限り、清少納言が仲忠びいきだったのは認めてよい事柄だろう。しかし、同時に、『枕草子』に描かれる清少納言は、「仲忠びいき」である自分を自己演出して定子や他の女房と関わっていかうとする存在であることも忘れてはならない。実際に仲忠を気に入っていたかどうかは、さほど重要な問題ではないのかもしれない。仲忠びいきである自分を、定子や他の女房の目にどう映し、どう振舞おうかと考える清少納言がそこにいることを考慮したいのである。

二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」は、そのような、コミュニケーションの道具としての仲忠・涼優劣論争を使って活躍しようとする清少納言を押し出す章段群とは、位相を異にする章段だと私は思う。そこにおいてはすでに、他者と関わるために必要だった仲忠・涼優劣論争は必要ないのではないか。『うつほ物語』が愛好された定子周辺を意識して「忠こそ」の造型をうまく下敷きにしつつ、また一方ではそこから少し距離を置いて、あえて仲忠・涼の話題を持ち出さなかったありようが、この章段からは見えてくるのではないだろうか。三巻本における二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」を通じて、定子周辺をいかに読者層として意識するかという距離感についての、微妙な遠近の使い分けが見えてくると思うのである。

おわりに

三巻本『枕草子』二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」は、従来その位置付けが難しい章段だとされてきた。『枕草子』の一部分でありながら、物語の冒頭部のような印象を与え、さらに唐突に終わるようにも見えるこの章段は、諸本の本文が大きく違うこともあって、その性質を捉えきれなかったというのが実状であろう。この章段に登場する「男」と、定子の子である敦康親王とを重ねて読む方も唱えられていたものの、やはり本文との隔たりが大きかったのではないか。

本稿では、この章段に登場する「男」と『うつほ物語』忠こそその人物像に共通点が非常に多いことに着目し、『枕草子』二九五段に登場する「男」の話は、忠こそその物語を想起させつつ、そこから忠こそその物語では描かれることのなかった面に焦点を当てた、もう一つの継子の物語を想起させるような仕掛けがされた章段なのではないかという可能性を考えてみた。『枕草子』における『うつほ物語』関連の記述は、ほぼ全てが仲忠・涼優劣論に関わるものであり、なぜここで忠こそその話が出て来るのかという疑問も生じるわけだが、それについては、三巻本『枕草子』二九五段の前後には清少納言自作の和歌を含む章段群が存在することが一つのヒントになるのではないかと考える。『うつほ物語』が愛好された定子周辺を意識しつつも、そこから少し距離を置くという姿勢がそこには見えるのではないかと思うのだ。

このような『枕草子』の『うつほ物語』受容のあり方を考える時、思い出されるのは、『枕草子』の物語享受に対する姿勢について論じられる際の従来の傾向である。たとえば、高橋和夫氏は、『枕草子』における『うつほ物語』を始めとする物語の享受のあり方について次のように述べている（注21）。

こうした物語にむかった場合の、清女の、更に広めて言えば宮廷人一般の物語享受の仕方がよくわかるのがこの枕草子である。大げさに言えばこの物語批評の態度は、近代小説の批評（普通私どもが批評と常識で考えているもの）と違つてすこぶる通俗的である。近代小説の批評論が、作品の構成とか、人物の人間像とかいうものを、批評家の客観的な基準から批評していると一言にして言うならば、枕草子の物語批評ではそうした理論的な問題がいわれているのではなく、評者個人の主観的な好悪が判断の第一の基準になつている。また批評の対象が全体的な関連において見られているのではなく、個々の場面が一つずつ興味の対象になつている。

この論の中で高橋氏は、『源氏物語』蜚巻の物語論にも触れ、次のようにも言っている。

現実の宮廷人たちの生活と、物語に展開させられている世界との差異を洞見し、物語の虚構性と、しかもそれなるが故により真実な生活を描写しているはずの物語、作家の精神の内奥に喰い入つて論じられているこの一篇はやはり特筆すべきものであろう。それというのも、物語創作を実践し得る精神構造を持った紫式部だからこそである。時代の制約を身をもって感じて、文学の世界に身を託することによって更に広い視野に人間を追求し得たからにはほかならない。それに対して、枕草子は別の場所では通俗的な生活環境を乗り越えていながらも、物語の批評では遂にこの宮廷人士の水準を抜くことが出来なかつたのではないだろうか。

高橋氏の論に見られるような、「近代小説の批評」との違いということによって『枕草子』の物語享受の水準の低さを証明するといった手法が、受け入れがたいものであるのはともかくとして、注目すべきは、『枕草子』では、「評者個人の主観的な好悪」を基準として、物語を享受している、という指摘である。高橋氏の論では、この点をもって、物語作家としての紫式部と、物語を書かなかった清少納言の対比が行われ、物語理解については紫式部に軍配があがっているのである。よくある紫式部・清少納言の対比の構造をここにも見ることができるわけであるが、物語を表面的に捉えているといった『枕草子』の態度に対する評価自体は、この高橋論文が書かれてから五十年近くもたった最近の論調の中にも見出すことができるのである。たとえば、岡田潔氏は、次のように述べている（注22）。

先行の物語作品で枕草子の中で繰り返し取り上げられ、その内容にまで触れているのは『宇津保物語』である。しかし、それは作品中の中心的な人物である、仲忠と涼の貴族社会における優劣が、中宮定子を中心として論議され、清少納言の熱烈な仲忠・涼が披瀝されているだけである。二十巻にわたる長大な作品に展開される、多彩な物語の文脈は無視され、物語の持つ時間の流れも無縁のこととして、好みの人物の条件だけを取り上げて論議されているのである。

岡田氏は、「好みの人物の条件だけを取り上げて論議されている」と述べつつも、高橋氏のように、積極的に『枕草子』の物語享受の態度を非難することはない。しかし、だからと言って、岡田氏も『枕草子』の物語享受に対して積極的な評価をしているとは言いがたいのである。両者の指摘に共通するのは、清少納言たちが自分の好悪をもって物語を評価しており、物語の持つ多彩な面を無視して、極めて表面的な享受態度に終始しているという指摘であろう。

本稿は、三巻本『枕草子』二九五段の位相について述べるのが主な目的であり、『枕草子』の物語享受の様相について多角的に検討したものではない。しかしながら、二九五段に見られるような『うつほ物語』享受の痕跡を見る限り、『枕草子』が登場人物に対する好みを述べるだけ、といったような限定された形での『うつほ物語』利用をしていたとは考えられないのである。日記的章段に見られるような、中宮定子周辺での仲忠・涼優劣論争のエピソードは、中宮定子周辺での親密なやり取りを支えるひとつのツールとしての『うつほ物語』利用に焦点を絞ったものにすぎないのであり、その記述だけをもって、物語理解の水準の低さを証明しようとするわけにはいかないのではないだろうか。まして、その部分を根拠にして、物語作家としての紫式部との対比論を繰り広げることが、物語を書いた紫式部と、物語を書かなかった清少納言という、価値基準としては決して適切とは言えない基準をもって、一種の優劣の構造に両者を押し込める結果しか招かないはずである。

たしかに物語の登場人物の好みを論議するだけなら、それはそれほど高いレベルの論議とは言えないだろうが、登場人物の造型と、物語の持つストーリーや構造は、切っても切れない関係にあることを今一度思い出すべきだ。本稿で検討してきた『枕草子』二九五段の様相を見る限り、そこには、「かたはなるまで」の「好き好きしき心」を持った一人の男の人物紹介だけがされているように見えながらも、『うつほ物語』忠こそその物語を巧みに利用して、その人物造型から新たな物語を読者に紡ぎ出させようとする企てが立派に成立していたことを認めることができるのではないか。そういった、物語を生み出す源としての登場人物の造型と、先行作品に対する理解とを、『枕草子』二九五段には見ることができ

と思うのである。そして、それは決して物語に対する表面的な受容態度ではあり得なかったはずだと私は思うのだ。

- (1) 本論中に挙げた三巻本『枕草子』の本文、章段番号は、新編日本古典文学全集『枕草子』(松尾聰・永井和子校注 小学館 一九九七年)によった。新編日本古典文学全集の底本は、三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本であるが、三巻本系統第一類本は「あぢきなきもの」(七五段)までの本文を欠いているため、その部分については、第二類本の相愛大学・相愛女子短期大学図書館蔵の弥富破摩雄氏・田中重太郎氏旧蔵本をもって補われている。また、能因本『枕草子』を引用する場合は、日本古典文学全集『枕草子』(松尾聰・永井和子校注 小学館 一九七四年)によった。日本古典文学全集の底本は、学習院大学蔵三条西家旧蔵本である。堺本『枕草子』を引用する場合は、『堺本枕草子評釈』(速水博司 有朋堂 一九九〇年)によった。『堺本枕草子評釈』の底本は朽木文庫本である。章段の分け方はそれぞれ引用した注釈書にならない、その分け方の是非について問題があると思われる場合には本論または注の中で触れることにした。また、初段を「春はあけぼの」の段と呼ぶなど、章段をその書き出しの部分によって指示する場合は、本文を引用した注釈書の呼び方にならった。『枕草子』以外の散文作品を引用する場合は、新編日本古典文学全集によった。なお、必要に応じて引用本文を私に改めた箇所も含まれる。

- (2) 本論中で用いた『枕草子』の注釈書とその略称は、以下の通りである。

池田亀鑑『全講枕草子』上・下 至文堂 一九五六年～一九五七年	∴『全講枕草子』
池田亀鑑・岸上慎二『枕草子・紫式部日記』(日本古典文学大系)	
岩波書店 一九五八年	∴『旧大系』
石田穰二『新版枕草子』上・下 (角川ソフィア文庫) 角川書店	
一九七九年～一九八〇年	∴『角川文庫』
萩谷朴『枕草子解環』一～五 同朋社出版 一九八一年～一九八三年	∴『解環』
増田繁夫『枕草子』(和泉古典叢書 一) 和泉書院 一九八七年	∴『増田』
渡辺実『枕草子』(新日本古典文学大系) 岩波書店 一九九一年	∴『新大系』
松尾聰・永井和子『枕草子』(新編日本古典文学全集) 小学館 一九九七年	∴『新全集』
上坂信男・神作光一・湯本なぎさ・鈴木美弥『枕草子』上・中・下	
(講談社学術文庫) 講談社 一九九九年～二〇〇三年	∴『学術文庫』

- (3) 本稿で堺本を引用する際に用いた『堺本枕草子評釈』は、田中重太郎編『堺本枕草子』(上・下) 影印叢刊 (笠間書院 一九七三年) におさめられた朽木文庫本の影印を翻刻して本文としているが、章段の分け方は、田中重太郎校訂『堺本枕冊子』(古典文庫 一九五六年 訂正版) に拠っている。朽木文庫本の影印を確認すると、二七二段・二七三段・二七四段およびその前後の章段の冒頭とされている部分では、改行の有無は、次のようになっていことがわかる。

【二七一一段】「人の婿は、もの知りさかしき」：行末で改行して、行頭から開始
 【二七二二段】「男は容貌こまかにをかしからねど」：改行無し
 【二七三三段】「帝・みこたちの御身をうらやましきものに」：改行無し
 【二七四四段】「親の家の西ならずは」：行末で改行して、行頭から開始
 【二七五五段】「雨いみじく降りたらんとき」：行途中で改行して、行頭から開始

行末で改行されている場合は、たまたまその場所に改行がきたのか、それとも章段区切りの意識があつて改行したのかが定かではない。ただ、少なくとも、二七二段や二七三三段は改行無しで前段に続く形が取られており、必ずしも章段の区切りを入れることが適切であるとは言ひ切れない。特に、堺本の二七二段・二七三段・二七四段は、その内容としては、三章段に区切ることなく、一つの章段として読むことが可能な章段である。二七二段の「おとこは」という書き出しで始まり、男性の好ましいあり方について述べた一連の文章として読めば、さほど違和感なく一連の文章として読むことができる。このように、内容からは三章段に区切る必要性がないと考えられることから、むしろ三章段に区切ることの方が不適切な処置だとも言えるだろう。前後の叙述とゆるやかにつながりつつ、男性のあり方についての随想を形成しているという堺本の本文のあり方がここでも確認できるのではないかと考えられる。

また、朽本文庫本以外の堺本系統の本で、影印で確認できるものには、斑山文庫本がある。この本の影印は、吉田幸一編『堺本枕草子』（古典文庫 一九九六年）で確認することができる。ただし、この影印で確認したところ、この本は、章段区切り（と思われる箇所）で改行することがない本のため、その性質上、章段区切りに対する意識は確認することができなかった。

- (4) 楠道隆「枕草子異本研究（上）」『枕草子異本研究』笠間書院 一九七〇年
 （初出：「枕草子異本研究（上）」類纂形態本考証―「国語国文」四・六一九四三年六月）

- (5) 林和比古『枕草子の研究』右文書院 一九六四年 一七七頁
 (6) 安藤靖治『枕草子』の一視点―三巻本巻末部における章段の一群と女房日記との関連をめぐって―『麗澤大学紀要』七十七 二〇〇三年十二月

- (7) 山中悠希「堺本枕草子における随想章段の編纂と表現―男性に関する随想群の類纂方法―」『国文学研究』一四八 二〇〇六年三月

- (8) （注五）林氏前掲書 一六九頁

- (9) 萩谷朴『枕草子解環 五』同朋舎 一九八三年

- (10) （注六）安藤氏前掲論文

- (11) （注七）山中氏前掲論文

- (12) 津島知明「敦康親王」の文学史―「源氏物語千年紀」という視界―『日本文学』五七・五 二〇〇八年五月

- (13) 三田村雅子「枕草子の虚構性」『枕草子講座 一』所収 有精堂 一九七五年

- (14) （注九）萩谷氏前掲書

(15) 「好き好きし」の用例は、当該例の他に『枕草子』の中に六例ある。そのうち、男女関係のことを意味していると思われるものが二例(①⑥)、風流の方面のことを意味していると思われるものが四例(②③④⑤)である。

①さらにかやうの好き好きしきわざ夢にもせぬものを、… (六段「大進生昌が家に」)

②「…好き好きしうあはれなる事なり」

(二一段「清涼殿の丑寅の隅の」)

③わびては、好き好きしき下衆などの、人などに語りつべからむをがなと思ふも、いとけしからず。

(九四段「くちをしきもの」)

④「…好き好きしき心ある上達部、僧綱などは、誰かはある。…」

(一二二段「円融院の御果ての年」)

⑤月ごろいつしかと思はへたりしだに、わが心ながら好き好きしとおぼえしに、…

(一五五段「故殿の御服のころ」)

⑥好き好きしくて人かず見る人の、夜はいづくにかありつらむ、…

(一八二段「好き好きしくて人かず見る人の」)

(16) (注九) 萩谷氏前掲書

(17) 受身の「る」だと解している注釈書には『角川文庫』『解環』『学術文庫』、尊敬の「る」だと解している注釈書には『全講枕草子』『旧大系』『新大系』『新全集』がある。

(18) 『枕草子』において、上達部の動作に「給ふ」が用いられている箇所としては、以下の例がある。

①上達部などみな出でたまひぬ。

(二三段「すさまじきもの」)

②そこにて上達部、結縁の八講したまふ。

(二三段「小白川といふ所は」)

③長押の上に上達部は奥に向きて、ながながとゐたまへり。

(二三段「小白川といふ所は」)

④大人、上達部まで、みなそなたさまに見やりたまへり。

(三三段「小白川といふ所は」)

⑤左衛門の陣にまゐりたまふ上達部の前駆ども、…

(七四段「職の御曹司におはしますころ、木立などの」)

⑥上達部までまゐりたまふに、… (七四段「職の御曹司におはしますころ、木立などの」)

⑦上達部などもみなつづきて出でたまひぬれば、…

(一三六段「なほめでたきこと」)

⑧「…上達部のつきたまふ倚子などに、…」

(一五五段「故殿の御服のころ」)

⑨上達部などもやむことながりたまふめり。

(一七九段「位こそなほめでたきものはあれ」)

(19) 堺本の二七三段に出てくる「いもうと」は上達部の妹と解することができるため、三巻本の「いもうと」とは異なる解釈になるが、それぞれの本文に忠実に解釈することの方を優先した。

(20) 片桐洋一「宇津保物語の構成―俊蔭の巻と嵯峨院、菊の宴両巻をめぐって―」
「国語国文」二三・九 一九五四年九月

(21) 高橋和夫「枕草子の物語批評」『国文学解釈と鑑賞』二二・一 一九五六年一月

(22) 岡田潔「古典籍からの影響 物語」『枕草子大事典』勉誠社 二〇〇一年

第六章 三卷本『枕草子』の〈始まり〉と〈終わり〉

―三段「正月一日は」・二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」を中心に

はじめに

『枕草子』（注1）の三百近くの章段は、それぞれが直接的につながってはいない「断片」である。しかし、それでもなお、それらは『枕草子』という総体をなしているのも確かだ。「断片」と「断片」を結び付け、『枕草子』として成り立たせているものは何なのか。

一つの可能性として考えられるのは、〈作者〉の存在である。たとえ内容がばらばらなように見えても、そして、『枕草子』の全てが同じ人物によって書かれたという絶対的な保証がなくても、それは一人の〈作者〉が書き綴ったものだと思われれる時に、「断片」は、一人の人物の述作として認識され得る。ただし、この〈作者〉はあくまでも『枕草子』の記述の中に感じられる「像」であり、そこには一貫性が必要だ。『枕草子』の場合、たとえば日記的章段に見られる〈作者〉は、中宮定子付き女房としての清少納言であることが圧倒的に多い。しかし、この中宮定子付き女房という像は、『枕草子』を読む時にいつでも適用可能かと言うと疑問が残るのである。ある特定の章段だけを読んだ時に、そこに定子周辺に関わる記述が直接的に示されているとは限らない。

そのような章段の例として、本稿では、特に三卷本『枕草子』の〈始まり〉と〈終わり〉に注目したい。先頭と末尾という位置は、『枕草子』の一つの枠組みとも言える。だが、三卷本『枕草子』の〈始まり〉の中の三段「正月一日は」では、白馬節会について述べた「いかばかりなる人、九重をならすらむ」という部分が、清少納言の宮仕へ前の感想を書いたものと従来評されてきた。また、〈終わり〉に含まれる二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」の末文「よき人のおはしますありさまなどの、いとゆかしきこそ、けしからぬ心によ。」について、これが宮仕えを退いた後の思いではないかと指摘する注釈書が複数ある。〈始まり〉〈終わり〉で宮仕えをしていない清少納言という像が結ばれることによって、他の章段に見える定子付き女房としての〈作者〉との一貫性は崩壊してしまうのだろうか。

これらの章段は、諸本間の本文異同が大きく、その前後の章段配列もそれぞれ異なる。『枕草子』の諸本には、雑纂形態をとる三卷本と能因本、類纂形態をとる前田家本と堺本の四つの系統があり、現在では、三卷本を底本に採用する注釈書が多数を占めている。しかし、三卷本は、その注釈の歴史もまだ短く、善本と言われながらも、その性質についての検討が十分なされてきたとは言いがたい面もある。本稿においては、この三卷本の、特に〈始まり〉と〈終わり〉という枠組みを起点として、三卷本の持つ論理について考えたい。

一 三卷本『枕草子』の〈始まり〉

三卷本『枕草子』の〈始まり〉は、有名な初段「春はあけぼの」から、二段「ころは」、三段「正月一日は」と続いていく。ただし、この章段区分は絶対的なものではなく、『角川文庫』や『解環』は、「ころは」と「正月一日は」を、一つの章段と捉えている。三卷本の〈始まり〉は、歳時というテーマのもとに、初段からひとつの流れを作るように章段が配

列されており、この配列は、能因本においても一致する。しかし、類纂形態をとる前田家本や堺本においては、違う配列意識が見える。前田家本や堺本においても初段と二段は、それぞれ「春はあけぼの」「ころは」だが、このふたつの章段は類聚的章段の先頭として配置されており、三巻本や能因本とは異なる意識でそこに置かれている。そして、三巻本では三段目にある「正月一日は」は、前田家本では、随想的章段を集めた第三冊目の先頭の一九七段として位置し、堺本でも、随想的章段群の最初の一八八段にあたるというように、初段・二段とはかなり離れた場所に置かれているのである。雑纂本の初段から三段へと自然とつながる章段配列も、類纂本においては、決して自明のものではない。

さらに、三巻本の三段「正月一日は」は、その書き手の現れ方という点において、ここですで大きな転換を示している。「春はあけぼの」や「ころは」では、その書き手はいったい何者なのか、その手がかりすらない状態で叙述が開始され、そして進む。書き手がいる具体的な場所や、書き手の属性を全く示さずに開始されるのが『枕草子』の〈始まり〉なのだ。そして、そのような叙述に変化が現れるのが、「正月一日は」の段なのである。この段は、叙述の順番に従って、A「正月一日」（世の人々の様子）、B「正月七日」（若菜摘み・白馬節会）、C「正月八日」（加階の御礼言上のための車の音）、D「正月十五日」（貴族の家での粥杖の習俗）、E「除目のころ」（申文を持った四位五位の様子）、F「三月三日」（貴族の様子）、G「四月」（貴族の服装・女童の行動・蔵人の青色の袍）、の各部分に分けられる。

三巻本『枕草子』において、初めて書き手の位置がわかる描写が開始されるのは、B「正月七日」の白馬節会の描写の中である。ここでは、白馬の節会を見物に来た里人が中御門（待賢門）から大内裏に入る時の様子が描かれ、「いかばかりなる人、九重をならすらむ」という感想が直接語られることで、これが書き手自身の経験であることが示される。初段・二段で自らについての情報をほとんど示さなかった書き手は、ここで「里人」として初めてその姿を現わすのだ。『枕草子』の〈始まり〉については、津島知明氏によって、日記的章段の始まりが「春はあけぼの」によって隠蔽されていると論じられているが（注2）、書き手のあり方を示す始まりという意味では、三段「正月一日は」にも、別の〈始まり〉がある。

この「いかばかりなる人、九重をならすらむ」という本文は、能因本も三巻本と一致している。この箇所は、古くは『武藤元信古注書入春曙抄』中の清水濱臣の説において「こゝは清少のいまだ入内せざりし頃の事を、立かへり書けるにや。」と指摘され（注3）、この見方は三巻本を底本として採用した現代注においても継承されている。しかし、この宮仕えに出たことがない人物は、日記的章段に見られるような中宮定子付き女房という〈作者〉像と直ちに重なり合わない。

女房としての〈作者〉像は、三段「正月一日は」においては非常に不安定なものだ。続くC「正月八日」の加階の御礼言上の様子は、宮中にいなくても聞こえるような車の音のみによって表現される。その次のD「正月十五日」は、貴族の家における粥の木の習俗の描写で、宮中に出仕している者の視界に入りそうな光景ではない。E「除目のころ」では「内わたりいとをかし」と述べられるものの、その後のF「三月三日」は、「まらうど」「御せうとの君達」と人物の固有名を出さないことによって、宮中なのか貴族の家なのかわからない描写になっている。G「四月」でも、上達部・殿上人の服装に触れるが、やはり場所を示されない。その上、この部分は、ほころびた服装をした身分の低い童の描写が

大半を占め、日記的章段に描かれるような中関白家の栄華の様子とは大きな違いがある。

特に、B「正月七日」のように、定子のもとへの出仕前の話がそれとわかるように書かれたり、D「正月十五日」のように、他の貴族の家に居合わせたかのような描写をすることは異例のことと言えよう。三田村雅子氏は、「里での日常や宮仕え以外の家庭生活の細部に沈黙をすることで、枕草子はその宮廷文学としての意味の構造を明らかにしているのである。」と指摘する(注4)。たしかに、『枕草子』は宮仕え以外のことはほとんど何も語らない。D「正月十五日」から、『解環』は「何処かの大臣家などに仕えた経験」を指摘するが、そういった経験があったとしても、『枕草子』中に書くかどうかはまた別の問題だ。

実際には、『枕草子』中に、作者出仕前のことを描いた章段自体は、全くないわけではない。三三段「小白川といふ所は」は、清少納言の宮仕え前の時期の出来事を描いている。ただし、この章段では、里人という意識は全く見えない。また、一三二段「円融院の御果ての年」も清少納言の出仕前の話だが、この章段は、あたかも目の前でその場面を目撃しているかのように書かれている。これらの章段と見比べた時、「正月一日は」のあり方は、宮仕え前の〈清少納言〉という存在がそこに立ち現れるという点において特異なものである。このように、「正月一日は」は、書き手の情報が初めて示される段であるにもかかわらず、その書き手は、定子に仕える清少納言という像とは、少なからず距離があるのである。

二 中宮付き女房としての〈作者〉像

今まで確認してきたように、三段「正月一日は」は、〈作者〉についての情報が初めて示されるにもかかわらず、その姿は中宮定子付き女房というあり方とばかりに結びつくことはない。しかし、この書き手が宮中を知っている人物であることを思わせる箇所が二つだけある。一つ目は、B「正月七日」の以下の部分である(注5)。

白馬見にとて、里人は車清げにしたてて見に行く。中御門の戸闕、引き過ぐるほど、頭一所にゆるぎあひ、さし櫛も落ち、用意せねば、折れなどして笑ふもまたをかし。左衛門の陣のもとに、殿上人などあまた立ちて、舍人の弓ども取りて馬どもおどろかし笑ふを、はつかに見入れたれば、立部などの見ゆるに、主殿司、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をならすらむなど思ひやらるるに、うちにも、見るはいとせばきほどにて、舍人の顔のきぬにあらはれ、まことに黒きに、白きもの行きつかぬ所は、雪のむらむら消え残りたる心地して、いと見苦しく、馬のあがりさわぐなども、いとおそろしう見ゆれば、引き入られてよくも見えず。

ただし、この箇所の解釈は、従来、複数の点において問題になっていた。まず、二重傍線部「はつかに見入れたれば」は、どこから白馬を見ているのかという点である。白馬の進路は、春華門↓宣陽門↓日華門↓紫宸殿南庭↓月華門↓清涼殿東庭↓分かれて三宮・東宮・斎院へという順であり(注6)、文中に出てくる「左衛門の陣」のある門は、宣陽門の外側の建春門である。この点について、田村専一郎氏は、建春門の外側(注7)、『解環』は、建春門の内側から見ていると解釈している。その根拠として『解環』は、建春門と宣陽門の奥行きから、建春門の外から温明殿のあたりを観察するのは不可能だと説明する。だが、建春門の外から温明殿までは五十メートルも離れておらず、建春門の外から白馬を見ていたとすれば、「はつかに」のぞき込むという表現とも矛盾しない。また、通常であれ

ば特別の許可なしに牛車を乗り入れられない内裏の中まで、「里人」が牛車で入って白馬を見物することは難しいと考えられる。ここは、建春門の外から白馬を見ていると解するのが適切であろう。

次の問題は、傍線部「うちにも見るは」の「うち」は何を指しているのかという点である。古く『磐斎抄』において「乗出し車の内よりみる人の詞也。」と解されたものの、この解釈は現代注においてはほぼ否定されている。「うちにも」という本文は、「車の外にも」「車の中にも」という対比の文脈でなければ解することができないため、「車の内」という解釈を取ることはできない。ここは、「内裏においても」と解すべきであろう。また、現代注のほぼ全てが、「うちにも」以下を里人としての経験と述べたものと解し、「引き入られて」を「車の内に」思わず引っ込んでしまつてと解している(注8)。しかし、「里人」が宮仕え前の人物を指すとすれば先述のように、この部分は里人としての経験ではなく、定子のもとに出仕した後の経験だと考えられる。さらに、「引き入られて」という表現は、建物の奥に引っ込んでしまう、と解釈することが可能だ。また、「せばきほどにて」という部分も、車を立てた空間が狭いのではなく、紫宸殿の前を渡った白馬が中宮のもとに來たのを建物内部から見る時に、建物周辺の空間が狭くて舍人や白馬が近すぎる、という状況を表わしているという理解できるのである。

このように考えると、ここには、「里人」としての体験と、中宮定子に仕えるようになってから宮中で白馬を見た経験、の二つが並んでいることがわかる。この「正月一日は」においては、先に確認したように、中宮定子に仕える女房としての書き手という位置は不安定なものでしかない。しかし、その中で、現在は宮中に仕えている書き手という存在を打ち出すことによって、過去に里人だった書き手が、今は中宮定子のもとへ出仕しており、その書き手が日記的章段などの〈作者〉と一致する、というつながりが生まれるのだ。

また、書き手と宮中のつながりを示す二つ目の点として、D「正月十五日」の最後の一文「内わたりなどのやんごとなきも、今日はみな乱れてかしこまりなし。」と、それに続くE「除目のころ」の最初の一文「除目のころなど内わたりいとをかし。」がある。この部分において、かろうじてこの書き手は「内わたり」すなわち宮中のことも見聞きしているという印象が作り出されているのだ。以上の二点によって、この段の書き手は、定子付き女房としての清少納言という〈作者〉像と結びつくことができるのである。

三 三段「正月一日は」の本文異同

ただし、里人としての書き手と、他の段の〈作者〉との間に連続性が確保されるのは、雑纂本の特徴である。能因本と三巻本の間には大きな異同がないものの、前田家本はB「正月七日」の「いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむと思ひやる、をかし。」の後に、「帝のおはしますらむさまなど思ひやりまゐらせて、宴の松原といふ人はなけれど、すずろにねたけれ。」という独自異文を挟んで、「うちにも」という語なしに、「いとせばきほどに舍人のかほのきぬきもあらはれ、」と続き、全てが里人としての白馬見物の描写となつてゐる。また、堺本では、雑纂本の「うちにも見るは」以下に相当する本文が一〇五段「みものは」に離れて存在し、「正月一日には」の白馬見物の話は、里人の見た光景の描写で終わるのだ。

また、類纂本は、C「正月八日」の描写の後に、「えせものの家のあらばたけ」という宮中とは全く異なる場所が描かれる正月十日の描写を置いている。一方で、雑纂本では、この正月十日の部分は、たとえば三巻本では一三八段「正月十余日のほど、空いと黒う」として、全く別の場所に置かれている。中宮付き女房としての〈作者〉像と対立しような要素を他の場所に隔離している雑纂本に対し、類纂本は宮中からの距離が遠い描写もためらわずに取り込んでいえると言えよう。

さらに、D「正月十五日」の部分も、三巻本の「内わたりなどのやんごとなきも、今日はみな乱れてかしこまりなし」という本文に対し、類纂本では文末が「知るまじかめり」(前田家本)、「しらるまじかめり」(堺本)となっている。三巻本では言い切り形の文末が、類纂本では助動詞「めり」を伴う点は無視できない。この「めり」が情報源までの遠さ、言い切る姿勢の弱さを表わすからである。その次の文でE「除目のころ」を描写し始める際も、前田家本では「うちわたりは、除目のほども、いとをかし」とあるが、堺本は「つごもりになりて、除目のほど、いとをかし」と直接「内裏」に言及しない。

そして、「正月一日は」は、E「除目のころ」の描写を終え、F「三月三日」の描写へと移る。この部分に見える内容は、『枕草子』の他の章段と密接なつながりを持つ。「三月三日」「桃の花」「柳」「桜」という要素は、七段「上に候ふ御猫は」と共通する。また、広がつた柳はよくないと述べる部分は、二八二段「三月ばかり物忌しにとて」の清少納言詠「さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてを伏する宿かな」に通じる。さらに、桜を大きな瓶にさすことや、桜の直衣や出衣と一緒に描写される等、二二段「清涼殿の丑寅の隅の」にも大変共通点の多い描写が見える。このように、他の章段と共通する要素が繰り返し用いられることは、それが一人の〈作者〉によつて書かれたように思わせる効果がある。

そういった意味では、この「正月一日は」の末尾にも注意が必要である。ここまでは、前田家本・堺本が互いに少しずつ違っている一方で、三巻本・能因本の間には、それ程大きな差がなかった。ただし、この章段の最後の「蔵人思ひしめたる人の、ふとしもえならぬが、その日、青色着たるこそやがて脱がせでもあらばやとおぼゆれ。綾ならぬはわろき。」は、三巻本の独自異文なのである。蔵人の青色の袍についての記述は、『枕草子』の中に散見され、蔵人の青色の袍を好ましいものとして繰り返しほめるこれらの記述の存在によつて、その点にこだわりの見える〈作者〉という一つの像が結ばれるのである。

このように、三巻本の三段「正月一日は」は、単に歳時という点で初段・二段に続くのではなく、中宮定子に仕える女房清少納言という像を示し、その〈作者〉が「正月一日は」だけではなく、『枕草子』全体の書き手であることを強く押し出す役割を果たしていると言えよう。宮仕え前の時の感想や、宮中以外の場所の描写を含みつつも、定子付き女房の清少納言という像を確保していこうとするあり方が、三巻本の本文には見える。それが、三段「正月一日は」が三巻本『枕草子』の〈始まり〉において示している姿勢であった。

四 二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」が想起させる〈作者〉像

ここまで、三巻本『枕草子』の〈始まり〉を見てきたが、今度は、〈終わり〉について考えたい。注目したいのは、二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」である。

宮仕へする人々の出であつまりて、おのが君々の御事めできこえ、宮の内、殿ばら

の事ども、かたみに語り合はせたるを、その家主にて聞くこそをかしけれ。家ひろく清げにて、わが親族はさらなり、うち語らひなどする人も、宮仕へ人をかたがたにすゑてこそあらせまほしけれ。さべきをりは、一所にあつまりゐて、物語し、人のよみたりし歌、なにくれと語り合はせて、人の文など持て来るも、もろともに見、返事書き、またむつまじう来る人もあるは、清げにうちしつらひて、雨など降りてえ帰らぬも、をかしうもてなし、まゐらむをりは、その事見入れ、思はむさまにして、出だしたてなぞせばや。よき人のおはしますありさまなどの、いとゆかしきこそ、けしからぬ心にや。

宮仕え先を退出した女房などが里で集まって話をする様子は、一七二段「宮仕へ人の里なども」にも、「何の宮、内わたり、殿ばらなる人々も出であひなどして、格子なども上げながら、冬の夜をみ明かして、人の出でぬる後も見出だしたるこそをかしけれ。」とある。二八四段最初の一文（「聞くこそをかしけれ。」まで）は、一七二段のような女房たちが集まった場に、家主として同席して他所の貴人の話を興味深く聞いたという経験を書いたものと解せる。そして、続く「家ひろく清げにて」以下は、そのような経験を踏まえ、もし自宅に他の宮仕え人も住まわせてもつと話を聞くことができたならおもしろいだろうと考えた、と解釈することができるのである。そう読めば、二八四段は、中宮付き女房清少納言が、里での経験と、その延長線上にある願望を書いた章段として受け取れる。

しかし、この章段については、定子崩御後に宮仕えを退いた清少納言が記したものではないかと評する注釈書が複数ある。たとえば、『全講』は「作者の老後の生活を語っているように思われる。」と言う。『角川文庫』も、「末尾の一文は、定子崩後、宮仕えを退いた後の執筆であることを物語っているようである。」と述べ、この説明を引用した『学術文庫』も、『角川文庫』のような読みも可能だとする。また、『新全集』も「作者自身宮仕えをしている時であれば、貴人の消息はおのずからわかったであろうから、宮仕えを退いてのちの感想を記したものと見ることもできる。」と説明する。このような読みがなされる要因としては、『角川文庫』が述べるように、章段末尾の一文「よき人のおはしますありさまなどの、いとゆかしきこそ、けしからぬ心にや。」がある。「よき人」の様子を間近に見ることができなくなった、宮仕えを退いた〈作者〉の像がここから読み取られているのである。

けれども、この章段には、諸本の間で本文に異同がある。この章段は、三巻本・能因本・前田家本にあり、堺本にない。章段全体では、能因本は、誤脱と思われる箇所を除けば、三巻本との差異は小さいが、三巻本・能因本と、前田家本の間には二つの大きな違いがある。まず、前田家本では章段冒頭に「女は、宮仕すとも、人のむすめは、いふべきにあらず、年若く世の中いたくつろぎ、なれざらむは、」という独自異文がある。さらに、三巻本の章段末文「よき人のおはしますありさまなどの、いとゆかしきこそ、けしからぬ心にや。」は、能因本ではほぼ同じ形で存在するが、前田家本には存在しない。

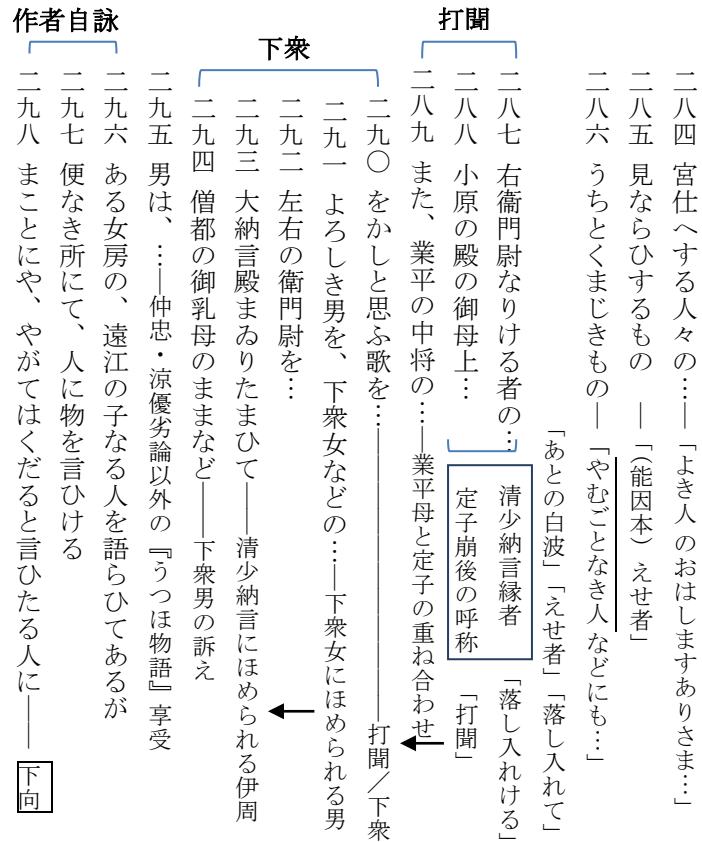
この二つの本文異同は、共にひとつの結果を作り出すように作用していると考えられる。すなわち、前田家本では、「女は」と書き始めることで、書き手の個人的な経験を離れ、この章段全体（注9）を一般論として述べる姿勢を明らかにしている。一方で、三巻本と能因本は、一般論としての構えを取らない。そのため、雑纂本では、「その家主にて聞く」を、宮仕えを退いた後の〈作者〉の経験と解し、さらに、章段末尾の一文から、宮中を離れた〈作者〉を読み取ること、可能になるのである。

この章段を、定子のもとに出仕中の〈作者〉が書いたものと見るのか、それとも、宮仕えを退いた〈作者〉が書いたものと見るのか。三巻本で読む時、その本文から読み取ることのできる〈作者〉像は二通りあり、そのどちらか一方に絞るための決め手はない。末尾の一文の中の「けしからぬ心」にしても、定子に仕えている女房が、他の高貴な人々の様子を知りたいという飽くなき好奇心を自省したものと読むこともできる一方で、すでに宮仕えを辞した女房がそれでもなお噂話で貴人の様子を知りたいと思い、それを後ろめたく思っているのと取ることも可能である。三巻本の本文でこの章段だけを読んだ際に、どちらの解釈が正しいのか決めることは、それ程簡単なことではないのだ。

そして、この二通りの〈作者〉像のうち、宮仕えを退いた〈作者〉像の方は、二八四段から最終段へと続く三巻本『枕草子』の〈終わり〉において、他の章段とのつながりを形成し始める。以下、次段からの章段配列について検討したい。

五 三巻本『枕草子』の〈終わり〉の章段配列

三巻本『枕草子』二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」から最終章段までの配列と、これらの章段間で共通する要素を書き出すと、以下のようになる。



作者自詠

二九八 まことにや、やがてはくだると言ひたる人に——

下向

まずわかるのは、三巻本のこれらの章段には、編纂する上での配列意識が明らかに存在しているということである。二八六段「うちとくまじきもの」末尾の一文にある「落し入れて」という語は、二八七段で右衛門尉が男親を海に「落し入れける」話につながる。この二八七段は和歌を含む打聞章段だが、単独で存在しているのではなく、二八九段「また、業平の中将のもとに」まで続く打聞章段群を形成している。さらに、この「打聞」のつながりで二九〇段「をかしと思ふ歌を」が置かれ、この二九〇段に含まれる「下衆」という

要素は、二九一段の「下衆女」に連続する。また、二九一段の自分より身分の高い男をほめるという要素は、二九三段で清少納言が伊周をほめるという構図にずらされ、二九四段では下衆男が自宅の火事を嘆き訴える、というように、二九〇段から二九四段は「下衆」によってつながっている。その後、書きかけの物語のような二九五段を挟み、二九六段から二九八段では作者自詠が語られて、そこで三巻本『枕草子』は終わるのである(注10)。

このような章段配列の中で、二八四段で宮仕えを退いた〈作者〉像を喚起する要因が認められたのと同じような現象が、二八六段「うちとくまじきもの」にも存在することには注意が必要であろう。この段の海の描写については、幼少期の清少納言が天延二年(九七四)に父の清原元輔の周防国赴任に同行した際の経験に基づいたもの、という古瀬雅義氏の指摘がある(注11)。様々な資料を検討した古瀬氏の結論は蓋然性の高いものだと思う。ただ、一方で、「うちとくまじきもの」の描写そのものからは、この船旅がいつのものなのかを読み取ることができない。つまり、この章段の背景は、いつも推測されるものでしかなく、事実とは違う背景を読み手に想定させてしまう可能性を含むことに注目したい。

この章段において船旅が描写されること自体が、都で定子に仕えているはずの〈作者〉がなぜ船旅に出ているのかという読者の想像を喚起するものであると言える。そして、この描写の中には「櫓といふもの押して、歌をいみじうたひたるは、いとをかしう、やむぐとなき人などにも見せたてまつらまほしう思ひ行くに」とある。この船旅の経験が清少納言の幼少期のものだとすると、「やむぐとなき人」は、具体的な指示対象を持つとは限らない。しかし、清少納言が中宮定子に仕えた女房だと知る読者にとつては、「やむぐとなき人」という表現は定子を中心とする高貴な人々を想起させるものでもある。また、同じ章段中にある「あとの白波」はまことにこそ消えもて行け。よろしき人はなほ乗りてありくまじき事とこそおぼゆれ。」という部分の「あとの白波」は、『拾遺和歌集』哀傷・一三二七の沙弥満誓歌「世の中をなににたとへむあさばらけこぎゆく舟のあとのしら浪」による。ここで人の世のはかなさを詠んだ歌を引くこともまた、定子崩御と結び付く可能性を持つているのだ。『無名草子』に描かれるような、宮仕えを退いて地方に下る清少納言が、あたかも今は亡き定子のことを考えながら船に乗っている場面を想起させるようでもある。ただし、そういった読み方は、そう読むべき確固とした根拠から来るものではない以上、あくまでも深読みに過ぎず、書かれていない背景を想像する行為ではない。また、二八六段「うちとくまじきもの」の一部の表現だけからそこまで読み取るのは行き過ぎと言える。しかし、重要なのは、二八四段から最終段までの『枕草子』の〈終わり〉には、たとえ誤読と言えるものであったとしても、定子崩御後に宮仕えを退いた〈作者〉像を喚起させる要因が連続して置かれているということなのである。

これは、続く二八七段以降についても言えることだ。二八七段から二八九段の打聞章段群、二九六段から二九八段の作者自詠を語る章段群に含まれる歌は、いずれも宮中や定子との関わりを持たない。『枕草子』の中で、清少納言が宮中で詠んだ歌や、定子からの歌、殿上人や周囲の女房たちの歌が語られることはよくあるが、定子周辺と関わりのない文脈で歌を語ることや、たとえ作者自詠であっても宮中と関係のない歌を語るのは、ほぼこの箇所だけと言ってよい。さらに、打聞を語る二八七段と二八八段は、共に、定子崩後の時期の呼称を用いることで、否応なしに定子亡き後の時空を読む側に意識させる。また、両段の歌は定子や宮中とは関係を持たないだけでなく、従来、道綱母や道命といった清少

納言の縁戚に当たる人の歌であるということがしばしば指摘されてきた(注12)。続く二八九段の業平の母も、『新編』が「師走」に敦康らと死別した「母」の「宮」定子に擬えるか。」と指摘するように、子供を残して亡くなる定子と重なり得るものである(注13)。

これらの要素の一つ一つは、単独では、宮仕えを退いた〈作者〉を喚起するにはあまりに弱い。しかし、これらの要素が連続して現れることによって、定子が亡くなった後に、地方に下った清少納言が、自らの縁者の歌を書き留めたり、業平の母と重ね合わせながら定子のことを思い出している、という像を作るように機能する可能性がそこに生まれてくる。都を離れる清少納言を読み取ることが実際には正確な理解ではなかったとしても、編纂意図として、そうした理解を誘うように設計されているのだと考えられるのである。

この二八九段までの打聞章段群の後には、「下衆」というつながりによる章段群がある。その中の二九三段・二九四段は日記的章段だが、章段配列の上で「下衆」が重視された結果としてここに置かれている上に、両段の記述はそれぞれ伊周や下衆男に圧倒的に集中し、定子はほとんど登場していないかのである。また、次の二九五段における「男」の造型は『うつほ物語』忠こそ巻における忠こそその人物設定を下敷きにしており、定子周辺で頻繁に話題に出された仲忠・涼の優劣論争とは異なる『うつほ物語』享受が見える点で、前後の章段と同じように、一貫して定子周辺とは距離のある内容なのである(注14)。

さらにその次には、二九六段から二九八段の作者自詠を語る章段群が置かれているが、まさにこの最終段で、清少納言の下向の話題が、否定されながらも語られて、そこで三巻本『枕草子』は幕を閉じる。この後も二十以上の章段が続く能因本と比較した時、この三巻本の編纂意図はより明確になるだろう。ここには三巻本『枕草子』の〈終わり〉を形成する章段群が作られており、定子崩御後に地方に下る〈作者〉像を読者に思い描かせる役割を果たしている。清少納言詠歌を巻末に据え、下向についての話題を最後に『枕草子』の叙述を終える態度は、三巻本独自のものと言えよう。

おわりに

三巻本『枕草子』の〈終わり〉には、「よき人」の様子を知りたいと渴望する〈作者〉や、宮中を離れて船旅をする〈作者〉がいた。これらの要素は、読者の受け取り方によっては、中宮付き女房という〈作者〉像を揺るがし、女房清少納言によって書かれた『枕草子』、という理解を崩壊させかねない。しかし、三巻本の「宮仕へする人々の出であつまりて」の本文や、その後の章段配列は、「かつて」定子に仕えた女房という〈作者〉像を作り上げ、高貴な人の情報に疎いのも、船旅をするのも、宮仕えを辞した〈作者〉であるからだ、という説明を成立させていくのである。それが「正しい」読みでなかったとしても、そのような一種の「誤解」をさせるように構成されているのが、三巻本の〈終わり〉なのではないだろうか。

同様に、その〈始まり〉においても、「正月一日は」の段は、一見、定子周辺とは無関係な記述が多く見られる中で、三巻本の本文は、かつて「里人」であり、その後、宮中に仕えるようになった女房という〈作者〉像を確保していた。そのことによって、三巻本は、女房清少納言の述作としての『枕草子』という枠組みを支えているのである。

ただし、宮中や定子と直接結びつかないような記述は、『枕草子』の〈始まり〉と〈終わ

り」にだけ見られるものではない。そもそも、定子に仕える女房、をこの作品の書き手として想定しながら読むということ自体が、どこまで可能なのか。日記的章段においては、定子周辺の様子が描かれ、主家讃美の主題を認められることが多いが、類聚的章段や随想的章段では、宮中を離れた記述が多々見られることも事実だ。『枕草子』は「宮廷文学」と評されつつも（注15）、それぞれの章段を読んだ時には、この内容が「宮廷」と一体どのような関係があるのか、具体的に説明ができないことのほうが圧倒的に多いのである。

また、三巻本は、雑纂という形態のゆえに、ばらばらな内容の断片が寄せ集められただけのように見える。『解環』は、並んでいる章段間のつながりを「作者の連想」として捉え、重視しているが、「作者の連想」と思われるものを一つ一つ指摘しながら読むという行為自体が、そうでもしなければ、章段と章段とをつなぐ「作者」を想定して、この断片の集積を総体として読むことができなくなる、という危惧の裏返しだったのではないだろうか。

『枕草子』の内容は、宮仕え生活の周辺にまで広がっている。主家讃美の主題はたしかに一部には認められるが、それだけに収まらず、宮中を離れ、定子と結び付かない記述も非常に多い。それは、一種の魅力にもなり得る一方で、「女房」としての「作者」を読み手が見失い、この記述の断片の集積を一人の「作者」によって書かれた総体として捉えられなくなる、という危機とも隣り合わせのものであった。そのような状況の中で、三巻本の本文とその章段配列の論理は、中宮定子付き女房としての「作者」という一貫した像を『枕草子』中に作り出し、断片の集まりのように見える『枕草子』を一つの総体として読ませるために、一定の枠組みをこの作品に与える役割を果たしていると考えられるのである。

（1）本論中で用いた『枕草子』の注釈書とその略称は、以下の通りである。

- ・池田亀鑑『全講枕草子』至文堂 一九五六年～一九五七年 ……『全講』
- ・石田穰二『新版 枕草子』（角川ソフィア文庫）角川書店 一九七九年～一九八〇年 ……『角川文庫』
- ・萩谷朴『枕草子解環』同朋社出版 一九八一年～一九八三年 ……『解環』
- ・松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）小学館 一九九七年 ……『新全集』
- ・上坂信男ほか『枕草子』（講談社学術文庫）講談社 一九九九年～二〇〇三年 ……『学術』
- ・津島知明・中島和歌子『新編枕草子』おうふう 二〇一〇年 ……『新編』

また、各系統の本文と章段の数え方は次の注釈書によったが、底本を校訂している箇所があることに留意した。なお、一部、私に校訂し、句読点の位置を変えた箇所がある。

- ・三巻本―『新全集』
- ・能因本―松尾聰・永井和子『日本古典文学全集 枕草子』（小学館 一九七二年）
- ・前田家本―田中重太郎『前田家本 枕冊子新註』（古典文庫 一九五一年）
- ・堺本―清水博司『堺本枕草子評釈』（有朋堂 一九九〇年）

なお、和歌の引用は、新編国歌大観 CD-ROM によった。

- （2）津島知明「枕草子が「始まる」―仕掛けとしての「春は曙」」（『動態としての枕草子』二〇〇五年 おうふう 初出：二〇〇三年一月）

- （3）『国語国文学研究史大成 六』（一九六〇年 三省堂）

- (4) 三田村雅子「〈門〉の風景―額縁・枠取りとして―」(『枕草子 表現の論理』一九九五年 有精堂)
- (5) 傍線部「うちにも」は、杉山重行『三卷本枕草子本文集成』(笠間書院 一九九九年)によれば、三卷本第二類系統のうち、中邨本など七本で「うちにも」、その他の四本で「うちにて」となっている。それ以外に、弥富本では「て」に傍記で「も」、河野本では「て」が見せ消ちで「も」と傍記されている(能因本では「うちにも」。「て(天)」と「も(毛)」は字形がよく似ており、誤写される可能性が高い。そのため、どちらがより古い本文であったか断定はできないものの、「うちにも」とする写本のほうが多いことや、河野本や弥富本の傍記を考慮すると、少なくとも三卷本系統においては、「うちにも」のほうが書写行為の中で支持された本文だったと考えられる。そのため、本稿においては、「うちにも」の本文で解釈した。
- (6) 『西宮記』、『左経記』長元元年(一〇二八年)正月七日条
- (7) 田村専一郎「枕草子漫考―白馬節会―」(『文学論輯』三一 一九五五年三月)
- (8) 迫徹朗「白馬節会条考」(『王朝文学の考証的研究』一九七三年 風間書房)は、「うちにも」以下を「里人」の「内裏」での経験と解しているものの、「里人」を里にいる女房と解し、「白馬見にとて」以下を全て清少納言が第三者の立場に立つて「里人」を描写した「随想文」と考えているため、本稿とは立場を異にする。
- (9) 『前田家本 枕冊子新註』(注一前掲書)では、「家ひろうきよげにて」以下を別段としているが、前田家本では、この章段の前後に宮仕え関連の随想群が形成されており、「家ひろうきよげにて」以下を前段に続けて一章段として読むことも可能である。
- (10) 二八五段は、能因本では最後に「なまけしからぬえせ者」が挙げられている。三卷本では、二八六段の最初に「えせ者」が挙げられ、能因本では「あしと人に言はるる人」となっている。この校異が生じた過程は不明だが、もとは三卷本も二八五段の最後に「なまけしからぬえせ者」が挙げられていたのが、誤脱が生じたために、両段のつながりが見えづらくなった可能性も考えられる。
- (11) 古瀬雅義「清少納言の周防下り―〈海〉の描写に見る恐れから―」(『安田女子大学紀要』三三 二〇〇五年二月)
- (12) 湯本祐之「枕草子鑑賞Ⅱ(第二八五段―第三〇〇段)」(『枕草子講座 三』一九七五年 有精堂)、稲賀敬二「五二 小原の殿の御母上とこそは」(稲賀敬二・上野理・杉谷寿郎『枕草子入門』一九八〇年 有斐閣)、など。
- (13) 拙稿「三卷本『枕草子』」また、業平の中将のもとに」の段をめぐって―章段配列との関わりから―」(『国語国文研究』第一三九号 二〇一一年三月)
- (14) 拙稿『枕草子』「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」の段をめぐって―『うつほ物語』忠こそとの関わりから―」(『古代中世文学論考』二三 新典社 二〇〇九年十月)
- (15) 野村精一「宮廷文学としての枕草子」(『文学』二五六 一九五七年六月)

〔付記〕本稿は、物語研究会二〇一二年度十月例会(十月二十日・於青山学院大学)における自由発表「三卷本『枕草子』の〈始まり〉と〈終わり〉」を基にしたものです。発表の際にご意見・ご教示下さった皆様に心より御礼申し上げます。

終章

これまでの章で、本文や章段配列に注目しながら、三巻本『枕草子』の持つ論理について考察してきた。各章の内容をふり返ってまとめたい。

第一章と第二章は、ともに清少納言出仕前の出来事を描く章段が、三巻本『枕草子』の本文や章段配列によってどのように作品中に位置づけられているか、という問題を取り扱ったものである。

第一章では、「円融院の御果ての年」の章段を取り上げた。この章段は、清少納言がまだ中宮定子に仕えるようになる前の話であるにもかかわらず、あたかも清少納言がその光景を直接見聞きしたかのように語られるという点で、『枕草子』中でも特異な章段である。そのため、先行研究においては様々に議論されてきたが、近年、清少納言の出仕時期の見直しを迫る論考が発表されているため、その是非の検討から出発し、この章段の性質を考えたいものである。その結果、この時期の一条天皇は実際には政治的にまだ盤石とは言えない状況にありながらも、『枕草子』では、手紙がいたずらだったという種あかしや、それがわかった時の笑いの描写によって、そのような不安は最初から存在しなかったものとして扱われていることが明らかになった。さらに、能因本では章段冒頭に僧正遍昭を意識させるような一節が存在するのに対し、三巻本ではそのような表現がないため、文が届いた時の不安がより切実に感じられる構成になっていることを指摘した。強い不安といたずらだとわかった時の安堵の差を大きくすることによって、一条天皇を取り巻く不安感はまだ強く否定される効果がある。

第二章では、「説経の講師は」段に繰り返し現れる「今」と「昔」の対比に着目した。この段の前後の章段配列は、諸本によって大きく異なり、同じ雑纂形態の三巻本と能因本でも、直前の章段配列に違いが生じている。一方で、直後の章段配列を見ると、三巻本と能因本はともに、この章段の後に「菩提といふ寺に」「小白川といふ所は」の二段が続いており、内容的にも密接なつながりが認められる。さらに、「説経の講師は」の段においては、「今」と「昔」の対比が繰り返し見られる上に、これらの対比表現は、この章段の中で叙述の流れを作る上で重要な役割を果たしていることがわかる。これらの対比表現のうちのひとつに、「はじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき」という箇所があるが、この部分は、能因本では本文が異なり、後人注記のような文章になっている。この有様と比較した時、三巻本では、「作者」による今昔の対比表現という前提がより徹底されていることが明らかになった。三巻本の「説経の講師は」段におけるこうした今昔対比表現は、その後に続く「小白川といふ所は」段の存在を自然に見せることに貢献している。

第一章の「円融院の御果ての年」段と、第二章の「説経の講師は」に続く「小白川といふ所は」段は、ともに清少納言出仕前の出来事を描いた章段である。『枕草子』中で清少納言出仕前の時期の出来事が語られるのは異例のことであり、「小白川といふ所は」の場合は、その前の「説経の講師は」段があるからこそ、ここに置くことが可能になったと言える。三巻本の「説経の講師は」段の本文が、「作者」が「今」と「昔」を比較するという枠組みを徹底していることによって、その「昔」の話のひとつとして小白川八講の話をここで語ることを違和感なく見せているのである。

そのようにして三卷本『枕草子』中に存在している「小白川といふ所は」の段は、あえて花山天皇退位に関する話題に触れながら、そこにある政治的な対立をなかつたもののように描くという効果をあげていた。そして、同じような方向性は、「円融院の御果ての年」の段においても認めることができる。この章段で語られる差出人不明の文は、一条天皇の服喪における過失を責めるような調子を含んだものであった。結果的にはいたずらの文であったが、繁子の抱く強い不安の背後には、政治的な基盤がまだしっかりと定まっていないう一条天皇の不安定な状況が考えられる。能因本とは異なる本文によって、三卷本では文を受け取った繁子の不安がより強く表現され、それがいたずらだとわかることによって、一条天皇に関する政治的な不安も他本より強く否定されることになる。このように、第一章・第二章ともに、政治的な不安にあえて触れつつ、それを否定していくという方向性は、三卷本の本文により強く認められることを明らかにできたのではない。『円融院の御果ての年』段では一条天皇の不利な状況をより強く意識させることによって、また、「説経の講師は」段では花山退位前を描く後続の章段を導くことによって、三卷本の本文と章段配列は、共通の方向を目指していると考えられるのである。

次に、三卷本の論理を明らかにする過程で、その内容に物語がいかに取り込まれ、本文や章段配列にどのように関わっているかという点に注目しながら論じてきた。

第三章では「三月ばかり物忌しにとて」の段を取り上げた。この章段に出てくる清少納言の文には「わたくしには、今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」という部分があるが、この「少将」とは何を指しているのかということを検討したものである。この「少将」の指し示す人物については、近年新説が次々と出されているが、本稿では、これは『落窪物語』の道頼であり、物語中の雨夜訪問譚がこの章段のやり取りに活かされているのではないかということ述べた。そして、この章段が『落窪物語』に基づいたやり取りを含むことによって、三卷本『枕草子』の前後の章段配列に影響を与えていることを指摘した。

このような物語の筋や人物を下敷きにしたやり取りは、中宮定子やその周辺の女房たちの間ではしばしば交わされていたものと考えられる。そのような物語のひとつに、『伊勢物語』も挙げることができよう。

第四章では、「また、業平の中将のもとに」の段について論じた。「いをの物語」という本文を含む「頭中将のすずるなるそら言を聞きて」段の検討から、この「いをの物語」は『伊勢物語』を指しており、定子周辺で『伊勢物語』第八四段の業平とその母のエピソードは共有され話題に上がっていたことを明らかにした。その上で、この「また、業平の中将のもとに」の前後の三卷本の章段配列の中では、この業平とその母に関する歌語りは、定子亡き後の時間を想像させる役割を担うようになると論じた。『栄花物語』に繰り返し語られるような、自分の死が近いことを意識して息子の敦康親王のことを心配する定子像は、三卷本『枕草子』の中では、『伊勢物語』の業平母に重なり合うのである。そして、三卷本『枕草子』の終末近くに置かれたこの段は、宮仕えを退いた作者像を読む者に想像させるように配置されていると考えられる。

第五章で取り上げた「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」の段もまた、物語との関わりが指摘できる章段だと考えられる。書きかけて途中でやめた物語のように見えるこの章段は、従来、その性質がよくわからないものとされたきた。しかし、この章において、章段に書かれた内容を検討した結果、この物語の登場人物設定のような内容は、『うつほ物

語』の忠こそその物語を下敷きにしたものという結論を出した。中宮定子周辺で話題になっていた『うつほ物語』の設定を用いて、それを想起させた上で、新たな物語の冒頭だけ『枕草子』に書き、その物語の行方を想像させるという仕掛けになっていると考えられるのである。『うつほ物語』を用いるのであれば、定子周辺で話題になっていた仲忠・涼の優劣論争をなぜ利用しないのかという疑問も生じるが、この章段の前後には清少納言自作の和歌を語る章段群が存在しており、『うつほ物語』が愛好された定子周辺を意識しながらも、そこから少し距離を置くという姿勢が、このような現象を生み出しているのだと考えられる。そして、このような物語の受容態度は、従来『枕草子』や清少納言に対して言われてきたような表面的なものでは決してなかったであろうことがわかるのである。

第三章、第四章、第五章においては、このように『枕草子』と物語との関わりに注目しながら論じてきた。いずれも、論じてきたのは、『枕草子』や清少納言が物語をいかに受容しているかという点に留まらず、さらに、そのような物語引用が三卷本『枕草子』の論理とどのように関わっているか、という点である。いずれの章でも、三卷本『枕草子』においては、これらの物語引用は、章段配列と密接に関わっていることが明らかになった。このように見ていくと、『枕草子』中における物語の受容態度を検討することによって、それを補助線として三卷本『枕草子』の方向性について明らかにしていくことができるという見通しを得たというわけである。

特に、この三章の中でも、第四章の「また、業平の中将のもとに」、第五章の「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」のように、三卷本『枕草子』の終末近くに位置している章段の検討は、三卷本全体が目指すところを考えていく上で、重要になってくるであろう。なぜなら、同じ雑纂形態を取る三卷本と能因本の間でも、作品末尾に近い部分の章段配列は大きく異なっており、この部分の本文や章段配列について検討することによって、三卷本の特徴の中で重要な部分を明らかにできると考えるからである。

第四章、第五章で考察した結果、「また、業平の中将のもとに」は定子崩御後を想像させるものであり、「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」は、定子付き女房としての清少納言という方から距離を置くような態度が見られた。これらが三卷本『枕草子』の終末近くに置かれた時、それは、前後の章段を含む章段群として、定子崩御後に宮仕えを離れた清少納言という像を浮き上がらせる効果を持つのではないかと考えるのである。能因本と章段配列が異なる部分においてこのような像が存在するということは、三卷本の独自の論理を示したものと言うことができるのではないか。

第六章は、このような観点からまとめた論考である。第四章で「また、業平の中将のもとに」段を含む歌語りの章段群について考えた際は、この章段群の直前の二八六段「うちとくまじきもの」の航海の描写から、定子崩御後の時空は始まるものと考えていた。この点については、第六章においても述べており、第四章と重なる部分もある。しかしながら、その後、さらに前後の章段も含めて考察を進めた結果、この三卷本『枕草子』における定子崩御後を想像させるような記述は、さらに前の二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」からすでに始まっており、章段の連鎖の範囲をさらに広げられるという結論に至った。

この章段において語られている、宮仕え先から退出してきた女房のあり方についての理想は、三卷本の前後の章段配列の中に入った時に、宮仕えを辞した（作者）像を浮かび上

がらせることを述べた。この二八四段「宮仕へする人々の出であつまりて」は、「えせ者」という語の連鎖によって二八五段「見ならひするもの」、「一八六段「うちとくまじきもの」につながる。この後には、第四章で論じた「また、業平の中將の」を含む歌語り章段群がある。その次には「下衆」という連想でつながりながら定子の兄弟の話題を語る二九〇段「をかしと思ふ歌を」から二九四段「僧都の御乳母のままなど」までの章段群があり、その次が、第五章で論じた二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」である。そして、その直後で二九六段「ある女房の、遠江の子なる人を語らひてあるが」から始まる三段では、作者自詠の歌が語られ、その章段群の最後で、二九八段「まことにや、やがてはくだると言ひたる人に」で作者の下向を匂わせるような歌語りをもって、三卷本『枕草子』は幕を閉じるのである。

このように、第四章、第五章、第六章での考察の結果、三卷本『枕草子』の末尾近くに存在する複数の章段群は、語の連鎖によってゆるやかにつながりつつ、定子崩御後に地方に下る〈作者〉像を読者に想像させるように仕向けており、それが三卷本『枕草子』の大きな方向性のひとつだということが明らかにできたのではないかと思われる。三卷本では終末部に位置する作者自詠の歌語りの章段群も、能因本を見ればその後には多くの章段がさらに続いている。同じ雑纂形態であっても、三卷本と能因本の方向性の差は、この部分には大きく現れているのである。

また、第六章では、三卷本『枕草子』の冒頭部分も視野に入れ、三段「正月一日は」の本文について検討した。従来解釈が分れていた部分や、この章段末尾に存在する三卷本の独自異文について考察した結果、三卷本『枕草子』の「正月一日は」の段は、中宮定子付きの女房という〈作者〉像を示し、その〈作者〉が『枕草子』全体の書き手であるということ強く押し出す役割を担っていることがわかった。

このように、三卷本『枕草子』の〈始まり〉と〈終わり〉には、それぞれ、〈作者〉が、まだ宮仕えをしていなかった頃から、その後宮中に上がって定子に仕え、定子崩御後に宮仕えをやめて地方に下る、という一連の成り行きが配置されているのである。『枕草子』の数多くの章段は、内容的にはそれぞれが「断片」とも言えるものであるが、それをひとりの〈作者〉という存在によってつなぎ止めていこうとする三卷本の姿勢がそこには現れていると考えられ、それを三卷本『枕草子』の論理として認めることができるのではないかと考えた。

以上、第一章から第六章までの検討の結果、三卷本『枕草子』の編纂方針の一端を明らかにすることができたのではないかと考えるが、ここで取り上げることができた章段は、『枕草子』の中でもごく一部に過ぎない。引き続き、さらに多くの章段を視野に入れながら、三卷本『枕草子』の論理について考えていきたい。